

英國ローバーの研究

その1

I 緒論

1. 序説

最近わが国においてもローバー部門は年ごとに盛んになってきた。ことに、大学ローバーとか、職域ローバーといわれるものがあえている。これは注意すべき現象なのである。という理由は、本来のローバー隊は団ローバーであって、カブ、ボーイ、シニアの兄貴分として生まれ、そして団活動の電源としてその奉仕分野に尽すことが本務だからである。しかるに、大学ローバーや職域ローバーにはそういう弟分がない。したがって弟分に対する奉仕活動は他の団の弟分に対して行なうほかに手がない。こういう点だけからみるとたして正規なものかどうか、若干の疑問がある。大学ローバーは、外国にもその実例はあるが、職域ローバーなるものは他国にほとんど例がないから、これは日本独自のものなのかもしれない。

わが国のローバー隊の現勢はどうなっているか？ 試みに、昭和39年11月25日現在で調べてみた。

それによると――

大学R S	22隊
職域R S	28
地域R S	59
宗教関係R S	13
合計	122

団数にすると、116団（1団で2～5隊もある）で、そのなかでローバー隊だけ（カブ、ボーイ、シニアのない）のものは38団に及んでいる。これは全体の33%に相当する。（この点注目にあたいする。）

われわれはスカウト、ことにローバースカウトの数のふえることを喜んでいるが、万一それが原理をう

すめての結果であるならば、むしろ悲しみ、かつ憂うべきだろうと考える。ロード・ロウオーランのことばによると「ローバーは本運動の電源である」。それほどローバーというものは運動全局の盛衰を左右する。それゆえに、その本質については勉強されなくてはならないと思うのである。

2. 研究上の方法

それでは、ローバーの本義（原理）は何によって研究したらよいのか？

もちろん、創始者ペーデン・パウエルの意図を探り、その原理に基づいて発達してきた英國ローバーのたどってきた道を学ぶほかはないと考える。英國以外の国では、カナダとかオーストラリアなどが、ローバー部門を忠実に行なっているが、それはやはり英國のシステムに従っている。米国にはローバー部門はないので学ぶべきものはない。

そういうことで、この研究は英國ローバーの研究という形によらざるをえない。けれども日本が英國と同じようなローバーリングができるとは思わない。その国情なり風土なり大いにちがう点があるから、英國産の種子をとりよせて播種しても日本の土壤ではその通りのものの発芽は不可能である。われわれはただその原理を探り、それによって日本の土壤で育てる方法を打ち出すことによってのみ伝播は可能だと考えている。

そういう方針で、私はこの研究を進めてゆくつもりである。

3. 参考書

1. Rovering to Success (B-P)
2. Ideas for Rover Scouts (Jack Cox)
3. Policy, Organization & Rules (B.S.A.)

4. Running a Rover Crew (B.S.A.)
5. Rover Scouts, —what they are and what they do (B.S.A.)
6. Ceremonies of the Scout Movement (Ken Stevens)
7. The Presentation of a Rover Scout (B.S.A.)
8. Handbook of Wood Badge Preliminary Training for Rover Scout Leaders (Gilwell Park)
9. The Religious Obligations of Scouts (B.S.A.)
10. Scouting, Religion and the Churches
11. The Scout Movement (Reynolds)
12. B-P's Scouts (Henry Collis, Fred Hurll, Rex Hazlewood)
13. 青年健児教範（日連、旧訳本）
14. Scouting for Boys (B-P)
15. その他
 - (1) Rover Rambler (Canada)
 - (2) Plan for Rover Scouts (B.S.A.)
 - (3) Rover Scout Organization and Training (1956, B.S.A.)
 - (4) Badge Revision(1958, March, "The Scooter" 付録) (B.S.A.)

(付記……B. S. A. とは英國連盟の略号)

4. 本稿を書きながら考えたこと

1. 英国では最初シニア部門を作ることを考えたのであった。それがなぜ、ローバー部門に置きかえられたのか？
2. ローバーリングには定義がある。われわれは、この定義を知らずに、あいまいなローバーリングをやっていたのではないか？
3. われわれには奉仕ということの根本がわかつてないのではないか？
4. 英国が今日、整備したローバー部門をもつに至るまでに何回も試行錯誤をやったこと、そしてやり直したことを、われわれはどう見るか？ またそこから何を学ぶべきか？
5. われわれがローバーリングだと考えているものは形だけのもので、質的には何も知らないのではないか？

6. すなわち、その若人の年令がローバ一年令に該当しているから「君はローバーだ」と、いとも無造作に上進させたり入隊させたりしてはいないだろうか？
7. 大学RSは学内のサークル活動の形をとっているものが多いが、それはサークル活動としては満足すべき成果をあげていても、スカウティングの面ではたしてローバーリングのデューティを果たしているかどうか？
8. 職域RSは企業体の「入づくり」の一方法として作られた例が多く、本人の自発活動に出発した隊が少ないことを思うとき、それがはたしてスカウティングとして伸びうるかどうか、この点問題にならないだろうか？ また、それが企業体の厚生当局の意図によってレクリエーションに終ってしまう心配はないだろうか？
9. わが国においては現在、ローバースカウトに対しても、そのリーダーに対しても、規約の面でローバーリングを説明しているだけで、ローバーリングの定義（原理）、目的、方法（課目、運営）などについての刊行物がなく、講習、研修、実修のコースもなく、ひたすら暗夜行路の状態におかれている。そのようなことでよいとはだれも思っていないだろう。にもかかわらず自発的にこの不備を訴え、立ちあがって日本ローバーリングの確立に努力しようと志す者があらわれるのはなぜだろうか？
10. こういうことは、英國では全国総会とは別に年次公開会議あるいはローバームートなどの機会に討議されているが、そういう集会をもつ必要はないだろうか？ もっともローバームートは毎年のように実施されているが、こういう線で実施されているかどうか？

等々、頭の中の仮説として描き考えている。これらはすべて英國のローバー史を調べた結果生まれた疑問なのである。

II 英国ローバー部門の歴史

1. 前　　言

本誌のような限られた紙数の中で、ことさら英國ローバー部門発達の歴史を長々と述べることは適切で

ないだろう——と、一応は考えたのではあるが、レイノルズ著の「The Scout Movement」および、コーリス、フィール、ハズルウッド三氏共著になる「B-P's Scouts」——これは英國連盟史だが——を精読した結果、ローバーの本義をつかむ上に参考となる点を多々発見したのでその要約だけでも記すことにした。

この両著によると、英國のローバーリングが今日みるような整備された形および内容になるためには幾多の試行錯誤をくりかえしたことがわかる。それはまさに暗夜行路の「彷徨」に始まり、「討議」の限りを尽して打開したものであった。しかも、驚くべきことは、最初はシニア部門の開発が主眼だった。それがローバー部門の開発に置きかえられたということである。

(シニア部門は、ようやく、1946年すなわち、B-P歿後5年に開発されたのである。)これを暗夜のハイキングにたとえていうなら、A地を目指して出発したのに到着したのはA地でなくてB地だったということになる。

私はこの点を究明するためにも、英國ローバー開発の歴史を諸君に語らねばならない。

デンマークが生んだ思想家キエルケゴール(1813~1855)はいう——「人間は、歴史においてその生き方を学ぶ」、「人間は、前向きに生活しなければならないが、人間の生活は、過去を回顧して初めて理解される」米国の哲学者サンタヤナ(1863~1952)はいう——

「歴史を忘れた者は必ず失敗する(亡びる)」

また、英國の史家アーノルド・トインビー(1889~)は——「歴史の教訓は、苦難を経て学びとられる」と。

私はこの3人のことばにむちうたれた。そして英國のローバー開発の歴史を読みながら、これらのことばが真実であり、その真実に対して、私は自分自身が史学徒であるという良心から、忠実なノートをとらざるをえなくなった。

レイノルズの「The Scout Movement」の、119、120、129、131、149、151、176、186、192、202の各ページ、英國連盟史ともいるべき「B-P's Scouts」の80、84~87、96、112、123、127、132、188、190、191~193、264、269、272、275、279、286、290、298、295、300の各ページ、これらはみなローバーについての重要な資料であるからノートした。

このほかに、シニア部門の開発があとまわしになつた事情を探るための資料として「The Scout Movement」の98~101、213~216ページ、「B-P's Scouts」の154、155、188、263、283、286の各ページからメモを作った。

これらによって、何回かの資料整理をした。前記2冊の本は主として、公開会議、ローバームート、コミッショナー会議、および国際会議と国際ローバームートにおいて討議されたり決議されたローバー関係事項をほとんどもなく採録しているのでたいへんありがたい。

したがって、同じ内容が両方の本に出ていることが多い。けれども、執筆者の史眼は必ずしも同じではないから、対照して読むと別の興味が出る。私はともすると歴史研究者としての自分本来のペースにひきずりこまれそうになった。けれども、本稿の全体からみれば歴史的研究はその一部分たるにすぎないので、これにあまり溺れてはならないと自分にいいきかせたのである。私の資料整理がヘタであるならば、読者に多大なご迷惑をかけることになろう。何しろ大判の大学ノート4冊になったこの資料をどう整理すべきか?

2. 第1次大戦を頭において

「スカウティング・フォア・ボーイズ」は、1908年3月に全巻が刊行された。これは11~14才の少年を対象としたスカウティングにとどまっている。その年(1908年)11才でスカウトになった者は、1912年には15才になる。ところが、15才の者に対するスカウティングは、まだ考えられていない。

ここにおいて、ふたつの問題がわいてきた。

①は、15才以上の少年に何を与えるべきか?

②は、11才以下の少年の要望に対しても何か与えないわけにいかないが、これをどうするか?

ということである。

このうち②については、1916年、ウルフカブ部門が開発されて解決された。けれども①の方は方策がたたないままに、1912、1913年と月日はたってゆく。その結果として——

- 14才以上になるとスカウティングから離れる者がふえる
 - 幸いに隊に残ってくれるのはうれしいが、そのため11才児の収容人員が制限される(スカウト隊は32人がその限量であることが望まれるから)
 - 15才あるいはそれ以上の者で初めてスカウトになりたい者を入れる組織がない
- という現象を呈した。

そして、1914年、英國は第1次世界大戦に突入した。指導者の多数は従軍した。少年隊は班長とその会

議（名誉会議）によって、けなげにも活動を持続している。初めて婦人の隊長（Lady Scout-master）が出現するという事態まで事情は急迫した。

一方、大戦によってスカウティングの重要性はいっそう世人に認められていった。軍当局もその統後の活動を期待し、年長スカウト、青年スカウトの制度を考えるべきだと声が、こういう時点からも叫ばれるようになつた。

さて「Rovering to Success」が刊行されてローバー部門が指向されたのは1922年である。この間の年表を作つてみると――

1914 (大正3年)	第1次世界大戦に参戦
1915 (4)	
1916 (5)	ウルフカブ部門開発 「Wolf Cub's Handbook」刊行 ローランドハウス開館
1918 (7)	ローバー部門発足
1919 (8)	ギルウェルパーク開設
1920 (9)	第1回ジャンボリー（ロンドン） B-P、世界の総長となる 国際事務局発足 国際会議新設
1921 (10)	日本東宮殿下、ロンドンでB-Pと会見せらる
1922 (11)	「Rovering to Success」刊行 この年、日本連盟結成

ということになる。これによると、ローバー部門の発足は1918年という年であり、その4年後に「Rovering to Success」が出刊されたのである。

このように、年表だけを見ると、ローバー部門はきわめて順調に誕生したようにみえる。けれども事実はそうでなく、その前年の1917年、一応、出産するかに見えた草案は日の目を見ずに流産しているのである。

3. 1914年の公開会議

これはマン彻スターで開かれたのだが、その討議の一つとして、シニアスカウトを設けるかどうかがあげられた。この時はまだカブ部門はなかったのでスカウト部門に次ぐ第2番目の展開といわれていた。レイノルズは次のように書いている――

B-Pは本運動の第2番目の展開としてシニアスカウトのことを前から考え、そのことで彼の心はいっぱいだった。彼は自分の目的を次のように打ち出し

たのである。

- ①少年たちが隊（スカウト隊）をはなれて社会に出陣するにあたり、その各人を互いに接触させかつ本運動から手の届くよう少年たちをつかむため
 - ②スカウトとして彼らが教えられた良き市民性の観念を保持させるため
 - ③スカウトの経験のなかった若者たちを本運動にひきつけて國のため奉仕する機会を与えるため
- これらの目的で、シニアスカウトを始めたいというのであった。

この実行の第一歩はどういうものだったろうか？

4. 国民健康保険と友交協会の枠内の展開

レイノルズは「この第一歩たるや、現在からみると、まことに驚くべき第一歩であった」と評し、次の説明をしている。

1912年、政府は、国民健康保険（National Health Insurance）を発足させ、その事業に協働させるため友交協会（Friendly Society）を設けた。この指示に従って、かつてスカウトだった若人たちでスカウト友交協会を作った。これは、保険法（Insurance Act）が要望したことを行つたことになる。これが成立したのが1914年3月である。この協会は各地に組織と集会所をもつた。集会所はロッジ（lodge）と名づけられた。そのロッジで事務をとり、討議をすることによって仕事上の運営の勉強をした。選挙による委員会があり、それを通して地方自治体のための訓練場が作られた。B-Pはこの枠の中に年長またはオールドスカウトの計画を適合できると思ったのである。

かくして、スカウト友交協会は「キャンプ」を組織した。普通の友交協会が「ロッジ」というところをスカウト友交協会は「キャンプ」といいかえたわけである。その最初のものは、ロンドンのイーストエンドにあったトインビーホールにおかれた。ルーキス博士（Dr. T. S. Lukies）がその会長になった。これは第1次大戦の勃発によってその発達はじゃまされたが、一般人の友交協会の方はその機能を制限することによって継続された。この大戦が終るまでに、われわれは別な構想によってシニア、スカウトの考え方をいかに考えなおすかを知ることになった。

そうこうするうちに、第3番目の展開とみられていたカブ部門の方がさきにできた（1916年）。これは「Junior Scout」だの、「Beavers」だの、「Nippers」だの「Colts」だの、「Trapper」だの、いろいろの名

前が候補にのぼったが、南アフリカの土人がすばらしいスカウト斥候のことを「Wolf」とよんでいることから、スカウトの（オオカミの）仔という「Wolf Cub」と命名されるにいたった。

5. 1917年案

ウルフカブ部門の発足に刺激されて翌1917年にはシニアスカウトに関する考え方について数種の見解が発表された。11~14才の者にとってはカブというものは赤ん坊のゲームのように感じられたが、15~16才の者にとっては赤ん坊と感ずることにはかわりはないが、この赤ん坊から要望をうけたのである。この要望が年長の少年たちをひきつけたのである。それはカブの指導にたずさわってほしいという要望なのである。この要望が年長の少年たちにとって決定的な身分と魅力となる。B-Pはまたいう。年長スカウトの必要性はこれによっていっそう起つた。それゆえ、別の訓練を考えねばならない——と。

また、スカウティングとならんで一連の「学習」(Study) を設けることによってスカウティングとタイアップさせようと決定した。学習によって少年たちの商売なり事務に関する知識をふやそうとするものであった。この提案には、2つのアイディアがその背後にあった。その1は、少年たちに仕事上のよい資質を得させようとする考え方であり、その2は、スカウティングと仕事をその心に連結させ、そして望むらしくは今までのすべての交渉から脱け出そうとするような考え方の発達するのを防ごうとするものであった。

この案の主な条項は次の通りである——

(1) シニアスカウトは1級スカウトであろう。

15~16才のスカウト、彼らはシニア班を作る。

自分のツループ（少年隊のこと）に属す。

ある場合には単独班または特別ツループとして地区コミッショナーに隸属するよう忠告されるかも知れない。

年上のスカウトをこれらの班に推し進める力はツループにおいてその推進をはかるものとし、しばしば、きわめて徐々にされる。それはシニア班に残る年上のスカウトたちが班長と副長の間の階級についている場合、その推進を急がないからである。ただし、ツループのもっている執行力を上回ってはならない。その執行は特に権威づけられた者がない限り、スカウトマスターによってなされるものとする。

- (2) シニア班はある計画が年上の少年に興味をおこさせて引きとめたい場合、または専門化を励ます場合に発足することができる。
- (3) 特別作業、ゲームおよび学習は彼らに開放される。これらはスカウトの基準よりも高度な基準の技能章として名前をつける。
- (4) 各班は公共奉仕の任務のためスクワッド (Squad……チーム) を作る。学習のためにはクラスをまたゲームや対班競点のためにはチームを作る。
- (5) スカウト制服を着用し、ハットに特別の飾りをつける。
- (6) リーダーは班が選挙する。そしてアシスタントスカウトマスターの階級の者をおくことになる。彼はゲームのキャプテンとなり、クラブの運営、体育運動および公共活動、学習などの長となる。
- (7) 学習は通信学級を通じて実施し、できれば工業学校で行なう。
- (8) バッジ（技能章）はテストによって賞与する。バッジは受賞者に免状と同じ役をする。バッジは雇主の眼にその能力を認めさせるものである。この目的のため免状 (diploma) を授与する。

- (9) 班（複数）は付属的にアシスタントスカウトマスター（少年隊副長）の訓練センターを作り、スカウトマスターを助けてツループ（少年隊）運営の助手がつとまるようにする。
- (10) 地方連盟は、できれば、これらの班のため社会的目的に入用な土地財産を探したり、職業紹介所 (Employment Bureau) をひらいて援助や相談にのる。

以上である。

この1917年案はけっきょく失敗に終つた。

その理由は、

- ① 世界大戦中という悪い条件
- ② 学習にかたより、スカウティングが稀薄
- ③ 文部省がするような点まで手を出した

からである。

これについては、1918年のフィッシャー法のことにについてもふれねばならない。

——この項つづく—— (中村)

今月号から新しく連載することになりました
「英國ローバーの研究」はいかがでしたか。
次号からの展開にご期待ください。

英國ローバーの研究

その2

II 英国ローバー部門の歴史

6. 1918年の学制改正による波紋

1918年、Education Act. (教育法) という法令が発布された。これは、フィッシャー (Fisher) の法といわれるもので、日本流にいえば文部省が出した法令である。フィッシャーは文部大臣のような地位にあったのである。（注、前記のフィッシャーと同一人だろうと思われる）

この法令は、少年は例外なく、14才で学校から出て行く、ということを規定した。これまでの規定では、少年たちは、14才になる前に就職の許可を得るならば中途退学してよかったです。新令はこの中途退学を禁じたのである。ただし、ここでいう学校とは初等学校のことである。

従来、許可さえとれば就職のため中途退学ができたということは、スカウト隊の少年スカウトの員数に相当大きな影響があった。これが、この法令によって、とにかく、14才までは在学を義務づけられたために、離隊が防げることになる。

初等学校においてさえ、そうだったので Secondary School (仮りに中学校と訳す) の在学生にしてスカウトに入る者は多くはなかった。レイノルズ氏は、この新法令によって、中学校にもスカウト運動がひろがるにいたったと述べている。そしてそういうスカウトは、中学校を卒業しても16才までは少年隊に残りたいという。

また一方、初等学校だけで、就職したスカウトたちは、社会に出てみると急に自分が大人になったような気がして、少年スカウトと一緒に遊ぶのは子供っぽい、ばからしい、と考えて離隊するようになる。

どちらにしても、16才以上のスカウトに上級部門を設けてスカウティングを継続させる方途を考えねばな

らなくなった。

その上、いまひとつ第1次世界大戦によって教育界も新しい企画を促された。そういう事情もあった。

B-Pは、このことについて、フィッシャー(文相)と会談した。その結果、最初の、シニアスカウト計画というものが、ある形を作るにいたったのである。このように見えてくると、このフィッシャーの教育令は、ひとつの波紋をなげたことになる。

7. 大戦の教訓

第1次世界大戦 (1914~1919) は、スカウティングに大きな試練を課した。スカウトは、はたして、大戦中でもそのちかい（プロミス）と、おきて（ロー）の示す通りに、国王や、国に対するデューティ（つとめ）を実践できるかどうか？ 他の人々を助けるかどうか？ ゴッド（神）のおぼしめしの通りに、その難局を生き得るかどうか？ 等々……。

由來、スカウトは平和の斥候であるといわれる。戦争のための斥候ではない。戦争屋を養成するのではない。けれども、平時において磨かれたスカウティングが、もし戦時に役立たなかつたならば、それはおかしい。なぜなら、自分の国王、国土や同胞が危険にさらされているのを、だまって見ていることになるからである。

スカウティングが生まれて以来、はじめての大戦！ スカウティングは、はたして役立つであろうか？ 英国の参戦は、1914年8月4日であったが、B-Pはその3日前に陸軍省に電話してボーイスカウトの配置を申し入れている。B-Pは次の戦時奉仕をあげた。

- (a) 橋梁、地下水路、電線などの巡察（パトローリング）と護衛。これはスパイによる破壊に備えて行なう
- (b) 補給、輸送などに関する情報の蒐集
- (c) 住民への注意書の配布および兵舎割当、徵発、警報などに関する任務

- (d) 住民たちの間に組織された救済法案の実施
- (e) 乗り物、信号、無線などによる通信の実施
- (f) 防衛軍務に従事する者の家族、病人、負傷者への援助
- (g) 救急所、包帯所、看護所、避難所、施薬所、無料食堂の建設、そのクラブルームの建設
- (h) 案内人および当番兵などの代役

シーズカウトは――

入江、河口、港の監視、浮標のない運河における船舶の案内、または味方の船舶に灯火による案内など。沿岸防備の支援

これらの軍役奉仕は、これまで経験しなかったものであったが、平時の訓練による能力が遺憾なく発揮された。そして、その成功は、いよいよ、もっと体力のある年長スカウトの必要を要望されたのである。

さて、1918年という年は、すでに大戦末期であるが、この大戦による世情の混乱は、青少年の不良化を激増させた。英國はかろうじて敗戦をまぬがれたものの、そして第2次大戦の時のような空襲による被害こそなかったものの、経済界の不況は爆弾以上の損害を与えた。青少年の不良化はその渦中に増大した。ここにも、年長スカウト部新設の要望がおきたのである。

8. 1918年、ローバー部門生まれる。

それをめぐっての三つの疑問

われわれは “Rovering to Success” が発行された1922年をもってローバー部門の誕生だと考え易いのであるが、どのスカウト年表を見ても1918年をスタートの年としている。そこで私は、次の三つの疑問をもつにいたった。

- a. なぜ、1918年をもってスタートの年とするのか？ この年はフィッシャー法の発令によってスカウティングは大きな波紋をうけた年であった。何故に、急に誕生したのだろうか？
- b. 1918年を発生の年とするならば、「ローバーリング・シー・サクセス」が出版された1922年までの4年間、何に則ってローバーリングを実施していたのだろうか？
- c. 生まれるべく期待されていたのは、シニア部門であったはずなのに、うぶ声をあげて生まれたのはローバー部門だった。この突然変異は何によるものと解したらよいのか？

以上につき、レイノルズ著 “The Scout Movement” および、英國連盟史 “B-P's Scouts” その

他の文献を台本として探ってみたい。

9. ローバーの登場

英國ローバー部門の新設を推進した立役者は、バー(Ulick de Burgh) 陸軍大佐であった。彼は1917年3月、マトロック・バスで開催されたコミッショナー会議においてローバースカウトに関する所見を述べた。その時、同席していたクラム少佐(Major Crum) はローバースカウトと少年兵(Cadets)とのちがいを述べ、満場の失笑を買ったという逸話がある。

この会議には、B-Pも出席していて「年長のスカウトの保有とその訓練」と題するセッションを受け持った。その対象は15才および15才半から18才に至る少年ということであった。B-Pのこのセッションによってこの会議は一筋の光明を見出し、バー大佐は年長スカウト担当の最初のコミッショナーに任命された。このシニアという名称は、まもなくローバーと改称された。（“B-P's Scouts の84ページによる）

この本にはネビル(P. B. Nevill)の所見がのっている。その内容は、この人がバー大佐の仕事を助けたこと。バー大佐はローバースカウトの規則を作る仕事にすこぶる忙しかったこと。自分は8月にその規則の草案を貰ったこと。その草案の中にローバースカウトの肩章(ショルダーノット)の色を黄と緑と赤の三色にしてあるが、自分は黄(カブの色)と緑(スカウトの色)の二色を主張した。これに対しバー大佐は賛成してくれ、彼の規約案を書きなおした――というようなことが書かれている。

以上によって、英國ローバーの最初の企画は主として、バー大佐の手になったことがわかる。

バッジ(課目)の編成、技能章免状の制定(これは雇主にスカウトが見せるためのもの)などに及んでいく。

この1918年末、英國ローバースカウトの数は1万人に達したといわれる。ただし、この数は公式のものではない。1923年までの公式の統計は次のようである。

1919年	5580人
1920年	7263人
1921年	7638人
1922年	8938人
1923年	11603人

ギルウェルパークを発見したのは東ロンドンのローバーたちだった。それは1919年イースターの日だったと記録に残っているから、当時、すでに正規のローバー

ーが奉仕活動を開始していた証明となる。

バー大佐は、この仕事の過労が原因で2年後、死去した。そしてネビルがその後任となって1929年までローバー担当本部コミッショナーをつとめた。

以上によって私は、先きにあげた疑問の第1と第2を次のように解くことにする。

- a. ローバー部門の出発の年を1918年としたのは、ローバー担当の本部コミッショナーの任命（バー大佐の任命）を起算の根拠とするからである。そして、その発端は1917年のマトロック・バスにおけるコミッショナー会議がその導火線となったと解釈する。
- b. 1922年、「ローバーリング・ツー・サクセス」の発刊までの、ローバーリングは、主として、バー大佐作成の草案によったものと解釈する。

“B—P’s Scouts”の86ページによると、この頃B—Pは旅行が多く、そのためローバー関係の作業はバー大佐に一任していたという。なるほど、年表によると1919年、B—Pは米国とカナダに旅行し、1921年にはインドに旅している。B—Pがいかに、バー大佐に信任の念をよせていたかは、彼を“Dear old de Burgh”（バーおじいちゃん）とよんでいたことでも、よくわかる。このおじいちゃんは、健康を害し、1921年10月の、ローバー関係リーダー会議にも欠席した。この会議によってルールやテストが決定され、そのため1923年版のP. O. R.（英連規約集）が改版になった。

バー大佐は1922年11月、この世を去った。それは、“Rovering to Success”が出版されてから2ヶ月後のことであった。

10. なぜローバー部門と称したか

前述したように、スカウト運動の第3番目の発展計画は、シニア部門の始発だとされていた。（実は、第2番目がシニア部門で第3番目がカブ部門であったのだが、カブの方が追い越してさきに生まれた）しかるに、第3番目に生まれたのは、ローバー部門でシニア部門ではなかった。これはどういうわけなのだろうか。

この疑問に対して、私はできるだけ、文献を調べた。けれども、その真相を語るものは全然見つからない。これはどうもシニアスカウティングというものの本身にいろいろの見解の相違があり、幾度会議にかけても意見が一致しなかったからだと解される。そこでシニア年令の者をふくめた部門——をローバー部門と名

づけて妥協したものだらうと解される。

ギルウェルパークから出した“Senior Scout Leaders Part II Wood Badge Course”——のD. C. C.用ハンドブックの43ページに——

“Opposition to this Senior Scout Scheme caused the Chief Scout to drop it and little reference is made to it until Lord Somers’ Post War Commission (1942~3)”

という文がある。これは、シニア部門に対する反対者が相当あって、それがB—Pを動かしてその計画をやめさせた。そして大戦後、ロード・ソマースがチーフスカウトに就任するまで（1942—3）なんら、シニアについて言及しないことにした——というのである。

ある文献によると、B—Pの本心はシニア部門の新設にあったのだが、反対意見が強かったので、名を棄てて実をとる——という、寛容の美德から、賛成の多かったローバー部門という名称にし、その中にシニア年令（15~18才）の者をふくめることにしたという見方である。

今日においても、シニア部門を設けない国がいくらかある。たとえば——

英国内でも、スコットランド

英國系のカナダ、オーストラリア（ただし、ビクトリヤ州を除く）

米国（これは、エクスプロラーという独特のものを設けている。そのかわり、ローバー部門はない）

なぜ、シニア部門を独立させていけないのか？
その理由はわからない。

ロード・ソマースの時代になって、1946年シニア部門が独立したその事情についてはあとの方で説明したいと考えている。とにかく、B—Pの生きていたあいだは実現しなかった。（B—Pは1941年1月8日死去）

なぜ、B—Pが所信をおしとおさなかつたのかーと批判する者もあるそうだ。一方では、その謙讓の美德をほめる人もあるという。

11. 対象の年令

現在の規約では、ローバーの年令は最低17才（規約264）最高24才まで（規約272）となっている。また、シニアスカウトは最低15才そして最高は18才の誕生日までである。

然るに、年令については、当初、まだきめ手がなか

った。最低を15才あるいは15才半にすることは大体一致していたが、その上限については一致せず、16才だの、17才だの、17才半だの、いろいろ意見があった。これは、シニア部門を作ろうという案だったからだろう。

それが、ローバー部門として生まれた。その教本が「ローバーリング・ツー・サクセス」である。そうなると、「ローバーリング・ツー・サクセス」は、15才から24才までの若者を対象として書かれたことになる。従って、この本はシニアとローバーの両部にまたがるものと考えてよからう。少なくとも同書の初版本はそうであった。

1946年10月、シニア部門が独立し、シニア用の、「Look Wide」が出版され、1948年に“Senior Scout Handbook”が刊行されるまでは、“Rovering to Success”はシニアスカウトの教本をも兼ねていたのであろう。

日本連盟が戦前（大正15年7月）これを「青年健児教範」という名前で全訳出版した時の原本はおそらく初版本だったと思われる。その巻末の「ローバーリング」（訳本は遍路と訳している）の章を見ると、現在の原本とちがっている部分がある。当初の進級課目が載っている。技能章課目も記してあるが、その内容は、少年1級課目に毛のはえたようなもので、明らかに、15才、16才向きのものである。

以上の見方からすると、ローバー部門という名称にはなったが、その内容は、シニアスカウトとしての領域が多分に含まれていたことがわかる。

現在のローバー部門は、1956年4月1日の改正によって、名実共に、18才以上の青年に絞った教科目になっている。これは、1946年シニア部門の独立後、その10年間の実験によって、ローバーらしく組み替えられたと考えられる。

当初におけるローバー部門は、シニア部門プラス、ローバー部門だったことが、以上の推理によつてはっきりする。

12. “Rovering to Success” の刊行

レイノルズ著 “The Scont Movement” の120ページを見ると、次の文がある。

The greatest set-back, however, to immediate progress was undoubtedly the failure to find someone to replace Colonel de Burgh to guide the Rover Scouts during the formative

period. The publication of “Rovering to Success” in 1922 helped to bridge the gap, but it was not a training handbook on the lines of “Scouting for Boys”, it was a book of wise advice to young men.

この文章は——この形成期の大変な時期に、病氣のバー大佐にかわってローバースカウトを導く適当な人を得ることに失敗したのは疑いもなく大きな頓挫でそのため進歩がおくれた。そういう時、1922年に “Rovering to Success” が出版されたことはこの穴をうめる大きな助けとなった。ただし、この本は “Scouting for Boys” のような訓練用のハンドブックではなく、若い人たちに賢明なアドバイスをする本なのである。——という説明がある。

以上の文は、ローバーリング・ツー・サクセスという本の、出版の意義およびこの本の性格を明らかにしたものである。当時、この本の出ることが、どんなに待望されていたかがわかる。そしてこの本は、B-P自ら筆をとった最後のスカウト書なのである。時にB-Pは65才、青年に与える書——を書くに不足のない年令であった。

この本は、序文、貧富にかかわらず幸福を得るには、という総論があり、次に若人が早晚出あうべき5つの暗礁——馬、酒、女、郭公と欺瞞、無宗教——についての人生観、處世観を説き、結びのことば、そしてローバーリングと題する解説——から成りたっている。

ここで、ローバーリング (Rovering) ということばをB-Pが用いたわけを考えてみたい。英語 Rover は、徘徊者、流浪者——と訳されている。日本ではこれを遍歴者、遍路者などとも訳した。すなわち、旅人なのである。人生の旅人である。旅人はむろん青年に限らない。男に限らない。けれども、未知の人生行路を自分の全力をかけて最上に最善に旅するには、幾多の冒険、力だめしを必要とする。そこに若人のビジョンがあり、ロマンスがある。そしてこれは、ひとつのゲームでもある。また、プロジェクトもある。こういう寓意からB-Pはローバースカウトと名づけたのであろう。

「自分のカヌーは、自分で漕げ」——これがこの本の全巻を貫く根性となっている。表紙のカバーにも、カヌーを漕いで激流をさかのぼる青年の姿を描いた彩色絵がある。

1922年9月初版、P. 242. London : Herbert Tenkins 社発行。

13. B-P 死後の改正

1941年1月8日、英国のチーフスカウトであり、世界のチーフスカウトでもあったB-Pが死去すると1月29日、ロード・ソマース (Lord Somers) がチーフスカウトになった。ただし、これは英國のチーフスカウトであって世界のチーフスカウトは、依然としてB-Pである。

ソマース卿は、1944年7月、死去するまで、第2次世界大戦を取り組んで大きな業績を残した。彼のフルネームは、Lord Arthur Herbert Tennyson Somers Cocks である。

彼の業績のひとつに、シニア部門の創立計画があった。けれどもその創立は、彼の死後の1946年で、時のチーフスカウトは、ロード・ロウォーラン (Lord Rowlan, 1945年2月22日就任、1959年9月に Sir Charles Maclean に渡す) だった。

(a) シニア部門創立の事情とその影響

レイノルズは、その必要性をスカウトの離隊数から説明している。すなわち、

	1943年3月末	1944年3月末
14才以下のスカウト	…141,640	140,100
14才～15才	…	36,281
15才以上	…	32,409

彼は、14～15才の者が減少する傾向を指摘している。

ロード・ソマースもこれを憂い、1943年の“Scouter”誌に一文をのせている。その要旨は――

自分は、B-Pが静養のためケニアに出かける前にこのことをB-Pに語った。B-Pも、いかにして年長のスカウトをひきとめるかについて苦慮していた、というのである。ソマースは、その対策として、シニア部門の新設をあげた。回顧すれば、1916年にB-Pが考えたシニア部門（15才～に始まる部門）の新設の計画が、葬られて、17才に始まるローバー部門が設けられたことは、かえすがえすも不幸だった――と、いうのである。（レイノルズ本214ページ）

もう、15才にもなれば自分たちは、boyじゃない。だから、boyの隊に残る気がしない――誠に簡単明瞭な理由である。

ここにおいて、シニア部門設置委員会が作られ、その草案が1943年5月号の「スカウター」にのり、7月、これをテーマとして州コミッショナー会議で討議、さらにそれを修正して実験を行ない、1946年10月シニアスカウト部門としてボーイスカウト、システム

の1部門となつた。

この時のシニアスカウティングの原理と方法はレイノルズ本の215～216ページに出ている。幸い、訳文が「スカウティング」にのっているから参考されたい。

要するに、1946年シニア部門新設によって、これまで、半分シニアリングに足元をとられていたローバーリングが、本来の成長をするようになったことはいなめない。

(b) 英国のローバーリングを推進した、2つの翼

今や、英國のローバーの歴史についての解説を終るにあたって、特にあげておきたいのは、その推進に大きな力を与えた、二つの翼についてのことである。

それは――

ローバームート (Rover Moot) と

公開会議 (Open Conference) という翼なのである。

ローバームートは

1926年 ロンドン、アルバートホール

1928年 バーミンガム

1930年 スコットランドのアウチエンギルラン

1931年 第1回世界ムート、スイスのカンデルスチック

1935年 第2回世界ムート、スエーデンのイシガレ

1939年 第3回世界ムート、スコットランドのモンジー

1949年 第4回世界ムート、ノールエーのスクヤック

公開会議 (ローバー関係) は、

1921年

1924年

1928年 前記ムート期間中

1930年 同上

なお、公開会議は、毎年1回全国総会とは別に開かれ、一線指導者の進言を受け入れている。

こういう、相互の意思疎通が、ローバーリングの発達の電源になっていると考えられる。

1921年の公開会議は特に重要な会議で、この時に、ローバー部についての方針が打ち出された。これには、B-Pも元気で出席していた。この会議で討議された事項は次の通りであった。

1. ローバーの目的は何か？

(a) 年上のスカウトをスカウト隊の1部にとどまらすのか？ それとも

(b) 別の部門を設けて、スカウト従事者 (Scout

- workersとして訓練するのか。
その年令の制限はどうする?
ローバーとして残る者に指導者免許状(Warrant)を授くべきか?
2. オールドスカウトたち用のクラブを作ることは望ましいが、ローバーにおいても同じかどうか?
 3. ローバーの定義を何にするか?
 4. 制服は?
 5. 訓練とバッジは?
- 以上に対しての決議は次の通り――
1. 目的――年上の少年を少年隊にひきとめてローバー班とする。
年上の少年に対する訓練は、作業場(works)とクラブにおいて行なう。
18才以上の者を、スカウトオフィサーとなるよう訓練する。
年令――17才以上。
指導者免許状――ローバーとして残ることができる者には免許状を授ける。
 2. ローバーたちを会員にできるようなクラブの設置をオールドスカウトに奨めるようしたい。
クラブ員の最低年令は18才。
 3. ローバースカウトとは、17才またはそれ以上の年上のスカウトである。ボーイスカウトと同じプロミスをし加入のセレモニーをせねばならない。
 4. 制服は変わることを望む。

- 5.(a) 新入りローバーのテストは、ボーイスカウトのテストのテンダーフットの2級のテストの結合したものとなろう。
- (b) 1級ローバーのテストはボーイスカウトのそれと同じ方針で行なう。ただし、よりきびしい出題内容とする。
- (c) あるスカウティング課目の中に、特別のバッジ1個をとれるようにする。
- (d) ローバーはボーイスカウトに課せられる標準よりも高い水準でキングス・スカウト章をとることができる。

これは今より44年前の決議である。今から見れば、きわめて初步的のものであるが、ローバーは正に、1日にして成らず、何回かの試行錯誤を経て大成するものであることを教えてくれる。

1914年のマンチェスター会議で多数の離隊者対策を討議して以来、1917年のマトロック、バスの会議でニア部門新設案が提出され、2度の世界大戦に影響を蒙って、1956年英国のローバーリングは40年間の試行錯誤を経て、今日の形になった。

以上で英國ローバー部門の歴史を終りたい。

× × ×

次回から、ローバーリングの定義、原理、方法、組織……セレモニーなどの解説にはいりたい。

(中村)

ペンパル紹介

L.R. Henley (スカウター)

国名：オーストラリア

希望：テープレコーダーによりスカウティングの
情報交換

Rose Williams (36才、カブ隊長)

国名：ニュージーランド

(Mrs.) Eileen Gee (39才、カブ隊長)

国名：ニュージーランド

趣味：美術、室内装飾、編物

上記の方々が日本の指導者との文通を希望しております。ペンパルを希望される方は、

氏名(ふりがな)、年令

住所(ふりがな)

所属国、隊名(ふりがな)、役職

使用する言語

その他 趣味、希望

などを明記の上、日本連盟にお申し出下さい。

英國ローバーの研究

その3

III 原理(Principle)

1. なぜ原理を探るか?

私は、最近になって一つの発見らしいものをした。それは英國と米国のやり方の相違についてである。

英國では、まず、原理をつかませ、その原理を基にして各自が方法を創作するよう導く。しかし、勝手気ままな方法を創作しては逸脱のおそれがあり、我流になるのでそれを防ぐためルールを設ける——というやり方である。従って英國連盟の規約集は“Policy, Organization and Rules”と名づけている。すなわち、方針、組織（または組み立て）および規約、である。これを別ないい方でいうなら、「原理、方法およびルール」となる。従って指導者養成コースの行き方もこれによる。まず原理をつかませることに主力を注ぐ。いわゆる指導方法とか、隊の運営法とか、班活動の動き方とか、野営法とか、計測法とか……の数々の方法は、原理のセッションの中に、原理と方法との、よい関連の1例としてこれを採りあげて若干の実習をする程度にとどめている。すなわち、方法を授けることがコースの目的ではなくて、コースは原理をつかませるために存在するのである。ギルウェルのウッドバッジコースがそのよい例である。日本の実修所も、故佐野常羽先生が、このやり方で開山された。「原理さえつかめば、方法は独創的に無尽蔵に湧いて来る」といわれ、それが指導者としてのプロジェクトであると説かれた。

米国のやり方は、むしろ、この逆である。ルールを示し、そして、極めて丁寧に方法を学ばせる。一般的の指導者はそれ以上に出なくともよい。（出てもよい）原理は、専従指導者が知っていて、この者がたえず一般有志指導者の啓発にあたればそれでよい、というも

のらしい。従って一般指導者は、いろいろの方法たとえば指導法、運営法、術技訓練法を一心に勉強すればそれでよい。そこで米国連盟は莫大な経費を投じて、方法についての美しい手引書をP R的に刊行している。どんな新米の隊長でも手引書を買えば今からでも隊長がつとまる。こうして多数の有志指導者を獲得している。他方、専従指導者養成のため米国独自なコース（コースというよりむしろ学校）であるシフの訓練所を設けて教育している。余談になるが、この米国のやり方が、戦後の日本に伝わった。日連は、専従指導者学校の計画を立てたり、手引書の刊行も一応は考えたが、それには莫大な経費を要するので実現できなかつた。そのためなのか、講習会や円卓会、研修会、実修所に道を求める人々は、原理を探ねることよりも、方法を習いに来る、という傾向を生んだ。そして習いおぼえた方法を、ご生大事にし、自分ではひとつも創作しない。だが、ひとから習った方法は、すぐ種子ぎれになる。そこでどこからか仕入れてこなければならない。ところが教える方がもし原理に暗いならば時として原理を曲げた方法をいかにも独創であるかのごとく教えるかもしれない。そういう場合、原理の番人役であるコミッショナーがそれを是正すれば原理は守れるのであるが、実は皆が皆、そうはいかない。

以上のようなことを、なぜ、しいて、ここに述べるのか？ 私は、読者の皆さんに、よくお考えいただきたいと思う。私は、米国式は金がかかって日本ではできないから英國式の方がよい——などといっているのではない。日本のリーダーたちが、もっと、真剣に「原理を探究しなかったら、末おそろしいことになる」と警告したいからである。

少年部は、まだ、それほどでもないが、年少部においては、現に、問題が起きている。例の英式カビングと米式カビング優劣論である。この場合、肝心の、原理、すなわち「カビングとは何か」という本質の分析が不十分である人々が、原理を探ろうとはしないで、

方法上の優劣ばかりを論じている傾向が見える。結局、それは、日本に適するのは英式でもなく米式でもない。いわば日本式であらねばならぬ、と、いう結論になるだろうが、さてその日本式というのは、方法における日本式という意味に限定されねばならない。原理における日本式というものを考えるならば、それは危険である。B-P の考えた原理以外に原理はあり得ない——と思いたい。カビングについて B-P の立てた原理を、隊長や副長、さてはデンマザーたち、本気で本当につかんでいるのだろうか？ つかもうとしているのだろうか？ 失礼ながら私には疑いが去らない。皆さまが、まことに熱心にカビングに奉仕されていることに対しては涙ぐましいほど感謝している。けれども、その熱心は、主として方法にそそがれ、原理をおろそかにされているように思われてならない。

いまここに、ローバー部門を探究するにあたって、私は、日本のカブ部門が、なめて来たような、足跡をくり返えしたくないのである。方法のためにあせって肝心の原理を見のがすようなことをしたくないのである。カブは、年令も若いから、仕方なかったとしてもローバーは成人である。分析をじゅうぶんにして日本ローバーリングの土台を築いてもらいたい。

さて、英国ローバーリングの原理はどうか？

私は、この1点に研究の焦点を絞って思う存分、根かぎりの探求をやりたい。もし、この稿でそれが、完成しないならば、稿を改めてでも探究したい。そうしなかったら、日本のローバーリングの柱が立たないからである。

2. 原理はどこに示されているか？

英國ローバーの原理をさぐるにあたって私はまず次の文献をひもどいた——

- a. Policy, Organization and Rules. (略称 P. O. R.)
 - b. Rovering to Success (略称 RtS)
- の2冊である。

先にあげた所要文献目録の中の、たとえば、

“Rover Scouts — what they are and what they do”
“Running a Rover Crew”

それにギルウェルの D. C. C. 用ハンドブックのごときは、原理探求上、必読の本であるが、これなどは、上記2冊の本をもとにして書かれてるので、私は、補助的に引用するにとどめることにした。その他、いくつかの本（文献）があるが、それは主として方法

を主題としているからここではあげないことにする。

3. P. O. R. からの探究

私の手元には、1947年版と1959年版とがある。ご存じと思うが、1946年（昭和21年）10月1日、英國では、始めてシニア部門が独立した。それゆえ、1947年版には最初のシニアの規約が出ている。

このシニア部門の出現によって、少年部にもローバー部門にも1部改正の必要が起り1958年（昭和33年）4月1日付発効をもって大改正されて今日に到っている。故に、1959年版は現行のものと変りない。

この P. O. R. の 254 に――

Rover Scouting is a brotherhood of the open air and service.

という解説がある。この句は、Crew (ローバー隊) のところに出ているから、ローバー隊とは何ぞやという解説とされるが、私はこれをローバーリングの定義だと解釈している。

このことばは、B-Pのことばである。というわけは、B-Pの“Rovering to Success”にも出ているからである。

さてこの定義だと思われる句を和訳してみると――

- ローバースカウティングは、戸外と奉仕の兄弟仲間である（直訳）
- ローバースカウティングとは、戸外活動と奉仕活動をする兄弟仲間のことである（意訳）

となる。そこで、次の3条件

戸外活動をする

奉仕活動をする

兄弟仲間である

が不可欠の要素となる。すなわち、戸外活動をしなかったり、奉仕活動をしなかったりするならば、ローバースカウティングではないことになる。

兄弟仲間——ということば、これには多少の問題があろう。すなわち、班とか隊を組まない場合はどうなるか？ いわゆる Lone Scout (単独スカウト) はどうなるのか？ これに対し私は Brotherhood とは「同志」と考える。自隊のローバーに限ることなく他の隊のローバーとも同志であるし、外国のローバーをもやはり同志だ、という意味に理解する。

以上のことがローバースカウティングの原理を探るときいちばん重要な鍵である。私は、日本の規約にもこういう大切なことは定義的に明示してほしいと考える。

4. "Rovering to Success" よりの探究

次に "Rovering to Success" (略称 RtS) をひもどくと、その巻末に "Rovering" という37ページにわたる章がある。この章で B-P が強調している点は、「ローバーリングは、男らしい男を作る道だ」といつている点である。それをいいたいために、この章のはじめに、卑怯な男と、義侠心のある男の話をあげている。眼の前で盗人を追跡している婦人に協力しなかったり、池に落ちて溺死しかけている老女を救助しなかった卑怯な男、それに反して、激流に飛びこんで流木の間から同僚を救ったり、凍結した湖上で馬車馬を何時間もかかって助けた馬車ひきの話——要するに「義人」を作ることを強調している。

このことは単にローバーだけでなく、カブの始めからスカウティングの全局を通して、B-P の望む点である。それは「ウルフカブス、ハンドブック」や「スカウティング・フォア・ボーイズ」にも、幾多の夜話で説かれている。この「男らしい男」を作るその最終段階がこのローバー部門なのである。私は往々にして、カブたちを、あまやかしているデンマザーを見ることがある。そういう人に「男を作る」ということを注意してあげたい。これも原理だと考える。

5. "Running a Rover Crew からの探究"

次に、"Running a Rover Crew" という本から D. Lumgair 氏のことばを引用してみよう——

「ローバースカウティングは“スカウティング・フォア・ボーイズ”的第4番目にして最終の段階である。これは17才から24才までの青年諸君にスカウティングというゲームの楽しさを提供し、そして彼等にその年令層に即応する成人としての態度を与えるものである。」

「ローバーリングは、青年のために考案されたものではあるが、それは "Scouting for men" (成人のためのスカウティング) ではないということを記憶されたい。これが重要である。これは、ウルフカブ隊から出発する訓練制度の完成であってそれ以上のものではない。これは戸外活動と奉仕活動をする兄弟同志で、ボーイスカウティングおよびシニアスカウティングの目的と理想の両方を共有するものである。」(同書9ページ)

私は、この文を殊更、解説する勞をはぶきたい。読

者各位に、ご判読をねがうだけでよいと思う。

「このようなことは、いわなくともわかっている」と、叱られるかも知れないが、往々にして見のがし易い盲点になりかねない。原理というものは太陽のごとく、おおむね、雲にかくされることが多いもので、見のがされ易い。

6. 再び "Rovering to Success" からの探究

スカウティングの原理が、じゅうぶんわからないと、ローバーリングの原理も、なかなか、つかめない——私は、ほんとうにそれを自分に感じた。

だから、もっと、探究せねばならぬ。

○4本の柱について

私は“スカウティング・フォア・ボーイズ”的原本の21ページ、1940年の序文(訳本の49ページ)にスカウティングの4本の柱ともいべき

Character (人格、実は性格)

Health (健康) and

Handicraft in the individual, and in Citizenship through his employment of this efficiency in Service. (技能、奉仕)

とあるのを思い出す。これがローバー部門となると一

Character and Intelligence

Handicraft and Skill

Health and Strength

Service for others and Citizenship

と書きかえられていることを発見した。(RtS, 210ページ)。これは——

性格と知能

手技と熟技

健康と体力

他の人々への奉仕と市民性

ということで——印の要素が新たに加えられているのである。

これをどう考えるべきか? 私の考えでは、少年スカウトに比べローバースカウトは、年令、体力、知能のすべてが高度に発達しているので、それ相応の高い水準を要求されるということと解する。ここで気づくことは、手技と健康との順序が入れ替っている点である。これは何か意味がありそうに思うが、まだよくわからない。こういうことも、ローバーリングの原理を探究する上に、ひとつのポイントとなりそうである。

○「父性の道」について

"Rovering to Success" の終りの章 "Rovering" の

ところを訳しているとき私は、B-P の、ひとつの卓見に打たれた。それは、「父性の道」(Fatherhood)という部分である。(原書237ページ)。それには――

「さて、ここに別の点についてあれよう。

君たちは、いずれ、父親になるだろう。息子や娘を育てて世間に送り出すことになろう。だから彼等の人生における成功の門出に対して力をかすことになる。君がもし、これに失敗するならば彼等を廃品とし、みじめにする。君はいやしむべき罪を負うことになろう。(中略)しかしに君の子孫の生活と幸福とを作りあげるという、いちばん大きい、一番重要なつとめについては、君たちはなんら、きまったく方法を用意せず、なりゆきにまかせているのである。それが世間のルールになっている。だから、もし、若い人たちを訓練する知識と実習とを君が経験しているならば、どんなに、ためになるかわからぬい」

「君たちは、ローバーリングすることによって、父親としての最上にして、もっとも役立つ仕事のいくつかを実地に練習する機会をつかむことができる。(中略)

もし、父親になるための訓練というものが何年かの昔からあったならば、もっとちがった国民が、現在できていたにちがいないと思う。(後略)」

読者諸君、この一文を読んで、どうお考えになるだろうか? 私は、古来、良妻賢母の教育というものはあったが、良夫賢父の教育は、ひとつもなかったように思う。家庭教育でも学校教育でも社会教育でも、「父性の道」を説いたのを寡聞にして知らない。「だから、これをスカウティングでやるのだ!」とB-Pが叫んでいるように思われてならない。

ローバースカウトが、団に対する奉仕としてカブ隊や少年隊の訓練を援助するのも、「父性の道」の実習といえる。現在わが国のローバーのあいだでは、「何かといえば年少隊や少年隊、団、地区、県連に奉仕させられる。そんなことでは、ローバーとしての本来の修行ができないではないか」と、不平(?)そういう者があるとのことだが、そういうローバーに、これを読ませたいものである。

よき父となるには、性教育も関連がある。英国のおきて第10の清純(純潔)もこれにふくまれる。

○最高の幸福への道

Rovering to Success の Success は一応「成功」と訳され、「成功への遍歴」といわれるが、B-P のいう成功とは「幸福」という意味である。それはこの

本の巻頭に28ページ(原書で)にわたる幸福論を読んで、そう解するのである。

B-P は、他人の幸福をはかるのが眞の幸福である――と最後のメッセージに述べているが、その主張をローバー向きに、説いたものがこれである。その文の中で、他の人々の幸福をはかるだけでは、まだ最上の幸福とはいえぬ。子供を生み育てる人は子供のない人よりか幸福であると説き、さらに、その配偶者、(妻)も君と同じように、他の人々の幸福をはかる――これが最高の幸福人であると結論している。(原書19ページ)

いうなればどうしても Fatherhood(父性の道)が欠くことのできない要素となるのである。

そして、B-P 自身こそ、この、最高の幸福人だったのである。それは彼が1937年80才の時に放送したメッセージにも、またその死後、発見された最後のメッセージにもあるように「私は最も幸福な生涯を送りました」の一語につきるのである。

ローバーリングの原理はここまで探究せねばならないようである。

7. ギルウェルコースの講義からの探究

ギルウェルコースではすでに35年前からローバー部門の指導者コースを行なっている。前述のように、ローバー部門の組立ては何度も改正されたのでこのコースの教程も何度も変った。しかし、変わったのは方法上だけのことであつても原理はひとつも変わっていない。

このコースの予備コースにおいて、ローバーリングの原理についての講義がある。これは日本でいう講習会程度の手ほどきであるが、それにも一応、目をどうしておきたい。

「ローバースカウティングの目的」という講義の要目をみると、その中に原理が顔をのぞかせているのを発見する。以下、要点だけを列挙しよう――

○ローバースカウティングとは戸外活動と奉仕活動をする同志の仲間である。

○カブスカウト、スカウト、シニアスカウトに対する市民性の訓練という規約第1条に規定されている目的をローバー年令相応の広い視野に立って継続させる。

○有用な経験を自分の力で作り、その力で社会に奉仕できる力をつけるようローバーを励ます。

○ローバー訓練というものは青年が「自己を見出す」(または、「迷っている」)時期にこれをあてるもの

で、それは性格（人格）を伸ばし能力を大にすること、そして広い世界でスカウティングの原理であるプロミスとローとを実行する、その助けをしようとするものである。

と、ある。読者はこの要目の中にも、いくつかの原理がひそんでいるのに気づかれるであろう。

8. 自分のカヌーは自分で漕げ

“Rovering to Success”の原書のカバーには、岩や暗礁の多い激流を、1人のたくましい男がカヌーを漕いでさかのぼる絵が色刷りになって出ている。B-P は人生をカヌーによる航行だと考え、この本のはじめの方にカヌーの操り方を詳しく述べている。そして——“Paddle your own Canoe”（「自分のカヌーは自分で漕げ」と）。これは、ローバースカウティングのひとつの原理を示しているものと考える。カブ、ボイスカウト、シニアの段階ではまだ1本立ちになれないが、ローバーは1本立ちになれる。自己の運命を自分の腕で勇ましく拓け、ということであろう。

カヌーを漕いでいる絵（B-P の描いたもの）が二つ出ている。1枚は波にうたれて難航しているカヌーが2隻いる。その下に

Paddle your way through it with Head, Heart and Sinew（君の航路を頭と心と筋肉で漕ぎぬけよ）と書いてある。

もう1枚のは、暗礁に衝突したボート（訳者云、カヌーでなく）とそれを見ながらゆうゆうと漕いでいるカヌーが描いてある。そしてその下に

Paddle your own canoe——looking ahead——
If you let yourself be rowed by others, wish

backs to the danger（自分のカヌーを漕げ——もし、君が他人に漕がして（ボートを）いたら危険物に背を向けることになるよ）

と書いてある。B-P はボート漕ぎは、うしろ向きに漕ぐから前方の暗礁が見えないと戒めている。カヌーなら前方を向いて漕ぐからその心配はない。すなわち、これは、「前向きの人生」を寓意していると思われる。これも原理を語ったものと受けとれる。

9. 原理を曲げてまでもローバーに入れる必要はない

The voluntary spirit in Scouting implies that we offer the best in Scouting to those who want it and we do not compromise principles to attract more widely.

私はこの1文を最後に引用しておく。意味は——

「スカウティングの自発精神（ボランティア精神）というものは、スカウトになりたいという者（だけ）をスカウティングに入れるのが一番よいことを意味する。われわれは、多数の人々を広く、引き入れるために原理と妥協したり譲歩したりはない。」—— というのである。

私はこの稿を終るにあたって、本人の発意でもない者を企業体の人作り方策のためにローバーに入れ、その人数の多きをほこることがあるならばそれに大きな疑問をもつ。ローバーの段階では奉仕が中心なので、特に自発活動が要求される。これについて、後章の Vigil のところで詳述したい。

(つづく)

次は方法について（中村）

昭和40年度ウッドバッジ・コース

開 設 予 定

期 間	コ ー ス の 名	入 所 費
4.17(土)～4.19(月)	ローバー・プレリミナリー	¥ 1,500
4.29(祭)～5.1(土)	T. T. C.	担当所員
5.15(土)～5.23(日)	スカウト — 13期	¥ 4,500
5.29(土)～6.6(日)	シニアスカウト — 2期	¥ 4,500
8.9(月)～8.14(土)	ウルフカブ — 6期	¥ 3,000
8.21(土)～8.29(日)	スカウト — 14期	¥ 4,500

場 所 日連那須野営場
申 込 入所願書
健康検診書 }
事前課題 }

上記はコースの開設される1ヶ月以前に日本連盟に県コミ経由で必着するよう提出のこと。

入所費 入所許可書を受けたから1週間以内に納入のこと。

英國ローバーの研究

その4

III 方 法 組 織

1. 方法の基盤

方法の基盤はなんといっても原理である。方法とは「あらしめる」こと、すなわち、ゾルレン (sollen) である。何にあらしめるのか？ それは「あるべきところ」に「あらしめる」のである。「あるべきところ」とは、ザイン (Sein) である。それは「真理」であり「原理」である。それゆえ、方法というものは行きあたりばったりの、盲進ではない。原理をしっかりとつかんでいなかったら、正しい方法は生まれてこない。

私は、この考え方から、前稿において、ローバーリングの原理を、いろいろな資料から追求した。あまりにもくどい、といわれるかも知れないが、あえて、分析に時をかけたわけである。

2. 方法にはいろいろな方法がある

方法というものは、ひとつだけではない。いろいろな方法がある。およそ原理に反しないかぎり自分で創作することも許される。そして改善もできる。

けれども、いちばん、よい方法というのも事実あるのだ。それは何によって作り出されるか？ 私は、それは経験によって作られると考える。経験には自分の経験もあれば他人の経験もある。そこで、討議、

(ディスカッション) により互いの経験を出しあってその、すぐれたものをとりあげるのである。あるいは合作する。

これを元にしてルール(規約)が作られる。しかし、ルールとて永久不变のものではない。より良い方法が生まれれば改正される。ゾルレンというものは、そういうものである。

けれども、原理は、まずもって不变である。まずもって——と特にいったのは、人類の進歩によって遠き将来、変るかも知れないからだ。しかし、遠き将来とは、多分、われわれの生存中には来ないだろう。それはあたかも、北極星が、現在の小熊座のアルファ一から、琴座のベガに交替する25,800年もさきの遠い将来とでも考えてよからう……。

大体、原理というものは、割合、つかんでみれば簡単なものである。つかみにくいものでもない。これに反して、方法の方は、むしろ、考えにくい。それゆえ、リーダーたちは、みな苦労している。講習会や実修所に来る人たちが、方法を習うことを第一とし、原理をあとまわしにしたがる傾向は、むりもないことである。方法なくして指導できないからだ。

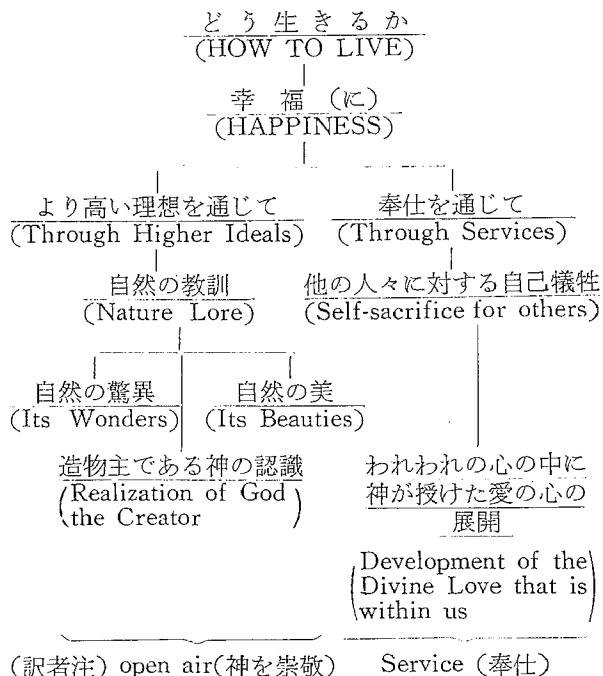
3. ローバーリングの方法の出発点（崇敬と奉仕）

前稿において、あげたB—Pのことば——
「ローバースカウティングとは、戸外活動と奉仕活動をする兄弟仲間のことである」

Rover Scouting is a brotherhood of the open air and service. (P.O.R.254)

これが、ローバーリングにおける方法の出発点である。open airを戸外活動と意訳してみたのだが私は、このことばのもつ内容について、少々分析してみたい。

“Rovering to Success” の原本58ページに次の表がのっている。（訳文付）



(訳者注) open air(神を崇敬) Service (奉仕)

これは先の、open air と、service というローバーリングの二元方程式の解明である。私の注記のようにこの表の左辺の部分が open air (戸外活動) なのである。B-P は、「より高い理想を通じて」としており「戸外活動を通じて」と書いていないので、あるいは「戸外活動」を見のがす人があるかも知れないが、もし、見のがすならば、その人は読書力に弱いということになる。

戸外活動——というと、われわれは、すぐ、ハイクとかキャンプを連想する。それはまちがいではない。B-P も、それをいっている。特にローバーの段階として、クライミング、およびランブリングをあげている。従って日本のローバー諸君もそういう活動を実施しているにちがいない。けれども、もしそれが、大自然の驚異にふれず、大自然の美を見のがしたなら、すなわち、自然の教訓を探求しなかったなら、一般人のハイキングと同じものになってしまう。それは、ハイクのためにハイクしているにすぎない。その究極において、神を崇敬しないならば、それは、ローバーリングではないのである。(スカウティングでもない!) open air は神に通じる。

もし、この神に対する崇敬が出てこなかつたらどういう結果になるだろう??

それは、前記の表の右辺——すなわち「奉仕」というものも出てこないことになる! これは大問題だ! 神を崇敬することなくして、行った奉仕というものがあるならば、その奉仕たるや魂がない。私は、現

在、日本のシニアスカウトや、ローバースカウトは、そういう形ばかりの奉仕をしているのではないだろうかと、実は、心配している。リーダー諸氏にしても、神、仏を崇敬し、その崇敬心のあらわれとしてスカウティングに奉仕しているのだろうかどうか? もし、そうでなく、ただ、奉仕を美德と考えてしているだけであるならば、方法ばかりを見て原理を忘れている——と申しあげたい。

私は、ここで、レイノルズ氏が、カトリック教徒を対象にして書いた “Boy Scout Movement for Catholics” (山口次雄、杉浦俊子共訳「よい青少年をつくるには」中央出版社発行、160円) —— を読んでこの考えを一段と深くしたのである。日本には残念ながら宗教団体を目あてとした、スカウティングの解説本が出ていないようである。もし、出でても、宗教は宗教、スカウティングはスカウティングというような縦割(たてわり)の別々の世界に立ってスカウティングを P R していて、宗教とスカウティングとが、生活において完全に 1 本になるよう説いた本がないのは残念である。これは余談になって申訳ないが、日本のスカウティングに欠けている点だと思うので、こういう欠点をこれからローバースカウト諸君によって開拓してほしいとせつねがう次第である。

この、レイノルズ氏の本の中に、1946年、約4000人のイタリアのスカウトに対してなされた。ローマ法皇ピオ12世の説教がのっている。(上記の訳本 8 ページ) —

「スカウト運動は、神への崇敬と奉仕とを尊重するものです。これこそ人生に最もたいせつなことであり、その崇敬と奉仕のなかで少年たちはあらゆる対象、規則、善なるもの美なるものの真の価値を見い出すのです」と。

私は、このことばを、B-Pのことばと同じにうけるのである。

ローランド・フィリップスのことばに「スカウティングは神とともにあり、神はスカウティングと偕(とも)にあり。スカウトたちよ、おそるるなかれ」と、いうのがある。

以上の点から私は、ローバーリングの方法に、宗教が根底をなしていることを感じた。そして、日本のローバーリングにおいて、現在、宗教がどう結びついているのか、もし結びついていないならば、どうこれを考えたらよいのか、という大きな課題に直面したのである。

私は、B-P が、「僧衣をつけない僧をつくるの

だ」と、なにかの本に書いているのを読んだ記憶がある。信仰への教育をスキにして「奉仕」が成立するはずがない。B-Pは、まさに僧衣をつけない大僧正であったと思う。

レイノルズ氏が、カトリック教徒に対してスカウティングを解説した書物（前掲）によると、B-Pが、1908年スカウト運動を始めたとき、カトリックの上層部は、スカウト運動を、新らしい別の宗教運動ではないかと警戒したらしい形跡を述べている。また「騎士道」という本の122ページ（著者はフランスのクランシャン、Philippe du Puy de Clinchamps 川村克己、新倉俊一訳）に――

「カトリック聖職者の上位階級の人々は、青少年の間に異常なほどの成功を収めたこの新しい運動（注　スカウト運動のこと）に対して敵意とまではいかなくとも警戒の態度を少なくともとった。しかし、フランスにおける最初のボーイスカウト――当時は斥候隊――エクレルールの名でよばれるほうが多い――は司祭たちの手によって編成され……（後略）云々

と書かれている。これは、「僧衣を着ない僧をつくる」というB-Pの言を曲解して新カトリック派でもこしらえるかのように警戒したのかもしれない。

けれども、B-Pは新宗教を作る意思はなかった。むしろ既成の宗教に奉仕する考えから僧衣を着ない俗人の僧を作るといったと解する。いわんや――「スカウト教」などという構想があったなどと考えたらナンセンスである。この点は、はっきりさせておかねばならない。

4. 仲間づくり

ローバースカウティングは、戸外活動（神への崇敬）と奉仕活動の兄弟仲間である――という定義に従い、仲間づくり――という方法について分析してみることにする。

どのようにして仲間づくりをするのか？

(a) “finding himself” とは

これについては、P. O. R. の254に――

ローバー訓練は青年が「おのれを見出す」時期にこれをあてるものである。すなわち、性格と能力を伸ばすこと、そして青年が広い世界でスカウトのプロミスとローの原理を実行する助けとするものである。（Rover training covers the period during which the young man is “finding himself”, i. e.,

developing his character and his powers, and endeavours to help him to put into practice in a wider world the principles of the Scout Promise and Law.)

となるのによる。これがその要素である。

「おのれを見出す」（finding himself）といふいいかたは、意味深長である。私はこれを神が自分を作ってくれたその自分とはどのようなものであるのか、そして自分は神の意志をどうすれば達成できるか――といふなどをとく、というように考える。すなわち、自覚と使命の発見を考える。これにつきB-Pは、「ローバーリング・ツー・サクセス」の第1の暗礁「馬」のところで職業の選択をとりあげて具体的な示唆をしている。いつまでも親の厄介にならないで自立して自分の生計をたてることを強調している。これが公民としてのつとめの第1歩だと説く。

従ってローバーの仲間は、そういう時期の青年同志で構成することを原則とする。ここで注意すべき点は

- a. ローバースカウトにはいらなくても「おのれを見出す」ことができるものは、しいてローバースカウトにはいらなくてもよいこと。
- b. 本人の自発心でもないのに、他の圧力でローバーになるようなものは、はいってほしくないこと。そのためスカウティングの原理（この場合は自発活動をさす）を曲げてまでも入る（または入れる）必要はないこと。

をあげている。われわれは普通、隊員数の多いことを望むのあまり、1人でも多く入隊するよう働きかける傾向がある。大学ローバーとか、職場ローバー隊にそういう現象はないだろうか？

- (b) 年令上の規定は

次に、“finding himself”の時期とは、年令上どういうことになるのだろうか？

P. O. R. の264の(2)において、最低17才でローバースクワイラー（準ローバー）になれるとある。

ローバースクワイラー（Rover Squire）とは準ローバーと訳すのが適切で、これは見習ローバーと訳さないほうがよい。その理由は後述する。単なる見習ではない。P. O. R. には少なくとも17才とあるが、スコットランドに限り、最低16才としている。（これは、例外なのでP. O. R. には記していない。）その理由は、スコットランドでは、シニアスカウト部門が独立していない。シニアスカウトは少年隊に属している関係から特別扱いになっている。（本稿の歴史の項でおいたと思うがスコットランドは、シニア部門の

独立を望まない伝統がある。

さてこの、スクワイラーの段階を経てから、正ローバーになるのだが、この正ローバーの年令の上限については最初は規定がなかった。そのため、30才またはそれ以上のリーダーでも昔はローバーだと自称した。けれども、それはもはや “finding himself” の時期を終っているからローバーではない、という声が盛んとなり現在では、24才の誕生日を迎えたたらローバーたることをやめ、クルー（隊）を去ることになっている。（P. O. R. 272）。また 264 の (4)によれば22才の誕生日をすぎた者はスクワイラーになれない、とある。その理由は、あと 2 年間たらずでは満足なローバーリングはできないということからくるらしい。こういう点もたいへん厳重である。

(c) 隊員の内訳

隊員には次の三つの状態がある。

- イ. スカウト隊（注 英国は少年隊をこう呼ぶ）
ないしシニアスカウト隊を経てローバースカウティングへ上進する者。
この者はスカウトプロミスをたてており、自分の義務についてある程度わきまえ、相応のスカウト訓練の課程を修めた者、と考えることができる。
- ロ. 以前、プロミスをしたことがあるが中途でやめ、ローバー段階で再びスカウティングに復帰する青年。
- ハ. ローバースクワイラーとして、はじめてスカウト運動に身を投じる青年。

イ——については、スカウティングの継続という点に大きな意義がある。たとえ彼がクィーンズスカウト（日本の富士級）になっていても、さらに最高のB—Pアワードに達したいという意欲をおこすのである。

ロ——の場合、中途でやめたということは何かの事由があったにちがいない。この場合、いったん、プロミスしながら、やめるとはけしからん、とわれわれはいいかねない。けれども、そういう考え方は小乗的である。仮りに彼が隊をはなれ、加盟員でなくなってしまい、その身についたプロミスとローの原理に従って日常の行動をしていたとするならば、りっぱなスカウトなのである。決して、けしからんことはない。万一、年に1度だけでも、プロミスやローを思い出したとするならば、その時の彼はやはりスカウトとして恥じない。そういう彼が今ここに、その生活を整理して再び登録メンバーに復帰できるようになったことは、まさに、賞讃にあたいする。双手をあげて歓迎してあげ

よう。

ハ——については、彼がまだプロミスをしていないことがハンディキャップとなる。そこでスクワイラーの期間に、本真剣にやるのかどうかを、たしかめる必要がある。（本人自身がたしかめる）また、イとロに該当する者がすでに修めている課目をまだ修めていないので特別訓練をする必要がある。

(d) 訓練の2段階

これは次の通りである――

ローバー・スクワイラー (Rover Squire)

ローバー・スカウト (Rover Scout)

前者は準ローバーであり、後者は正ローバーである。なぜ2段階にわけたか？

それは中世のナイト (Knight 騎士) の修業制度に模したと考えられる。B—Pは、スカウトは現代のナイトだ、といった。正ナイトになるには、準ナイト、あるいは「従騎士」の課程を修了せねばならなかつた。英語 Squire は騎士語からきている。そもそも騎士の起源はゲルマン民族による。騎士の楯を持つ「楯持ち」 scutifer をまた scutarius といった。それが ecuyer となり、このフランス語がスクワイラーと英語化した。（「騎士道」38ページ）すなわちもとは武器運搬人をさしてそうよんだのである。

余談になるが、英国は、ナイト勲爵士に Sir の栄称をつけて貴族に列する。けれども従騎士の方は、貴族どころか武器運搬人、つまりゴルフでいえばキャデーみたいな仕事をしたので騎士と戦う資格はなかつた。

それが、あとで戦士に加えられるようになり戦功によって騎士に叙任された。

B—Pは、ローバーの叙任式についても騎士叙任の故事を参照したのである。

前掲、クランシャン著「騎士道」によると、いったん亡びたと思われた騎士道を、今日、再興しているものが二つあるという。その一はスポーツ界、その二はボーイスカウトである、と。（同書59、119～124ページ）

けれども、スポーツは信仰心が欠けているから錯覚的騎士道だと批判している。ボーイスカウト、特にヨーロッパのカトリック系ボーイスカウトこそは、騎士道の後継者である——と結論している。

私は、カトリックのことは知らないが、B—Pの組み立ての上に、騎士道再興の意図があり、（「スカウティング・フォア・ボーイズ」（改訂本）の56、74～5、379～383、396、403 ページ参照）その騎士道はローマ法皇を中心としたカトリックの司教たちによって

叙任の式を司会された関係から考えてクランシャンの説を肯定するほかはない。

読者は、あとに出てくるローバースカウトの叙任式およびその前後のセレモニーのところを読むならばB-Pが、騎士道およびそのバックだったカトリックのセレモニーを大幅に導入したことが納得されるだろう。

(e) クルーの内訳

クルー (Crew) とは、元来「乗組員」という意味である。B-Pは、ローバーは、カヌーに乗りこんで人生を航行するものと構想した。これはボートではなくてカヌーだとさねて説いている。そのわけは、カヌーは進行方向を見つめて櫂をあやつるが、ボートは進行方向に背を向けてオールをあやつる。そのため、暗礁にのりあげる。だから、自分はボートは採らないのだと記し、ボートとカヌーとの比較を自筆の絵までのせて暗示している。(「ローバーリング・ツー・サクセス」の原本22ページ)。

この Crew を日本的に意訳すれば「青年隊」または「青年スカウト隊」となる。略して「隊」である。

英國の P. O. R. によれば、クルーに 2 種ある。
それは――

地区ローバー (District Rover Crew)

団ローバー (Crew, a part of Scout Group)

である。前者は L. A. (地方連盟) に直属し、その指導はローバー担当の副地区コミまたは、地区ローバーリーダー (この制度は日本にない)、あるいは L.A. と地区コミから任命されたローバーリーダーがこれにあたる。(P. O. R. 256) これは日本においてもおこなわれている方法で、団内においてローバー班や隊を作るには人員不足の場合、各団のローバー年令者をよせ集めて地区隊を作るというものである。

後者の形の方が、むしろ本来的で、各団がそれぞれ自団にローバー隊(班)を設けるならばそれは完全な団(グループ)となるわけである。

なお、日本では、この外に、大学隊、職域隊、宗教関係隊があるから 5 種類になっている。

(f) クルーとパトロール

われわれは、パトロールという語を「班」としている。けれども元来、patrol という英語は「巡視隊」「巡羅班」と訳すべきであろう。「観察推理班」である。中心はその機能いかんにあるのであって形じゃないのである。

スカウト隊(少年隊のこと)はパトロールシステムがその生命である。シニア隊は、やはりパトロールシ

ステムがバックボーンであるが、その活動のある面については班長会議の議を経て特別チーム (Ad hoc team) を設けてよいことになっている。これは日本の年長隊の企画委員会と、多少のずれがある。いわば特別作業チームである。

そこで、ローバーでは、それが、どうなっているか?

P. O. R. 259 に――

The Crew may be divided into teams on Patrols at and when necessary for any particular purpose. クルーは、任意の特別な目的の作業をする場合必要な数チームあるいは数パトロールにわけてもよい。

という、はなはだ弾力的な規定を設けている。

そうなると、チームはあるとしても、パトロールの方は、なくてもよいのか?

パトロールを作ることがあるにはあってもそれは、パートナント(恒久的、常置的、定連制)なものかどうかに、疑問がおきる。should be divided でなくて may be divided なのである。そして額面通りに受け取るならば、ウルフカビングがパック(隊)システムであるように、これはクルー(隊)システムになるような印象をうけるのであるが、その点はどうか? 等々の分析を必要とする。

そこで私は、ギルウェルでこれをどう講義しているか、調べてみた。次はその講義のヒントである。

The Patrol System which is inherent in all Scouting has some place in the Rover Crew, although by this stage young men have grown out of gang instincts, or should have done so. There is advantage, however, in using Rover Mates and in a Crew of any size they are essential whether or not actual Patrol are formed, but where they are formed they should not be expected to follow the pattern of the Scout Troop and they should be frequently supplanted by ad hoc teams for specific activities, under the leadership of the Rover Scout most competent in any particular subject.

「スカウティングに固有である班制は、ローバー隊においてもある程度の位置を占めている。しかし、この年令に至れば青年は児群本能から脱皮してしまっているか、または脱皮したばかりだと考えねばならぬ。けれども、やはりローバーメート(班長)の制度をとるのである。それは隊の人数が何人であろ

うと、活動的なパトロールが構成されているといな
いとにかかわらず、ローバーメートをおくことは必
要である。けれども、たとえパトロールが組まれて
いてもローバーでのパトロールはスカウト隊（少年
隊のこと）のパトロールの型に従うべきでない。ロ
ーバーは、しばしば、特殊な作業ごとに適時アド・
ホック・チームを作るという策をとるのである。そ
の時はその作業に最も堪能なローバースカウトが指
揮をとるのである。」

というのである。これは永年にわたる英國での経験によ
って述べられていると思うので、とやかくの分析はさ
け参考にとどめておくことにする。

(g) ローバー・メート (Rover Mate. 略称. R. M)

P. O. R. 260 によると――

○ローバー隊長の推薦によりクルーが毎年選出す
る。

○4～6人のローバーごとに1名おく。

○服制は288、バッジは319に定めている。

Rover Mate を「ローバー班長」と訳すのは日本的
ない方である。Mate は元来、「航海士」（船長の下）
である。R. S. L. を船長と考える。そこでボートの場
合、コックスにあたるのか、それとも整調に相当
するのか、私はいま考究中である。

私は、アド・ホックを組むにしても、これは、やは
りメート会議できめるべきだと思う。

ローバーリングにおいて、「パトロールリーダー」
といわないで「ローバーメート」と名づけた点に、少
年隊や年長隊とちがうなにかがあることを考えてみた
い。この点、私の分析は、まだその途中をさまよって
いる。

(h) クルーの人数

ひとつのクルーは何人までなのか、また、何個パト
ロールなのか、について調べたが P. O. R. にはその
規定はないから不明である。

(中 村)

需品部 だより

6月1日より県連旗、染隊旗および国旗は次のような価格になりますのでご了承ください。

品番	品 名	売 値	品番	品 名	売 値
501	県連旗 羽二重単	4,000	516	C S隊旗 羽二重 裕	4,100
	〃 羽二重 裕	6,000		〃 伴天 単	3,800
	〃 伴天 単	3,900		S S隊旗 羽二重 単	2,800
	〃 伴天 裕	5,900		〃 伴天 单	2,600
503	B S隊旗 羽二重単一色	2,400	522	〃 羽二重 裕	4,100
	〃 伴天 单一色	2,100		〃 伴天 裕	3,800
504	〃 羽二重裕一色	3,900	525	R S隊旗 羽二重 単	2,400
	〃 伴天 裕一色	3,600		〃 伴天 单	2,100
505	〃 羽二重単二色	2,400		〃 羽二重 裕	3,900
	〃 伴天 单二色	2,400		〃 伴天 裕	3,600
506	〃 羽二重裕二色	4,200	527	国旗行進用 羽二重	1,900
	〃 伴天 裕二色	3,800		〃〃 伴天	1,900
515	C S隊旗 羽二重単	2,800	529	国旗掲揚用 羽二重	1,900
	〃 伴天 单	2,600		〃〃 伴天	1,900

需品は前金で下記にお申し込みください。

申込み先 東京都中央区勝どき5丁目7番8号

ボーイスカウト日本連盟需品部

電話 (531) 3246 (代表)

振替 東京 82610

取引銀行 三和銀行月島支店

英國ローバーの研究

その5

IV 方法(2)

プログラム

1. ローバー・スクワイアの訓練

(a) 考え方

私は、前述したように、ローバー・スクワイアを「見習ローバー」と和訳しないで「準ローバー」と訳したいと考える。見習ローバーとは、すでに本人がローバーになることを決意し、クルーの者たちもそれを承認して、見習の課程を修めるものであると、考える。このような例は、年少部にも少年部もある。

ところが、ローバーの場合は、いささか異なる、と私は考へるのである。すなわち、この段階は、――

○自分はローバースカウティングに適しているかどうか？ また逆に

○ローバースカウティングは、彼（自分）に適しているかどうか？

を自分でためしてみる期間なのであると解釈するからである。年少、少年の場合はこの自己試験が根本となるにはあまりにも彼等はまだ成長していない。また、ほとんど彼等は生徒、学生であるし、余暇に恵まれていてカビングやスカウティングにさくだけの時間は容易にとれる。しかしにローバー年令にあっては学生もあるし社会人もある。その日常生活は成人なみに忙しく、時間的にもまた、社会的交渉においても複雑であるから、はたしてローバーリングに参加し、所期の課程を修めることができるか、一応やってみなければ、見当がつかない。そういう意味で試行の段階というものが必要となる。

第2の理由は年少、少年の段階での自発活動といふ

ものは、まだ100パーセントのものとはいえない。友だちがスカウトになったから、ぼくも、なりたいとか、親が勧めるからやってみようとか、ユニフォームが気に入ったからなりたいとか、そういう外的刺激がたぶん作用して自発活動の何パーセントかを作りあげるようである。ところがローバーの段階では100パーセントの自発活動を要求されている。少なくとも英国においては、そうなのである。これは前述したように、「自発活動という原理に譲歩し（曲げ）てまでもローバーにする必要はない」という、ことばで明白である。

このことを、D. C. C. Handbook のセッション第4にかきこねて次のように強調している――

「スクワイアに対するわれわれの側の態度は、スクワイアの心に、加盟員としての責任と特権とをきざみつけるということであり、スカウティングの原理を受け入れない者や、実習に興味をもたない者にまで、ローバースカウティングをやらせても、それは何の益にもならない、ということを認識することであらねばならぬ」と

すなわち――

青年の側からは

自分はローバースカウティングに適するかどうか？

リーダーの側からは

ローバースカウティングは、彼に適するかどうか？

という、両方からの試行、観察、吟味の期間だというわけである。

ジャック・コックス (Jack Cox) がその著 “Ideas for Rover Scouts” の36ページに

the Rover Squire is the most important person in Rover Scouting

「ローバー・スクワイアというものは、ローバースカウティングにおいて、いちばん重要なものである。」

と書いてあるわけは、ここにあると思うのである。

それでは、なぜこのように 100 パーセントの自発活動が要求されているのか？

私は、B-P が「ローバースカウトとは僧衣をつける僧である」というような意味のことを何かの本に書いたのを読んだ記憶がある。どの本に出ていたのか思い出せないのは申しわけがない。これは、スクワイアが正ローバーに叙任される直前に行なう Vigil に関するものである。Vigil は元来、カトリックの入信のときの祈りである。これを「告解」「終夜の連祷」と訳している。中世の騎士もその叙任の直前にこれを行なった。Vigil については後章のセレモニーのところで詳しく述べるが、スカウトを中世騎士の現代版と見たたた B-P は、この宗教的 Vigil を英国のローバーリングに採り入れたのである。この Vigil というものは、スクワイアに 100 パーセントの自発活動を要求または期待しているものと解釈される。

以上のように分析してみると、これは見習期間でなくて自験期間であると考えざるを得ない。したがってローバースクワイアは、「見習ローバー」ではなく、「準ローバー」と訳すのが正しいと思う。

日本の規約では、「見習ローバー」という用語になっている。私はそれが、まちがいだとはいわない。なぜなら、日本のローバーリングは、カトリックや中世騎士道と全部が全部直結されていないから、それはそれなりに正しい。けれども、ただの見習ではなく、内容としては自試自験のプログラムだと考えることが原理に忠実であろうと思うのである。

(b) スポンサー (Sponsors)

ローバー・スクワイアの訓練は誰が行なうのか？

その責任者は、R. S. L. (日本語では青年隊長といふ) であるが、個々のスクワイアの訓練は 2 人のスポンサーがこれにあたる。1 人のスクワイアにつき 2 人のスポンサーがつくのである。

1 人のスポンサーは、クルーの中でも年上 (先輩) の正ローバーで、なるべく B-P アワードをとっている者がよい。他の 1 人は、スクワイアと同じくらいの年令者で、なるべく友人であることが望まれる。これは自分が選ぶ。

この 2 人のスポンサーは、R. S. L. およびクルーによって任命される。

2 人のスポンサーの任務は実務 (real job) にあたるので決して名誉職ではない。すなわち、スクワイアの訓練の総てについて彼を助けねばならない。スカウ

トクラフトの実習、クルーの実情、団の伝統についてスクワイアに助言する用意を備えておらねばならない。

スポンサーの任務は重要であるので R. S. L. は慎重に人選せねばならぬ。ある時はハイク、またはキャンプに同行するので、喜んで、時間をさくことができること、自分のもつ興味をスクワイアにも分ち与えることができること、そして、スカウト経験をもたないスクワイアに付添う場合は、特に、技術面の訓練指導に責任を負わねばならない。

この 2 人のスポンサーの介添えによって、スクワイアは、ローバーリングを修め、クルーの生活に参加するのであるが、それはローバーリングの何たるかを「のみこむ」(insight into) ことに主目的がある。だから、本当の参加 (分担をもった参加、participate) ではない。従って、クルーのプラン (計画) に意見を述べることはできない。計画に参画できるのは正ローバーだけである。

R. S. L. は、このように Sponsors を用いて指導するのであるが、スクワイアの身上については、スカウティング関係のことはいうまでもなく、その他のことについても、こまかく知らねばならない。家庭事情、本人の志望、職業、学業、健康、等々について。

隊員数の関係で必要ならばスクワイアの訓練専任の A. R. S. L. (副長) をおいてもよいことにしてある。

さて、日本の規約には、このスポンサーに相当する役割の者はないようである。隊付はあるが、これはスポンサーのような具体的な任務をもたない。ましてや 1 人の見習に 2 人の指導員がつくなどという規約はない。

B-P は、なぜ、1 人のスクワイアにつき 2 人の協助者をつけたのか？ しかも、内 1 人は先輩、いま 1 人は同輩の……。ここで、私は、B-P 自身の経験を思い出すのである。

最近、アメリカで出版されたヒルコート氏 (William Hillcourt) と、B-P 夫人共著になる “Baden-Powell” という、たい作をみると、その 21 ページに、B-P が入学したチャーターハウス校の伝統ともいいうべき “fag system” のことが出ている。私は、この 2 人のスポンサーをおくという考え方には、やはり、fag system に関連があるように思うのである。fag system とは——上級生が下級生を家来 (けらい) にするという制度である。B-P がチャーターハウスのこの制度に、人 1 倍、適応できたのは、B-P には兄がたくさんいて、殊にワーリントン兄貴を艇長として

遠漕などした経験から、割合早くこの制度になじんだのだそうである。この flag system は後の、パトロールシステムの生まれるのに関連がありそうに思われるのであるが、かれこれ思い合わせて私はこのスポンサー制に興味を抱くのである。

さらに、このことは、open air と service との、Brotherhood である——という、ローバーリングの原理の 1 要素である——Brotherhood、兄弟仲間、——同志——ということの実験として、B—P が設けたものだろうと、私は考える。すなわち、スクワイアの段階、期間において、この 同志意識をしっかり養うという、極めて、要素的な方法だと解釈するのである。こういうところにも、原理と方法との結びつきが、ひそんでいる！

中世の従騎士については、白水社発行の「騎士道」35~38ページを読まれたい。私はそこにもやはり、スポンサーのような介添え役があるかどうか調べたが、どうもなさそうである。そうなると B—P は、騎士道の従騎士からヒントをえてスクワイアという段階はこれを設けたものの、その指南役のスポンサーというものは B—P の創案ではないかという見方が出てくるのである。

(e) ローバー・スクワイアになる資格

P. O. R. 264 に次のとく定めている——

「青年がクルーの 1 員となることを許可されるについては次の条件を認められねばならない。

- (1) 彼は G. S. M. および R. S. L. ならびにそのクルーによって認承されねばならぬ。
- (2) S. M. (少年隊長) によってスカウトとして推薦されるか、それとも S. M. (S) (年長隊長) または S. M. によってシニアスカウトとして推薦され、善行を含めたスカウトの義務を実行しようと努める者。または、今までスカウトでもシニアスカウトでもないのなら、喜んで実地のスカウティングを学び、戸外生活を続け、そして、スカウトプロミスとローを自分の生活の方針としてあらわすことによく異議のない者。
- (3) 許可の年令についてはこれを少年が成人期に進む途中の思春期における肉体および心理の発育によって定める必要がある。彼は少なくとも 17 才でなければならぬ。
- (4) 彼が許可の当日に 22 才の誕生日に達しておれば スクワイアにはなれない。
- とある。ただし、スコットランドでは最低 16 才とし

正ローバーの最低を 17 才としている。これは例外なので P. O. R. にはあげてない。これは規約の年令よりそれぞれ、1 年早めになる。

(d) スクワイアの期間

P. O. R. 551 の末項に定めている。ギルウェルコースの講義によると 6 カ月以上にわたることは例外中の例外だとしている。だいたい 6 カ月以内であって、R. S. L. が満足すれば、いつでも正ローバーに叙任できるのである。

スカウト歴のない者でも 6 カ月以内でこの自駿期間を終るのを適當としている。

スクワイアの訓練は、個人教授方式でもよいし、短期コースの方式をとってもよいとされている。短期コースの方式とは、スクワイアの人数が非常に多いという場合、または地区がそういうコースをひらく場合にとられている。

(e) スクワイアの必修課目

P. O. R. 551 に次の規定が出ている——

「ローバースクワイアはローバーに叙任されるまでに次の条件を完了して R. S. L. およびクルーを満足させねばならない——

- (1) "Scouting for Boys"
"The Wolf Cub's Handbook"
"Look Wide"
"Rovering to Success"
および近刊のシニアスカウトの文献を読み、研究していること。
- (2) スカウトプロミスと、ローをローバーとしての立場で研究、理解し、普段の生活において無我の奉仕をする精神にそれらをあてはめていること。
- (3) 1 級章をとっていること。または、スカウト年令の少年の 1 人に 2 級考查課目を指導するにたりるスカウト知識をじゅうぶんにもっておること（ただし、実地に指導しているところを見せる必要はない。）および 1 級課目 8、9、10 と 12 を考查するにたりる基準に達していること。
- (4) 団、地区、州の組織において問題となったスカウティング上の諸問題の討議に聰明に参加できること。
- (5) G. S. M. と R. S. L. とクルーとが要求した試行期間（日本流にいえば見習期間）を完了したこと。この期間は、できるだけ短期間で例外の場合だけが 6 カ月を越えるものとする。」

と定めている。

これらの条件は、どんな理由で設けられたのだろうか？

(1) に掲げた諸文献はスカウティングの全容を知る上に必読の本であって、こういう基本的な書物を読むことはスクワイアの義務でありその読み方を教え、討議することによって導くことは、スポンサーの側の義務でもある——という思想に基くものと私は解釈する。さらに、ここで注目したいのは、ローバーになるのなら “Rovering to Success”だけ読んだらよさそうなのに、そうでなく、カブ、スカウト、シニアにわたって読ませるという点である。換言すれば縦割りではなく横割りに理解させるやり方である。これは私の、いいすぎかもしれないが、日本人たちは、縦割りに偏し、横割りを軽視してはいないだろうか？ 自分の専門だけやっていればそれでよいのだという考え方が流行しているのではなかろうか？ よく、いわれるよう 「カブリーダーのスカウト知らず」 だの 「スカウトリーダーのカブ知らず」 だの……。戦後の若い人たちは「割り切って」いるといわれるが、もしそれがタテ割りだけのものであるとするならばバランスを失ない、独走になり、狭いものになるほかないだろう。それでは Look Wide 逆行する！

この(1)の条件は、スカウト歴をもたない者にとって、いっそう、重要である。こういう人たちにとっては「スカウティング、フォア、ボーイズ」などは、生れてはじめて見る本であろうから……。

なお、「近刊のシニアスカウトの文献」と特に書きそえてあるのは、英國連盟が、シニア部門の整備がまだふじゅうぶんであり、改正に改正をかさねようとしている意思を示しているものと私は解釈する。

さて、ここで日本のローバーのことをみると、私は、こういう基本の文献が日本ではまだそろっていないことを悲しむのである。仮りに訳本は1部あるにしてもそれさえ読まない者がいる。今、出ている訳本でもよいから、よく読み、討議によって研究してほしいものである。

次に(2)に示されたスカウトプロミス（ちかい）と、ロー（おきて）についてである。スカウト出身の者なら既修の課目だといえる。しかし、こここの条件は「ローバーの立ち場での研究、理解」(as they concern Rovers) という設定になっている。

ジャック・コックス著 “Ideas for Rover Scouts” の43ページに――

The Squire learn above all to see the Scout

Law and Promise from a man's and not a boy's point of view,

と記している。すなわち、子供の考え方によるのではなく大人として研究、理解するよう条件づけてある。すなわち、ローバーとして、いっそう、深い理解をするよう期待しているのである。

“Rovering to Success” の220～222ページにプロミスとローに対するB-Pのローバー用解説(Interpretation)が出ている。B-Pはそれほど、これを重視している。(本誌5月号掲載 P.16～17)

日本でも1部の人々は、ローバーむきの「おきて」を別に作ってほしいという。別のものを作るということは、どこの国もしていないからというのでこの要望は見送られているが、このことは、日本における、おきての表現が抽象的で物たりないということ、ただ、暗記させるだけで、スカウトたちは内容をつかんでいないこと。そして、ローバーの段階では、子供とちがうから、もっと、精神の糧になるものがほしい、という熱望から来ていると考えられる。そういう人たちが、このB-Pの解説を読まれたらおそらくはねばれるだろうと私は思う。

こういうことを考えると、日本のローバーは「ローバー」という正札を貼ってはいるが、はたして正札通りの商品なのかどうか、首をかしげざるを得ない。

(3)の条件。すなわち、1級章をもっているかあるいは2級課目の指導力をもち、かつ、1級課目の8、9、10、12の考査能力をもっている——という条件。これは、スカウト出身なら、そうむずかしくはない。けれども、スカウト歴のない者にとっては相当むずかしい。

英國少年1級の課目をみると――

- 8 は、縛材法のはさみしばりと、もどりどめ、耳どめ、消防夫腰掛結、よろい結、ローリングヒッチ
- 9 は、木樵法
- 10 は、読地図、方位
- 12 は、1級旅行

である。

このようなことができなかったら open air の brotherhood になれないし、service の brotherhood にもなれないという意味であろう。少なくとも団に対する奉仕として少年隊の指導を助ける力がないだろう。かつ、これは自分が自分に対する奉仕(自己研修)にもなる。合せて1本。／

(4)の条件――これは団、地区、州連への奉仕能力と

自分の成長を狙ったものと考えられる。また「運動に対する忠誠心」をあらわす機会でもある。私は、ロード・ロウォーラン (Lord Rowallan 前英國総長) が、ローバースカウトは、スカウティング運動の発電所であり電源だといったことばを思い出す。

以上の条件の内、いちばん最後に 1 級旅行を行ない、そして Vigil を終えてスクワイアの全課程を完修するのである。

スクワイアの課程は、主として討議 (discussion) と討論 (debate) を通じて進められる。これの相手はいうまでもなくスポンサーである。

ここでひとつ注目に値するには、すでに 1 級になっている者でも再考査があることがあるということである。日本では、ほとんど再考査をしないようであるが英國（他の国でも）は、しばしば再考査をしている。これについて、D. C. C. Handbook には、たとい彼がクイーンズスカウト（日本なら富士）であっても 1 級の再考査があることがある。1 級というものはそれほどすばらしい価値があるので、再考査されることを侮辱と感ずるようなスカウトはいない。——と記している。ほんとうは、いつ、なんどか再考査されても、びくともしないのが眞の 1 級スカウトである。日本の学校の考査みたいに考査がすんだら皆忘れてしまっても、1 度パスしたらそれは既得権で、まかり通る、という考え方とたいへんちがう。いざという

時、すぐ役立つ技能でなかったら「そなえよ、つねに」ではない。」

(f) スクワイアの服制

P. O. R. 267 によると——

「スカウトまたはシニアスカウトであった者は規約 287 に定める制服を着用し、規約 317 所定のバッジ類をつける。

スカウトまたはシニアスカウトでなかった者で、制服およびバッジを着用したいならば、テンダーフットのテストにパスして、スカウトプロミスをたてねばならない。」

と明記されている。

287 の規約を紹介すると——

○ローバー・スクワイアはすべてショルダーノットが緑色と黄色である。

○スカウト出身者はスカウトの制服

シニアスカウト出身者はシニアスカウトの制服
スカウト歴がない者でテンダーフットにパスし、プロミスをたてた者はスカウトの制服

なお、ローバーには、シーもエアもあるから服制はめんどうになるのでこれを省略しておく。

つづく (中村)

——次は正ローバーの訓練——

昭和 40 年度実修所開設予定表

	種別	期間	場所	開設担当		種別	期間	場所	開設担当
北海道	B S 5	6.24~29	札幌市近郊	北海道	東 海	B S 7	8.17~22	岐阜県関市	岐 阜
東 北	B S 9	6.3 ~ 8	岩手県二戸郡一戸町	岩 手	静 岡	C S 1	未 定	静岡県赤沢山	静 岡
関 東	B S 8	9.4 ~ 9	山中野営場	神奈川	近 縛	C S 2	8月下旬	兵 庫 県 内	兵 庫
	C S 5	7.6 ~ 11	//	//		B S 9	7.30~ 8.4	高 野 山	和歌山
	S S 1	8.18~23	//	//	大 阪	B S 5	4.30~ 5.5	大 阪 府 下	大 阪
東 京	B S 3	8月中旬	東京都町田市	東 京	中 国	B S 6	8.13~18	山 口 県 下	山 口
	C S 4	41年 3月下旬	東京都大島	//		B S 7	8.24~29	岡山県金光町	岡 山
北信越	C S 1	7.21~8.1	金沢市近郊	石 川	四 国	B S 4	8.21~26	香 川 連 盟	香 川
	B S 6	8.17~22	福 井 市	福 井	九 州	B S 8	10.29~11.3	長崎県大村市	長 崎
東 海	S S 1	8.19~24	愛知県佐久島	愛 知					

英國ローバーの研究

その6

VI 方法(2) プログラムの続き

(2) ローバースカウトの訓練

(a) 身分上の変化

日本の規約でいう見習ローバー、これは英國ではスクワイア (Squire) という騎士の従者を意味した特殊な呼び名で命名され、その性格は「見習」ではなくて「試行」を意味する自験段階であると私は解釈している。その理由については前に述べておいたからご承知のことと思う。ここで注意して頂きたいことは、これは Rover Squire と名づけているのであって、Rover Scout Squire とか、Rover Scout Squire とかいわない点である。すなわち、この段階では、まだ Scout 扱いをされない——ということである。この点は、日本の規約 525 条に——

18才以上の青年は、次の条件に適合する場合、見習青年スカウト（略称、見習ローバー）となり、青年隊に加わることができる。

とあって、スカウト扱いしているのと非常に違っている。私は、ここに、Squire と Scout との間に画然たる身分上のケジメがつけてあることに目を見はらざるを得ない。

すでに、ボーイスカウト→シニアスカウトであった者が、スクワイアの段階に上進したという場合について考えてみると、彼らは、スカウトのプロミスをしているから、まぎれもなくスカウトなのである。けれども、まだ彼はローバースカウトではなくて、その試行期にいるのだから、シニアスカウト（またはボーイスカウト）の段階で取得したスカウト格はもっているがまだ、ローバースカウトではない、というケジメをはっきりしていると私は解釈する。このことはスクワイアの服制にもあらわされている。

このスクワイアが、正ローバー、すなわち、ローバ

ースカウトになるためには、次の、条件を備えねばならない——

- スクワイアのプログラムを完修すること
- プレゼンテーションの準備としてB-Pがローバーのため義解した、プロミスとローの解釈を受け入れ、その実行に励む
- スポンサーと1級旅行をする
- Vigil (ヴィジル) をする
- Investiture (ローバーとしての叙任) をうけるという過程 (プロセス) を経なければならない。

以上のプロセスについて分析してみたい。

スクワイアの必修課目については前項で紹介したからここでは重複を避けたい。

○ B-P のローバー向けのローの義解は本誌 5 月号 16 ~17 ページに載っているからご覧ねがいたい。

○ 1 級旅行をとりあげた理由は、正ローバーは少なくとも 1 級スカウトの資格をもたねばならぬという原則によるものである。日本の規約にも 1 級の資質は要求されているが、特に、1 級旅行をあげてないのである。私見をのべて申しわけないが私は日本も 1 級旅行を必修としてほしいと思う。

○ 次の Vigil と Investiture については、述べたいことがたくさんある。Investiture は、叙任（騎士の叙任の故事からきている）であって、日本でいう上進（式）と根本において異なるニュアンスをもっているし Vigil は、カトリック教派の入信儀式の祈りからきている、などのことから、われわれ日本のスカウターにとって、聞いたことも見たこともない方法であるから後章の、ローバーリングにおけるセレモニーのところで分析、研究したいと考える。

これを要するに、英國ローバースカウトは日本のローバーよりも、きびしい課程（過程）をパスしているようである。前にも述べたように 100 パーセントの自発活動を要求され、期待されていると解するのである。

(b) ローバースカウト訓練の理念

これは英國流の思想からいえば The Training Stage——訓練段階である。スクワイアの段階はまだ訓練段階ではない。それは Probationary Stage (試行段階) なのである。(これを見習段階と受取る考え方もあるが私は試行段階と受取る。)

さて、この訓練段階における訓練階級こそ、われわれが徹底的に探究したい点なので、本稿では特に入念に紹介することにしたい。

ここで、いちばん基調となるものは P. O. R. 270 である。その訳文を、次に記すが、誤訳もあろうかと思うので、念のため原文からまずあげることにする。

Training Ideals

270. The Rover is expected to adapt and be governed by the following principles;—

- (1) His promise of duty of God, through conscientious effort to develop his own spiritual life, and through the practice of his religion.
- (2) His promise of duty to the Queen, through an earnest endeavour to secure a proper knowledge of the Government of his country, and to perform his duty as a citizen.
- (3) His promise of duty to his neighbours, through a logical development of the Scout good turn, after proper preparation and training, into some form of effective service to the community. In so doing he is asked to realize that his first service is to his home and to establish himself in life. He should make every endeavour to consolidate his position so that he is not a burden on others, or on the State.
- (4) His promise to obey the Scout Law, by adopting it as an ideal to be expressed in his actions, and in goodwill, fellowship and clean-living.

(訳文) ローバーは次にあげる原理によってそれに適応かつ管理されるよう期待される——

- (1) 彼の神へのデューティー(つとめ)のプロミスは、自己の精神生活を伸ばす良心に、恥じない努力および彼の宗教の実践を通じて行なわれる。
- (2) 彼の女王に対するデューティーのプロミスは、彼の国の統治につながるという本来の知識を確守するような熱心な努力を通じ、そして市民としてのデューティーを演ずるものであること。
- (3) 彼の隣人に対するデューティーのプロミスは、スカウトの善行を必然の結果として伸ばすもの

であり本来の準備と訓練の後に社会への奉仕を効果的に行なうなんらかの形に至らしめるものである。それを行なうにあたって彼は自分の家庭への奉仕を第1とする。それは自分の生計を立てることである。自分の身をかためるためにあらゆる努力を尽くさねばならない。それによって彼は他の人々の重荷とならないし、国家に負担をかけないことになるということを理解するよう求められている。

- (4) スカウト・ローに対するデューティーのプロミスは、そのローを彼の行動と善意をもって、友愛と純潔とをあらわす理念として、それを採用することによって達成すること。

以上である。この訳文は、はなはだ、へただとは思うが、私のノートから転載しておく。

この 270 条の原理から、271 条に出ている方法が生まれているのである。

271条 (Training—practical)

- (i) 叙任をうけた後、ローバーは肉体(body)、心(mind) および精神(spirit) の進歩発達を目的とする訓練を修める(undergo)だろう。その heading(柱) は次の通りである——

(a) 実技訓練 (Practical Training)

- スカウトクラフトをエクスペディションによって修める。

○プロジェクトの完成

○他の人たちへの奉仕の訓練

(b) 集合して行なう訓練 (Collective Training)

(世界事情 world affairs、国内事情 national affairs、教養課目 cultural subjects、他の人々への集団奉仕)

(c) 神に対するデューティーの訓練

- (ii) ローバー訓練の重要な部分は、クルーの仕事のマネージメント(処理、管理、経営)であって、それは R. S. L の総括的リーダーシップのもとで行なう。

- (iii) 奉仕作業の選択と準備には、周到な注意を必要とする。その理由はローバー各個人の要望いかんにもよるが、同様にまた、クルー全員の要望いかんにもかかるからである。

以上である。

これによって、われわれは、先にあげた「ローバースカウティング」というものは戸外活動と奉仕活動の同志仲間である——という第1原理が頭に浮かぶのである。(読者各位がここで原理と方法の結びつきをじゅ

うぶん研究理解されるよう望む)

P.O.R. 550, 552, 553, 554, 555, 556, 557 にわたって定められているローバーのバッジシステムというものは、以上の原理と方法に則ってできているのである。ここで付記しておきたいことはこのバッジシステムは、少なくとも 2 回改正されていることだ。その最初のものは、戦前の日本連盟が翻訳して刊行した「青年健児教範」(ローバーリング・シー・サクセス)の巻末の章に出ているもので、これはまだ完全なバッジシステムになっていない。今のシニアの進歩課目、または少年 1 級の課程とダブルものが多い。これは、当時まだシニア部門が分離独立していなかったからそれをもふくめたものだと考えられる。その後 1956 年に今のようなバッジシステムになり、それが 1958 年、1 部改正されて現在のものになった。本稿は、現行のものについて述べる。

(c) 現行のローバーバッジシステムとその通念

これは、P.O.R. の 550 に定めている。次にその全訳を掲げよう――

公認ローバーバッジ (Rovers Badges-Authorised)

ローバースカウトのバッジの総体的計画は次の通りである。

(1) Admission test (採用テスト)

これはローバースクワイアがローバースカウトになる時のテストで規約 551 条に定める。

(訳者記; これはすでに掲げたから省略する。)

(2) 総括技能章 (One general proficiency badge)

これは B-P アワード (B-P Award) で規約 552 条所定

(3) 5 種の専攻技能章 (Five special proficiency badges)

Scoutcraft Star 規約 553 条所定

Rambler's Badge // 554 //

Project Badge // 555 //

Service Training Star // 556 //

Rover Instructor Badge // 557 //

以上である。

ここで、proficiency badge を日本のいいかたで技能章ということにしておいたがほんとうは、上達章または熟達章あるいは練達章と訳すのが妥当であろう。なぜかといふと技能そのものに人間をあてはめるのなら技能章でよいし、技術というものが目的であるなら技能章でよいだろうが実は、人間が本体であって、人間に技術、技能をつけ加えるのであるから、技能は方

法であって目的ではない。目的は人間形成にあると考えるからである。

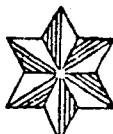
米国でいう Merit Badge も賞章、功績章であって技能章ではない。そしてこれもアワード (賞章) なのである。技術者養成を目的としていないのだ。

次に、目につくことは、以上 6 種のバッジの名称が Award と Star と Badge の三通りの使いわけになっている点である。けれども、どれもみなアワード (賞章) であって階級章ではない。ただ、なぜ三通りのいい方をするのか? その点は今のところ私にはわからない。しいていうならば、スターは星の形をした章だというだけしかわからない。

以上を基本として考えるとき私は、英國のローバーには階級がないことを知る。あるのはアチーブメント (Achievement 得業) によって受ける賞章 (アワード) だけである。けれどもこのアワードとともに、進歩につながる教育手段であることは説明するまでもなく明確である。それゆえ、進歩制度のカテゴリーに属する。それでバッジシステムとなっていると解する。

(d) 各バッジの研究

前述の 6 種のバッジのそれぞれについて、私は、P.O.R. の規約をここに紹介し、そして、現在の私として、できる限り分析、研究をした結果を申し述べたいと考える。ただし、順序は P.O.R. にある順序によらず、叙述の都合で B-P アワードを最後にまわした。



Scoutcraft Star.

(スカウトクラフトスター)

P.O.R. 553 に――

スカウトクラフト・スターは、左肩エポレットの、ランブラー・バッジの上位 (above、首に近い方) につける。

スカウトクラフト・スターは、R.S.L. の推薦により L.A. (地方連盟) が授与する。

このアワードについての条件 (状態 condition) は次の通りである。――

(1) ローバーであって、パックまたはツループのスカウター免許状 (Warrant) を有し、その該当部門の、プレリミナリー・トレーニング・コース (訳者注; ウッドバッジコースの予備コースで、日本の講習会程度のコース) 修了の資質をもち、かつ、スカウターとして少なくとも 6 カ月間満足すべき奉仕をした者は、このスターに値する。

(2) Warrant (訳者注；免許状——指導者としての)

をもたない者は次の課題を完修せねばならない。

(i) 少なくとも3カ所以上のちがったキャンプサイトにおいて少なくとも10回通計10夜以上野営し、Camping Standards (訳者注；これは公刊の基準書に定む) を完全に厳しく行なったこと。そしてそのLog (日誌) を作っておき、R.S.L. およびクルーに提出する。

(ii) 次にあげるプロフィシェンシーバッジの中任意の2章をシニアスカウトに教えかつ考査するだけの力をもたねばならない。

天文、野営管理、森林、炊事長、博物、年長開拓、追跡

(Astronomer, Camp Warden, Forester, Master Cook, Naturalist, Senior Pioneer, Tracker) ただし、選んだバッジにつきその指導員 (Instructor) または考査員 (Examiner) として実働するを要しない。

以上である。

○これは、スカウトから上進したり、シニアスカウトから上進した者にとっては、さほどむずかしくはないが、そうでない者にとっては相当むずかしいと思われる。スクヴィアの段階で1級の能力が要求される理由はここにある。

○Warrantについて説明せねばならないだろう。これは指導者免許状で、こういうものは、日本にはないからである。英国では、すべて免許制なので、コミッショナー、州コミッショナー、地区スカウター、団スカウター、日本でいう隊長、副長、その他のスカウター、ことごとく免許状を受ける。免許状 (Warrant) を必要としないスカウター (non-Warranted) もいるが、これは黄色の羽根の帽章をついている。隊リーダーは、カブ、スカウト、シニア、ローバーそれぞれ該当の免許状を受ける。それ故、たとえば、カブ指導者の免許状はスカウト隊には通用しない。つまり適格証である。これは君は名前ばかりの名誉職ではなく実働者であるぞという思想から来ている。

○エポレットとは、肩章である。ローバースカウトはグリーン色の△形のきれを両肩につける。下端に黄色でR.S.の字がししゅうしてある。(付記——シニアは栗色のエポレットをつける。)

○今日われわれは、シニア部門のよいリーダーを求めているが、私は、こういう行き方からも適材が養成されるということを学んだ。



Rambler's Badge

(ランブラー・バッジ)

Rambler とは、英語の辞書には、「ぶらぶらある人」「あてもなくある人」となっている。ランブラーとブラブラーと、よく似ているではないか!

われわれは、HikeとかExploreそしてこのRambleなどの語が、そのニュアンスにおいて、どういう区別があるのか、それに Rovering を加えて、どう、ちがうのか、明確にはわからない。ことばというものは、むずかしいものだ。

P.O.R.の554に——

ランブラー・バッジは、左肩のエポレット (epaulet) につける。ランブラー・バッジはR.S.L.の推薦により、L.A.が授与する。このアワードの条件は次の通りである——

(2) ローバーは、下記の、シニアスカウト・バッジの中、その一つの課目を教え、かつ、考査できる力をもたねばならない。

登山、ハイカー、地図作り、案内、水先案内、(Climber, Hiker, Map-maker, Pathfinder, Pilot) ただし、教えたり考査する実働を必要としない。そのほかに、少なくとも Ambulance Badge (野外救急) の水準において First Aid (第1手当……救急法) に値しなければならない。

(2) ローバーチームの1員として、連続4日以上の旅行 (3泊以上) または、48時間を超える旅行をそれぞれ2回 (各2泊) 終点から出発点へ戻る時間を勘定に入れて (訳者注；往復で48時間以上の意味である) しなければならない。この旅行は自分で計画立案し実施前に、それが高い基準としてじゅうぶんであるという承認を、R.S.L.およびD.C.(地区コミ) からもらわねばならない。

旅行は陸行でも水行でもよいし、国内でも国外でもよろしい。けれども、自己信頼、自主性決断心、指導性の諸資質を作りあげるようにくふうするとともに、耐久力 (体力、精神力) の決定的テストであるという内容をもっていなければならない。

判定のため、この Expedition の記録をR.S.L.とクルーに提出すること。

以上である。

これについての考察。

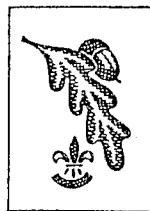
○この細目は、現行のものである。Rambler's BadgeだけはP.O.R. 1958年版から改正されて現行のようになつたのである。それ以前の規約は(2)の内容に旅行距離の規格が設けてあった。すなわち、徒歩または舟行で通算100マイル、自転車ならば400マイルというように。また、見聞事項もやや、具体的に野営好適地とか、迷い易い地点とか港湾、水路、とかを示してあった。(「青年健児教範」406ページ参照)そして通算100マイル(自転車なら400マイル)になつたら記録を提出することになつていて。

○これもやはり、戸外活動というローバーリングの要素を果す方法である。そして、前記スカウトクラフトスターの(2)の(i)の野営と関連がある。またこれも前述したことであるが(本稿、P.O.R. 271の(i)の(a)実技訓練 Practical Training の項で)「スカウトクラフトをエクスペディションによって修める」とあった。それが、こういう形で具体化されるのである。

○なお、改正前、すなわち、1956年4月1日以前に、旧規約に則つてRambler's Badgeを取得した者は、これを有効としてB-P Award 取得条件にかなうことにしている。

○この規約の表面だけを見ると、この旅行に、日々の善行とか、騎士精神の実行とか、宗教的探求(これは、後稿で述べるQuest…聖杯探求に関係あり)などという英國ローバーリングの中心にふれるものが、すべて隠されているように感じられる。すなわち、少年スカウトの1級旅行と、格段なちがいはないように思われる。(泊数だけは多いが)けれども、少年スカウトの1級程度のできばえでは、おそらくR.S.L.はパスさせないだろう。すなわち、log(報告書)なるものが、きわめて重視されるわけで、われわれは、この規約に隠されている探求(Quest)を見破らねばならない。日本流にいえば、これは、武者修行、諸国遍歴、巡礼遍路、禅の行脚、または天台の回峰行、山伏の修驗道、さては大自然に人身を流転させて神秘、驚異、宇宙の妙力を探り、そこに大エネルギーのはたらきを感じた芭蕉や西行の道にも通ずるものふくむだらうと考える。

この規約の示すものは、どこまでも方法であつて、原理(目的)は、その裏に隠されていると見なければならない。このように考えるととき、この、私の所見は、そう飛躍していないように思うのであるが、どんなものだらうか、読者の批判を頂きたい。



Project Badge

(プロジェクトバッジ)

P.O.R.の555に――

プロジェクト・バッジは右肩のエポレットにつける
プロジェクト・バッジは、R.S.L.の推薦により、
L.A.が授与する。

このアワードをうける条件は次の通りである――

- (1) ローバーは、プロジェクトを選び立案し少なくとも6ヶ月間にわたりそれに捧げねばならない。そしてその作業の記録を作らねばならない。

この期間中、少なくとも3回、その進捗状況を、R.S.L.とクルーに報告すること。(訳者注; 中間報告のこと) 記録を作るにあたり説明上必要あれば任意の模型、図表、地図その他の展示物を添付するといい。時として彼が必要とあらばクルーから助言や援助を受けててもよい。

- (2) 「プロジェクト」とは、自分が自分に課する作業で熟達(skill)と勤勉(application)と苦心(care)を要求するものと定義してよからう。ローバーは自分のプロジェクトの主題(subject)を自分で選ぶ。主題の選択については何の拘束もない。(それが妥当の範囲内なら) けれどもそれは、彼の生業に直接、関係のないものが望ましい。そして、今まであまりしたことのないものか、または、逆に、これまでかなり精通してはいても、それを遙かに高い水準にあげようとしたものでありたい。ローバーがプロジェクトの主題を選ぶとき、R.S.L.とクルーが、その主題なら、やり甲斐(やる値打ち)があると認めたものでなくてはならない。

- (3) 自分で選んだプロジェクトが、これでできあがつたと満足したならば、作業の結果をR.S.L.とクルーに説明せねばならない。R.S.L.とクルーは、助言の必要があるかどうかを検討した後、満足すべき水準に、彼が達した作業をしたか、どうかを判定する。

以上である。

これについて研究してみよう。

- 「プロジェクト法」は、1908年、米国マサチューセッツのスミス農業学校でスチムソン視学が発表した教育法でその起源はあたかもB-Pのスカウティング、の誕生と同年である。B-Pがスカウティングの方

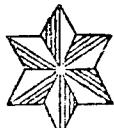
法としてこのプロジェクトメソッドを採用したことは、まことに卓見であった。私はここで戦前日本の青年団が「一人一研究」という制度を編み出したのを思い起こす。これもやはり、プロジェクト法と考えられる。そしてこれはローバー年令者に非常に適切な作業であり、その人間形成のため欠くことのできないものと思う。故に、作業の成果もたいせつであるが作業をすることによって自啓自発される人間性に狙いがあるのである。これ、skill (熟達) application (勤勉) および care (苦心) が要求されるゆえんである。

○このバッジはまたP.O.R.271の(i)の(b)にある。世界事情 (World affairs) 国内事情 (National affairs)、教養課目 (Cultural subjects) および集合訓練の下地となる個人プロジェクトという見方から関連がある。この規約を見るとこれは個人プロジェクトのようであるが、個人プロジェクトの成果は2次的にはグループプロジェクトの成果に関連を来たすと考えられる。

○またこれは、個性の発達に効果があるし、自発活動の奨励となる。また、特殊技能を啓培するという点でいわゆる技能章である。

○これに要する6ヶ月という期間（最小限…）は決して短かいものではない。自分が自分によほど、はっぱをかけなければ途中で挫折するだろう。耐力と頑張りを必要とする。何回となく試行錯誤も経験するだろう。この意味で知性のローバーリングといえるこの間、彼は、幾多の発見をするだろう。これは Quest (探求) であり Adventure (力だめし) である。またこれは Game (狩り) だといえる。

○計画→立案→実施→そして批判、という1連のプロジェクト構造は、まさにスカウティングそのものである。実践躬行→精究教理→道心堅固といわれるコースがそれである。



Service Training Star

(サービス・トレーニング・スター)

P.O.R.556に――

サービス・トレーニング・スターをもっている者は右肩のエポレットの、プロジェクト・バッジの上位 (above) につける。

サービス・トレーニング・スターは、R.S.L. の推薦により L.A. が授与する。

サービス・トレーニング・スターは、6ヶ月間グル

ープ (日本でいう団) のスカウターとして奉仕した者に授けられる。(それは、免許状 (Warrant) をすでにもっておろうと、免許を受けるための見習であろうと、ただの訓練としての奉仕であろうと、かまわない。)

その奉仕ぶりは D.C. (地区コミ) とその団の G.S.M. (団の教育長) を満足させねばならない。

(規約 262 を参照せよ)

以上である。

以上の内容について考えてみたい。

○規約 262 というのは――

ローバーは、クルーのメンバーのままでも Warrant はとれる。しかし、免許状をとったら、スカウターとしての任務の方を優先させねばならない。免許状をとっているからといって特にローバーとして上席なわけではない。

とある。

○ここでいう奉仕とは、カブ隊、スカウト隊、シニア隊に対する奉仕をさしている。それ故、世間にに対する奉仕はふくまれていない。

○どのような奉仕を、どの程度に尽くせばよいのか？それは、地区コミと団の G.S.M. の裁量にまかせているようである。

○このバッジは次にあげる Rover Instructor Badge と関連がある。

○これを所持しないと、Rover Instructor Badge はとれない。

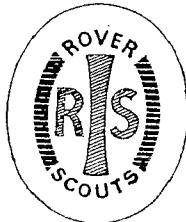
○英国には Instructor (指導員) というポストが規約上きめてある。(日本では設けていない。)

従って、ここでいう隊への奉仕とはインストラクターとしてではなく、その他の分野でする奉仕をさすと考えねばならぬ。それが、どういう分野なのかこれだけではわからない。たぶん、その点も G.S.M. の裁量によるのだろうと考えられる。けれども、6ヶ月間に1度や2度しかないような隊の行事への奉仕というような、パートタイム式の奉仕ではなかろう。

○見方を変えれば、これは Instructor になる予備訓練、(試行訓練) だといえる。すなわち、どんな優秀なローバーでも、6ヶ月間のこの奉仕に合格しなければ Instructor を志願する資格がない、というのではなかろうか？ 規約を捜してみたが、この点よくわからない。Instructor には免許制はなくその選任は地区コミが行なう。

○私は “Rovering to success” の 237 ページに、B-P が強調している「父性の訓練」(Training for Fatherhood) を、すべてのローバーに受けさせるた

めこういう方法を設けたのではなかろうか、という気がする。すなわち、将来、父親として子供を教育する練習を、ローバー年令において経験させておこうという狙いである。



Rover Instructor Badge

(ローバー・インストラクター・バッジ)

P.O.R. 557に――

ローバー・インストラクター・バッジは、右胸のポケットの上方 (above) につける。

ローバー・インストラクター・バッジは、R.S.L. の推薦により L.A. が授与する。

このバッジを賞与される前に、ローバーは、次のことをしていなければならない。

- (1) Service Training Star をもっていること。
- (2) R.S.L. の認承によってウルフカブパック、または、ボーイスカウツループあるいは、シニアスカウツループのインストラクターとして勤務 (acting) し、G.S.M. および C.M. か S.M. か S.T.M. (S) かの、満足を得たこと。
- (3) ウルフカブパックの場合、ローバーは――
 - (a) ファーストスターと、セカンドスターの課目および 2 種のプロフィシェンシーバッジの課目について知識を有し、それを教える能力をもっていること。
 - (b) 「ウルフカブス・ハンドブック」と、キズリングの「ジャングルブック」について妥当な知識をもっていることを示すこと。
- (4) ボーイスカウツループと、シニアスカウツループの場合、ローバーは――
 - (a) ファーストクラスバッジの課目と、2 種のシニアのプロフィシェンシーバッジについて知識を有しかつ教える能力をもっていること。そのプロフィシェンシーバッジの内、ひとつはシニア・パブリックサービス(公共奉仕)バッジであるべきこと。
 - (b) 「スカウティング・フォア・ボーイズ」に関し、妥当な知識を示すこと。
- (5) このバッジは、ローバースカウトがインストラクターの職をやめた場合 6 カ月以内に取りはずすものとする。

以上である。

以上について研究してみよう。

○前に述べた通り、このバッジは前掲のサービス・トレーニング・スターの教程をとつてから着手する課程で考え方によれば、奉仕の訓練を、実務にあらわす、勤務教程という段階になっている、と思われる。

○そしてこれは、「インストラクト章」にもなると考えられる。(ただし、カブインストラクターのバッジは別に規定されている…)

○これもやはりローバースカウトに「父性の訓練」をさせる機会であると考える。

○リーダーシップ(指導力)を養う道のひとつである。これは、シニア以上の年令者が希望するもので、公民教育の 1 要素である。



B-P Award

(ビーピーアワード)

P.O.R. 552 に――

B-P アワードは、左肩エポレットの上 (on) につける。

B-P アワードは、D.C. (地区コミ) と R.S.L. の推薦により L.A. がこれを授与する。

B-P アワードを受ける前、ローバースカウトは次のことをしておらねばならない――

- (1) Rambler's Badge をとっていること。
(1956年 4月 1 日以前にとった者も有効とする)

○Project Badge をとっていること。

(1956年 4月 1 日以前、Progress Badge をとった者も含む)

○Scoutcraft Star をとっていること。

○Service Training Star をとっていること。

(2) G.S.M. と R.S.L. および クルーの所見として彼がスカウト生活の模範を示している者でありかつローバーの標語「Service」を実行していると認められたこと。

(3) D.C. または D.C. がこの目的のために任命した A.D.C. (副地区コミ) の 1 人が、彼とする面接をすましたこと。

以上である。

そこで以上について研究してみよう。

○このアワードは、ローバーとして最高のアワードであると思われる。

○この取得条件に Rover Instructor Badge の取得が含まれていない点に注意をむけたい。このアワー

ドは、P.O.R.550の(2)によれば One general proficiency badge という説明がついているので私はこれを、一番最後にとる「総括的技能章」という意味に解した。総仕上げ——ということになるならば当然 Rover Instructor Badge の取得も含まれている筈だという解釈が出てくる。ところが、そうでない。そこで私は、なぜそういうことになったのか、その理由をあれこれと考えてみた。ただいまのところ、——

- Instructor というものは単なる奉仕者ではなく、規約上きめられた制度上の役職であるので、その採用員数には自ら制限がある。その制限は因果関係的に Rover Instructor Badge の授与員数を制限する。そういう制限を無視してまでもこれを授与するならば、名前だけの Instructor を製造することとなり易く、危険である。B-P Award 取得条件にこのバッジの取得を条件づけるならば、そうした危険をはらむ公算が大きい。よって、これを除外した——という考え方。
- 先に述べたように、Rover Instructor Badge は見方によれば「勤務章」すなわち Instructor 章のようだ。その点で他の Rambler's, S-craft, Project, Service Training などちがうとみる。よって B-P Award 取得条件に、これを含めていないのではないか?

以上のように私は現在、考えている。これでよいのかどうか? ご叱正いただきたい。

(e) このバッジシステムの変遷について

○最初、バッジシステムはなかった。
それは、「ローバーリング・ツー・サクセス」の初版と思われるものに示されていないことからの推測である。ただし、進級課目(必修)は載っているが、その内容は1級～シニアの段階と大差ないものである。

○私の所有の P.O.R.1947年版には、
Progress Badge (526条)
Rambler's Badge (527条)
そして 528 条として
The Rover Instructor Badge is not now issued.

とあるから、2本建である。

○いつから 2本建になったのか?

私の手元に資料がないのでわからない。

○現行のような 6本建になったのは、1956年4月1

日からである。

○1958年3月、英国は、Cub, Scout, Senior, Roverを通じてバッジシステムの大きな改正を行なった。このとき、先述したように Rambler's Badge の(2)が改正された。他の5種は改正しなかった。このときの資料は福岡の鳥越隆基氏が送ってくれました。たいへんありがとうございました。

○ここで、話題を変えて——

○Progress Badge が Project Badge と改められ

○Rambler's Badge が 1部改正になりそれに加えて

○Scoutcraft Star

○Service Training Star

という 2種の Star が新設され

以上を総括評価するような

○B-P Award が設けられ、
その枠外に、いま一つ

○Rover Instructor Badge

が加わって 6種とした——この構造(構成)というものを、われわれは、どう解釈し、理解し、さらにこれらの方針が、ローバーリングの原理に、どうつながり、どう展開するのか?

私は、この英國製の原図のメカニズムを、みなさんといっしょに大いに勉強したいと思うのである。

(f) その他のバッジシステムとの関係について

これについては、P.O.R.550の(4)に次のような規約がある。

○すでに Bushman's Thong をとっている者は、ローバーの制服にそれをつけ続けてよい。

○Seaman's Badge } をもっている者は、その re-Airman's Badge } replica (副章) を右腕の肩と肘の間に付けてよい。

○以上 3種についてはその内の 1種だけをつけることとする。

○Queen's Scout Badge 所有者は——

その小型の replica を左腕の肩と肘の間に付ける
これは、他のいかなる badge のどれにも代るものとする。

○Rover であると同時に、Scouter である者は——
これら 4種(訳者注: Bushman's と Seaman's と Airman's と Queen's) のどれも着けないこと。

(5)そして

○Rover で Interpreters(通訳章所持)の者は、——

emblem (1種の記章) をつける。(これはシニアスカウトがつけるものと同じものである。P.O.R. 522所定) 位置は、右胸ポケットの上(above) またはジャージーの同じ位置につける。それにはその国語名 (または1つ以上の国語名) を記す。

と、ある。

なお、(6)として—

B-P Award をとったローバーは、その他の Special proficiency badge (訳者注: Scoutcraft Star, Rambler's Badge, Project Badge, Service Training Badge) を制服から取りはずすこと。ただし、Rover Instructor Badge はこの限りで

はない。

(7) として—

1956年4月1日現在で Rambler's Badge または Progress Badge をとっていたローバーは B-P Award をとる日までそれをつけ続けてよい。

とある。

以上で、ローバースカウト (正ローバーのこと) の訓練という題目を終る。(中村)

次は、やはりプログラムに属するセレモニーについて紹介する予定。

** 若き集い

ロバームートの歌

古田誠一郎 作詞編曲

Moderato animato

1. そびえるみ山に雪輝くよ

つむじ風すさまじくたけりて歌う

ブン ブン ブン

ハイオ いまぞわれら ホイ

水に練り 山に鍛う

ハイオ おおたのしや ホイ 若きこの集い

2. そばたついわねに雲うずまくよ

滝の音轟きていのちを歌う

ブン ブン ブン

英國ローバーの研究

その7

IV 方 法 (3)

セレモニー (Ceremony)

1. セレモニーの本質についての研究

(a) 研究の必要性と、私のとった研究方法

ここで、ひらきなおって、セレモニーの本質を分析、研究する必要があるだろうか？ そんなにたいした必要はなさそうだと、私も、最初は思っていた。ところが、だんだん作業を進めていくうちに、私自身が、セレモニーの本質について研究不足だったことを知った。それも、カブ段階や、少年スカウト段階では、まだ許されもするが、ローバーの段階になると、もう許されないのである。というわけは、B-Pが、ローバーの段階において構想したセレモニーというものがわれわれの想像以上に、重大な位置におかれているからである。換言すれば、われわれが、カブやスカウト（少年）部門で扱っていたセレモニーなるものにくらべて、格段に、宗教的にして騎士道的であるからである。

そこで私は、この機会に、B-Pの意図を徹底的に探究してみようという情熱にとりつかれたのである。しかば、どんな探究方法をとるべきか？

それは――

- B-P の考えたセレモニーの本質（原理）
- セレモニーの目的
- セレモニーの方法

○ 英国ローバーが行なっているセレモニーのさまざまな形

○ 特に宗教および騎士道との関連
ということになるだろう。

(b) 資 料

以上の探究のため、私は、次の資料を集めてその文献的研究をした。

- Ceremonies of the Scout Movement (by Ken Stevens)
- Rover Scout — what they are and what they do
- The Presentation of Rover Scout
以上は、英國連盟発行
- Rover Scouting
- The Crew Scouter's Handbook
以上2冊は、カナダ連盟発行
- 騎士道 白水社発行(文庫クセジョ353巻)
著者 フィリップ・デュ・ピュイ・ド・クラン
シャン
訳者 川村克巳、新倉俊一
- アーサー王物語、講談社発行
(少年少女世界名作全集43)
原作 マロリー
訳者 中川正文
- その他
The Scout Movement (レイノルズ)
B-P's Scout (英連)
P.O.R. (英連) など

(c) 主要な文献および、私の学習報告

まず私は“Ceremonies of the Scout Movement”を読んだ。その3ページの序文の先頭に――

It is important to realize that ceremonies and ceremonial play an essential role in our training programme for citizenship.

(訳すと)――セレモニーと、セレモニーの演じ方が、われわれの、市民性を訓練する、プログラムに占めている要素的な役割を、理解することは重要なことである。

とあるのを読んで、私は、自分に反問した。かつ反省させられたのである。それは――

- ・私はセレモニーの本質を、知っているのだろうか？
- ・本質を知らないでおいて、今まで実施していたのではなかったろうか？
- ・ここに、はっきり、「訓練プログラムに占める役割」とあるのを、はきちがえて、訓練（または教育）でなしに、行事（event や function）化して用いていたのではなかっただろうか？（カブ隊あたりにしばしば見られるし、大きな組織、たとえば地区、県連レベルのセレモニーにも見られるもの）
- ・しかも、セレモニーが「市民性を訓練するプログラムに占める役割」と書いてあるが、どういうわけで市民性に結びつくのか？ 私には、ピンとこない。これをひとつの研究テーマにしよう。

次を読む。

The real purpose behind each ceremony is to leave a lasting and worth while memory with those taking part and, in particular, on the individual who is at the centre of the ceremony.

(訳すと)――それぞれのセレモニーの背後にひそんでいる本当の目的は、それに参加した人たちに、終生消えない、りっぱな思い出を残すことにある。殊にそのセレモニーの中心人物になったその人にとって、そうである。

○ この文で、セレモニーというものは、一生忘ることのできない思い出を残すこととする。もしも、通りいっぺんの行事におわって、何年かあとにはもう忘れてしまうようになったなら、それは、セレモニーの本質とは異質なものだということを考えさせる。

その下の段に――

There is virtue in the Movement striving for unity in ceremonial, especially if the aim is to abide by the Founder's own plan.

訳――セレモニーは、本運動のため、そのやり方を1体化(unity)するようつとめて行なうのを美德とする。創始者が自分で立案したセレモニーのやり方をわれわれが守るものにあっては、特にそういうである。

It is hoped that scouts will make every effort to keep the Founder's pattern and to develop the sense of unity in the Movement.

訳――この創始者が作ったパターン(型)を守って、本運動1体化のセンスを発達させるよう、あらゆる努力をすることがスカウター諸氏に望まれている。

と、示されている。

○ 私は、このふたつの文章で――

- ・セレモニーというものは、スカウト運動の1体化(unity)をはかることを狙っている。
- ・それゆえに、そのやり方もやはり、1体化を望む。殊に、B-P が作ったやり方においてそうである。
- ・国情や時勢の変化によって、細部はちがったり改正されても、本質はかえてならぬ、と、いうこと。
- ・スカウト運動1体感という感覚(センス)を伸ばすのに役立たせる。

のだと知った。

この unity (1体化) ということは、いろいろな面で強調されている。Promise (ちかい), Law (おきて), Motto (標語), Slogan (主張)、敬礼法、スカウト章、スカウトサイン、Uniform (制服)、記章 (badge, insignia, patch) などにそれは実現されている。

さて、私は、このページ(同書3ページ)を、もう一度、冒頭から読みなおしてみた。その結果、3行目にある次の文章も大切なことを発見した。

Like everything else in Scouting, the ceremonial is progressive from the investiture of a Wolf Cub to the presentation of a Wood Badge or an Award to a Scouter.

訳――このセレモニアルというものは、スカウティ

ングの、いたるところでみられるように、進歩的（漸進的）なものであって、それは、ウルフカブの叙任式から、だんだん、歩を進めて、スカウターのウッド・バッジ授与式や表彰式に至る漸進的な段階がある。（意訳）

- すなわち、カブ向きのセレモニーをボーイスカウトに課すならば少年たちは不満だろうし、ローバー用のセレモニーをシニアに課しても尺度が合わないという意味と解する。
- それでいて、前項にあげたような unity (1体化) は失ってはならない。
- 私が、この稿の始めに述べたように、カブやスカウトのセレモニーなら、私たちは、よく知っていたにしても、それだけの頭で、ローバーのセレモニーに接することはあぶないと思うようになつた——今の私の考え方方が、あやまっていないことをこの文で確認した。

いまひとつ——

B-P emphasized that to do this ceremonies must be SHORT, SIMPLE and SINCERE, and for most of them he gave us a pattern to follow.

訳——B-Pは、セレモニーはすべて、短時間に簡潔に、そして誠意をこめて、行なわねばならぬことを強調した。そして、われわれに、従うべき型（パターン）を、その主要なセレモニーについて示してくれた。

とある。これは、つまり、セレモニーの扱い方の要点である。この三つのSについては、どの本にもこれをのせている。

では——

- なぜ、短時間に簡潔にまじめに、せねばならないか？

これは参列者または本人が、一生忘れることのできない強い印象をきざんで、記憶にとどめる——という目的、それを達成させるためである。

- 特に、Investiture ceremony (叙任式、日本でいうところのちかいの式、または入隊式)においてこのことは要素となる。来賓の祝詞で長時間になって子供たちが退屈して、あくびをしたり、私語したり、笑ったりしたのでは、ぶちこわしである。

叙任式については、あの章でも述べるが、同書の4ページに、次の文がある。これは、米国流のセレモニーを見馴れている人たちにとっては、おどろきであろう。

The Founder himself pointed out that Investitures in all sections are private ceremonies to the particular section, I must not be thought, however, that ceremonies are something secret in Scouting ; all we do we do openly, (訳者注 we do we do と重複している)

訳——創始者自身は、全てどの部門でも各部門における叙任式はその部門内だけの私的のセレモニーである旨を指摘した。けれども、だからといって、セレモニーなるものを、スカウティングにおいてはなにか、秘密なもののようにみるというような考え方をしてはいけない。われわれは公々然と行なうのである。

と。

○ この文からることは——

たとえば、カブ隊のセレモニーは、カブ隊だけがする。スカウト隊や、シニア隊、ローバー隊はそれに参加しない、という形になる。

- その理由は、先にあげた漸進的という本質、つまり、カブ段階にはカブ向きのセレモニーでやるということによると思う。いきおい、その部門だけの私的なセレモニーにならざるを得ない。

○ 日本では、団 (Group) としてのセレモニーがある、カブ隊も、スカウト隊も、シニア隊もローバー隊も、参加するという例があるが、英國では、こういうセレモニーがあるのかないのか、私は知らない。もし、あったとしても、それは行事 (event または function) としてなされているのではないか、と思う。

- セレモニーなるものを、単なる行事と考えず、どこまでも教育（すなわちプログラム）と考える考え方方が、ここによく出ている。

このことは、さらに、その下の文

In spite of the 'open-ness' of our ceremonial, it is undesirable that any Investiture should be carried out as a public function.

訳——セレモニーを公々然とするといつても、叙任式は、どの部門の叙任式でも、それを公衆的行

事 (public function) として実施せよといふのではない。(そんなことをねがってはいない)

○ 見世物 (みせもの) にするな、ということ。
その下の方に――

We are often asked whether parents should be present, particularly at Investitures.

There is no "should" about it, but if a boy particularly wants his parents they can be invited. Certainly they should not be present without the boy's approval.

訳――特に、叙任式に際して、両親は出席せねばならないのか、どうか、という質問を、しばしばうける。これについては「ぜひ、出席せねばならぬ」ということはない。ただし、子供が自分の親を招待してほしいといふのであれば、出席してよいし、出席せねばならない。要するにその子供の賛成なしに、親が出席することがあってはならない。

とある。

○ 私は、どこまでも、子供本位である点に敬服せざるを得ない。この点で、日本でのセレモニーは、大人本位の傾向があるのではないか? と思う。ついでながら、米国流のやり方は、neighbourhood (近隣社会) 本位で、大人も子供も一丸となつたやり方だと私は思う。

以上、いろいろな要点を、この本 (Ceremonies of the Scout Movement) からひろい集めたのだが、その要目を整理すると、次のようになる――

- ①セレモニーは、市民性訓練のプログラムとして重要な役割を占める。
- ②故に、行事ではなくて教育 (すなわち、プログラム) である。
- ③終生の思い出となるもの、(心の金字塔である)。人間形成のチャンスである。
- ④スカウト運動の1体化を狙う。同時に、セレモニアルも1体的でありたい。
- ⑤それぞれの教育段階につれて漸進的 (progressive) であるべきこと。
- ⑥短かく、簡潔で、まじめに行なうべきこと。
- ⑦それぞれの部門だけの私的のものであるべきこと。

⑧みせ物にしてはならないこと。

⑨子供本位であるべきこと。

なお、これに加えて、同書は

⑩じゅうぶん準備すること。

そのため、リハーサル (rehearsal) を行ない、その段どり (procedure) (順序など) を、めいめいが、よく頭に入れておくこと。を、注意している。

さて、①にあげた市民性訓練のプログラムに、セレモニーが占める重要な役割――この部分が、さきに述べたように、私には、納得できなかったので、これを研究テーマとして作業を進めた。

まことに、天の助けというか、私は、カナダ連盟発行の、“The Crew Scouter's Handbook”を読む偶然の機会に恵まれた。私は、この本によって、この疑問を解決する鍵を発見することができた。(この本は、海上自衛隊の遠洋航海でカナダを訪れた和田有平氏、スカウターであり三等海尉のご厚意による。)

次に引用する英文に、この鍵を発見した――

同書38ページ

In Rover Scouting we must interpret the meaning of the word "ceremony" as "the behaviour regulated by the laws of strict personal discipline and self-control of the individual"

訳――ローバースカウティングにおいて、われわれは、この「セレモニー」という語を「きびしい人間の紀律と、めいめいの、自制の法則によって規定された行動様式」と、通訳せねばならない。In other words, by having participated in a Rover Scout ceremony, the individual participating must so discipline himself and exercise self-control by following the obligations he has undertaken, that he will be a better man for it.

訳――換言するならば、ローバースカウトとしての、セレモニーに参加することによって、各自の参加というものは、彼が、より、りっぱな人物となれるよう、自分を紀律し、彼に課せられる義務に従うよう自分をコントロール(自制)する実習、と、いうものでなくてはならない。

というのである。

- 私は、この紀律(discipline)と自紀(self-discipline)および、自制(self-control)を行動(behaviour)化し、そして、課せられた義務(obligation)に従う練習(実習)という意味から、市民性訓練との結びつきを理解するにいたった。
- 私は、セレモニーというものが、このような深い意義をもつことを今まで知らなかった。実は、現在でもまだ、ピンとこない。
- これが本当に、わかるには、宗教の裏付けをつかんでからのことであろう。そもそも、セレモニーというものは、宗教から来ている……！

同書、83ページの“Ceremony”の冒頭に、セレモニーということの通義がのっている。——興味があるので、引用しておく。

Since the beginning of recorded history ceremonies have played a very important part in the lives of men. History and literature contain many descriptions of ceremonies. The more ancient are steeped in tradition, and are beautiful to watch. Some are secret, some are allegorical, but whatever their form, ceremonies have been developed for a purpose. Of course, there are exceptions. We find travesties of the word “ceremony” where show and spectacle supplant the original purpose of the ceremony.

訳——歴史の記録時代になってからこのかた、セレモニーというものは、人間の生活上、重要な部分を占めて來た。歴史と文学とは、それらセレモニーについて多くの叙述をしている。古代にさかのばればさかのばるほど、それは、伝説にしみこんでいる。そのあるものは神秘的であり、また、あるものは寓話的である。けれども、その形が、どんな形であったにせよ、セレモニーというものは、ひとつの目的に向かって発達してきた。無論、例外はある。われわれは「セレモニー」という語の意味を、こっけい(滑稽)化して、ショーや、みせ物にし、その本来の目的を押しのけている例を知っている。

以上である。

われわれは、セレモニーという英語を式とか式典とか、儀礼とか、儀式とかの意味にのみ、解し易い。た

とえば、国旗儀礼、入隊式、進級式、任命式、授与式伝達式、上進式、表彰式、壮行式、入所式、閉所式……など、けれどもカブ部門の集合セレモニー(デン、デン、デン～大輪になろう……英國ではグランド、ホウル)だの、「私はよいスカウトになります」という終礼だの、英國の解散セレモニー(Pack dismiss)も、すべてセレモニーである。当番班の交替(申しおくり)もセレモニーである。

それゆえ、これを日本語であらわすことは適訳がないので、普通セレモニーとよんでいるのである。ただし、式典であることが自明なものについては××式といえることはいうまでもない。

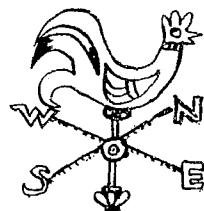
英國カブの、グランド、ホウル(grand howl)は、ジャングル・ブックの、オオカミの集議セレモニーからとったものだが、訓練上の狙いは、スマートネスと良い秩序(Smartness and good order)と紀律(discipline)を身につけ、わがままをしない—自分勝手なことをしない、という自制力(self-control)の訓練実習にほかならない。

前述した、市民性訓練のプログラムに重要な役割がある——という、1項は、このように分析すれば、だれにも納得できると思う。(つづく)

次は、英國ローバーのセレモニーの各論的研究。

なお、毎稿、英文をさし入れてあるのはローバー諸君や、リーダー各位の勉強に資するためであるが、かたがた、私の訳文に誤りがあるやも知れず、念のため付記するのである。

(中 村)



英國ローバーの研究

その8

IV 方法(3) セレモニー(続き)

2. ローバー部門のセレモニー

私は、前項において、セレモニーというものの本質を、徹底的に追求してみた。読者のある人々にとってあまりにもそれは迷惑であったかも知れない。けれども、講習会とか研修会または円卓会などにおいて、セレモニーというものが何であるか、という本質論を基本的に講述したり、討議したりする場合、こういう資料が必要となるだろうし、そして現在そういう資料のまとまったものが手に入らないという理由から、多少なりともお役に立てば、と考えて、私の至らない収穫を披露しておこうという微意から書きつづったのであることを諒とされたい。

(a) その特質

前項を、もう一度読みなおしていただければおわかりのように、カブのセレモニーや、ボーイスカウトのセレモニーなどは、まだセレモニーの本質の中の、ごく初步的な一部を実行に移しているだけだから、その限りにおいてセレモニーの性格や本質の全体をつかむことは無理であり、その程度の理解で満足してはならないことを私は学習したのであった。

白状するならば、私は、ローバー段階におけるセレモニーを勉強するまでは、いい加減な自己解釈で満足していたのである。ところが、私の甘い見方はむざんに破られた。特に、英國ローバーセレモニーは、ひじょうに特質をもっている。すなわち、カトリックの思想とその宗教儀式にそって作られた騎士道のセレモニーを土台として、その現代版とも考えられる方法を

B-P が組立てていたのだった。私はこのことを知るにおよんで、私の今までの甘い見方はきれいにうちのめされたのである。そして、ローバー部門には、他の部門(カブ、スカウト、シニア)のセレモニーでは想像もつかない深遠な設定(set up)が B-P によってなされているのに驚いたわけである。すなわち、これは、ローバーリングそのものが、原則的にカトリック的信仰と、騎士道精神を基調として組立てられているという原理に基いて、その方法としてのセレモニーもこの原理に結びついて展開されねばならないという当然の論理からきているのである。

いうまでもなく、今、私が申しているのは英國でのやり方であるから、日本のローバーも、そうあるべきだなどといっているのではない。日本のローバーリングは、私の見るところ、必ずしも、カトリック精神と、騎士道精神のみを土台としているのではないのだから、日本ローバーは、別のやり方(セレモニーの)があったって決して不都合ではないのである。私は英國ローバーの研究をしているのであって日本ローバーの研究そのものをしていないのではない。この点、誤解なきようおねがいする。

これについて愚考するに、米国において、ローバー部門が設けてないひとつの理由は、米国はカトリックだけでなくいろいろの宗教や教派が行われており、また、中世の騎士道も存在しなかったということが、大きな理由なのではなかろうか? という点である。他にも理由はあろうが、私はこの点を発見した。もし、これがその理由の真相だとするならば、わが日本として大なり小なり同じような条件下にある。ある人々は、日本の武士道をヨーロッパの騎士道と同一のように見るらしいが、果してその見解は正しいか? どうか? といえば問題はいくらもある。特に婦女に対する考え方などは男性を優先していて、むしろ異質だという人もある。宗教の方から見れば、カトリックの英國版ともいべき聖公会教義の流れが日本にもおよん

ではいるが、その他いろいろの宗教が日本にはあるので、その間の事情も、ほぼ米国のそれと似ている。そういう条件を吟味した上なのかどうか——とにかく日本のローバー部門は生れてしまったのだから、考えさせられることが、ひじょうに大きい。こういうサインを私は見のがしていた！

話は少々、わき道に入ったが、そういう大きなサインを発見したので、そのことを報告しておきたい。このサインは今後とも深く分析し解説されねばならぬのではあるまいか？！

(b) ローバースクワイアになる

セレモニー（2種）

“Ceremonies of the Scout Movement”によると、次の二つのセレモニーをあげている。

The Going-Up Ceremony

The Reception of a Rover Squire

直訳すれば

上進式

ローバースクワイア受領式（歓迎式）

である。

われわれは、シニアが上進式をすれば、ただちにローバーになるものと考えやすい。よって上進とは、シニアからローバーへの上進だと考える。ところが英国ではそうは考えないのである。この場合の上進とはシニアからローバースクワイアへの上進なのであって、まだ、ローバーへの上進ではないのである。この点をよく承知しておかねばならない。

ローバースクワイア（日本では見習ローバーと称する）という段階は、英國においては、日本人の人々が考えているような、なまやさしいものではなく、単なる見習でないということは、私がすでにくり返し再三力説した通りで、この段階は、果して自分はローバーに適するか、また、ローバーリングは自分に適するかどうかを自分で、またクルーの方でも、リーダーの側でも吟味する試験期なのである。

“Ceremonies of the Scout Movement”の24ページ以下によって、この

Going-Up Ceremony

を解説してみると——

○このセレモニーは新らしく紹介するもので既刊本には載っていないかった。

○このセレモニーはシニアスカウトが、ローバー年令に達したとき行う。

○ローバークルーの全員がこれに参列できるとはいえないが、参列することは無論、望ましい。

○2人のスポンサーは、R.S.L.と共に必ず参列してその役割を果さねばならぬ。

○シニア隊は馬蹄型に整列し、その中にS.S.L.が立ちR.S.L.と2人のスポンサーは、S.S.L.のうしろに立ち、シニア隊員の方を向く。（図解参照）



（式次第）

○S.S.L.は上進するシニアスカウトをR.S.L.にプレゼントする。

○S.S.L.「このジム、ブラウンは、×年間シニアスカウトとして奉仕して今、ローバースカウトになるのにじゅぶんな年令となりました。私は、この者をローバーの候補者として適當だと推薦します。あなたがこの男を、ローバースクワイアとして受領してくださいるよう心づもりを望みます。」

○R.S.L. から候補者へ

「ローバークルーに入って、スカウト訓練を完修したいというのは、君の自発意志によるのですか？」

○候補者

「はい。」

○R.S.L.

「では、クルーは喜んで君を仲間の1人とし

て受け入れます」

○G. S. M. から候補者に

「本団全員のリーダーとして私は、団の全員が君の前進をどんなに喜んでいるか、そして、君が君のローバースカウティングにおいて幸福であり成功されることを、いかに望んでいるかを君に伝えたいのであります」

○R. S. L. から

「私は、この黄色と緑色の肩房章をもって君を叙任します。この色はカブ部門とスカウト部門の色なのです。赤——すなわち、ローバー部の色——はまだ渡しません。君は、クルーのメンバーとして完全に加盟精神を果たすよう自分の心に準備するというデューティーを今、この場で胸に銘記してください。その成果をあげるため私は君に助力をしてくださるスポンサー（2人）に君をあずけます」

○………（スポンサーたち、候補者と握手する）

○………候補者はその左右にいるスポンサーと一緒に回れ右をし、シニアスカウトたちに向かって敬礼する。シニアたちは候補者に敬礼して祝声またはシニア隊イエールを三唱する。

（付記）

○もし、クルーが前掲図解に示すように出席しておれば、このセレモニーはスポンサーと、新しいスクワイアがクルーの隊列にはいることによって儀式は終りを飾る。そうでない場合は、敬礼と上述の祝声（cheers）をもって終るものとする。

私の学習

- ・以上の解説からみると、ローバーたち（クルー）が出席していない場合もあるということになる。そうなれば、これはシニア隊の壮行式ということになりそうである。
- ・ただ、普通の壮行会でなく
 - (イ) S. S. L. から R. S. L. への引渡し（プレゼント）
 - (ロ) さらに R. S. L. から スポンサーへの引渡し
 - (ハ) スポンサーと候補者の握手
 - (ニ) そして G. S. M. の立会と激励の辞という要素が加わっている。
- ・結果的に、本人からいえば上進式だといえる。けれども日本流にいう青年隊への上進式とか、ちかい再確認をふくめた入隊式とはちがうということ。

こういう点は日本で行っている観念とよほど異なる。

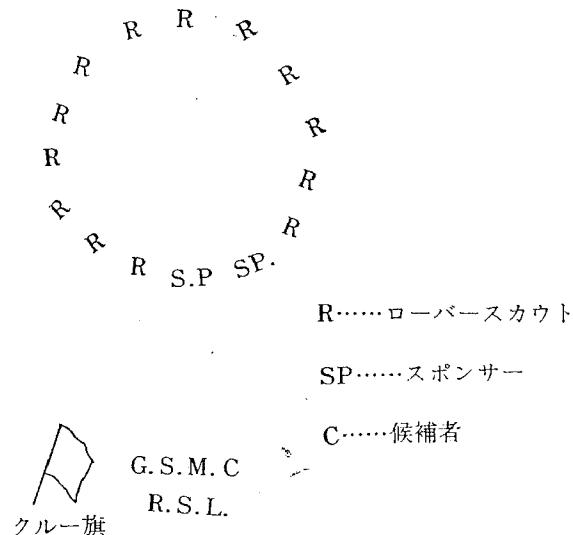
次は

Reception of a Rover Squire

（ローバースクワイア受入式、歓迎式）の解説。

同書（G. S. M.）の26ページ以下による。

（図解参照）



○このセレモニーは、1958年発刊の“Rover Scout — What they are and What they do”に始めてあらわれたものである。

○このセレモニーは、クルーの内部（うちわ）で行うものである。

○その対象は

- (イ) 新規にこの運動に入って来る者。
以前スカウティングに入っていたが中途で1、2年中絶して戻ってきた者もふくむ。
- (ロ) すべての人々。地区クルーに加入しているシニアスカウトもふくむ。
- (ハ) よその団に加入しているスカウトまたはシニアスカウト

とある。

・私は、少々疑問を抱いたので、“Rover Scout — What they are and What they do”の27ページを読んでみた。すると、This ceremony only used where the Candidate has come up from another Group, is new to the Movement or is joining a District Rover Crew,

と冒頭にイタリック活字で書いてある。これによると対象は――

- (イ) 他の団からはいってくる候補者
 - (ロ) 新規に本運動に入ってくる者
 - (ハ) 地区ローバークルーに加入している者
- 以上の者に対してのみ行う――ということ。
- ・そうなるとこれは、自分の団のシニア隊からローバースクワイアに上進する者には適用されないセレモニーだということになる。すなわち、この者は前記の Going-Up Ceremony に出場すればそれでよいわけだと解される。
 - ・その意味からこれは「歓迎式」だといえる。

(図解の説明)

- クルーは半円形に整列している。
- ローバースクワイアは、その後列に立つ。(in the rear を後列と解す――訳者)
- R. S. L. は中央に、そして2人のスポンサーと対面する。スポンサーとの距離は6歩。
- 候補者は、彼のプレゼンター(Presenter 提出者、推薦者)によって誘導されて入場。R. S. L. とスポンサーとの中間に位置をとり、R. S. L. に対面する。
もし、候補者が他団からの者であれば、その団のS. M. または S. S. L. が候補者をプレゼントせねばならない。
それ以外の候補者は、G. S. M. によってプレゼントされねばならない。
- 候補者が地区クルーからきた者の場合は、ディストリクト、スカウトマスター(District Scout-master)によってプレゼントされること。
- 候補者がスカウト歴をもたないならばテンダーフットのテストにパスしていかなければならない。

(式次第)

- プレゼンター(R. S. L. に対して――訳者注)
「私は、ジョン・スミスを、ローバースクワイアとしてのレセプションをうける候補者として、あなたにプレゼントします」
- R. S. L. (プレゼンターに対して――訳者注)
「あなたは、この人が、日々の善行をふくむスカウトの義務をつくす(to act up) よう努力(is trying) しつつある(または will try 努力しようとしている) こと、そして、このクルーのメンバーになる値うちがあるものと満足されています

か?」

○プレゼンター

「満足しています」

○R. S. L. から候補者に

「ローバーリングとは、戸外活動と奉仕活動の仲間ということです。この仲間入りをするには、スカウティングの実技についての知識を深くし、戸外生活を追求せねばならないが、あなたにはその覚悟がありますか?」

○候補者

「はい、あります」

○R. S. L.

「あなたの、第1の duty (責務) は家庭(home)への duty であり、それは、あなたが自分の生計を立てるということですが、そのことがわかっていますか?」

○候補者

「はい。わかっています」

○R. S. L.

「あなたは、将来とも、公共社会に奉仕するということのために、喜んで(進んで)自分自身を訓練しますか?」

○候補者

「いたします」

○R. S. L.

「あなたは、スカウトのプロミスとローにおいて強調されている生き方を受納しますか?」

○候補者

「受納します」

○R. S. L.

「それでは、私はあなたがスカウトプロミスのre-affirm(再確認)(または(make)たてること)を求めます。それは、あなたの真心の証拠として、また、ローバースクワイアとしてのあなたのレセプションのしるし(mark)としてです。私のあとについて一句一句、くりかえしなさい。私は名誉にかけて……ゴッドとクィーンに対する私のデューティを行なうため……いつも他の人々を助けるため……スカウトローに従うため……私のベストを尽くすことを約束します……」

○R. S. L.

始めてプロミスした者の場合、その者に対して
「私は、君が君の名誉にかけて、プロミスを守るのにベストを尽くすと信じます」

「私は、あなたを、ローバースクワイアとしてた

だ今、受入れます。」(左手で握手する)
(始めてプロミスした者に、「私はあなたが世界のスカウト兄弟の一員たることを許します」)
「私はあなたを、黄色と緑色の肩房章(Shoulder-Knot)をもって叙任します。これは、カブとスカウト部門の色です。ローバー部門の色——赤色の房はまだ渡しません。君はクルーのメンバーとして完全に加盟精神を果すよう自分の心に準備するというデューティーを、この場で胸に銘記してください。その成果をあげるため私は、君に助力して下さるスポンサーに君をあずけます。」

○スポンサーは前進し、年上の方のスポンサーは新ローバースクワイアの右、年下の方のスポンサーは左に位置する。プロポーザーは後退する。年上の方のスポンサーはクルーの仲間に對し、この新員を歓迎する辭を適当にのべ、彼をローバースクワイアの列に加えるため行進させる。

○スクワイアたちは、任意のやり方で彼を迎える。
以上である。

○私のもつ疑問

プロミスを立ててない者に立てさせるのは当然だと思うが、すでに立てた者にそれを re-affirm させるのはどういうわけなのか？ re-affirm はローバー叙任の時もさせるのだから何度もさせることになる。

○何度も re-affirm しても別にさしつかえはないともいえるが、Going-Up セレモニーの方に re-affirm が要求されていないのに、Reception セレモニーの方にだけに要求されているその理由が私にはよくわからない。

(c) ローバーになるセレモニー（3種）

ローバースクワイアが、スポンサーの助けによってスクワイアの課目を修め、その最終課目であるところの1級旅行を完修して、正ローバーになるには次のセレモニーがその者のために待ちうけている。

- Vigil (または Self-Examination)
- The Investiture (叙任)
- The Investiture Ceremony (叙任式)

○ただし、この三つの内、Vigil は、セレモニーとしての正規 (formal) のものとはされていない。

また、叙任についてのセレモニーとしては上記の第3番目のものだけなので、実質的には1種しかないことになる。

次に項を改めて、この三つの研究をしたい。

つづく (中村)

あなたはどう考えますか

この壁をどうする？

東京の中心部に、年少隊をもつ若い隊長はいる。こんど、隊長を引受けたことになったので、隊員の名簿を調べてみた。そしたら、隊員の90パーセントは、隊本部から遠い他の区に住んでいることを発見した。同じ区内に住む者は、少ししかいない。それでいて、通学している小学校は、その区内にあり、隊本部に近い二つの小学校の児童だということがわかった。その小学校というのは、いわゆる名門校なので、その児童の大部分は「越境入学」者なのである。だから、住居は他区である。その学校に籍のあるカブたちが、そういう事情からそうなっているのだとわかった。

なぜ、教育庁は、そういう越境入学を黙認しているのか？ それは、昼間の人口と夜の人口とは著しくちがうこと、その学区内は、事務所や、会社などが密生していて夜間は、人が住まない。従って子供がほとんどいない。越境入学を黙認しても、全校児童数は、200人に満たないのだから。もし、越境入学を許さなかったら、その学校は廃校になるほかはない。由緒ある名門校だから廃校することもできない……だから…こうならざるを得ない……と。

さて、ここで、その隊長は、ためいきをついて、こういうのである——「このカブが、上進して少年隊にはいったら、果して、まともな班制教育ができるだろうか？」「カブたちは、近き将来、受験という作用によって、数ヶ校の中学校にてんでんばらばらに入学するだろう。そうなれば、全部が全部うちの団の少年隊に上進するとは思えない。もし、幸運にして全員が、うちの少年隊に上進したとしても、彼等の住居が、大きさにいって、東京23区に散在すると仮定するならば、果して、緊密なメンバーによる班が組めるかどうか？ 組めたと仮定しても、班のチームワークや、班集会がまともにできるだろうか？ 私は、今からそれが心配です」と。

大都市の、少年隊は、大なり小なり、この種の事情にふりまわされて、本来の、正常な、班別制度が崩されているのではなかろうか？

これが、「壁」第1号である。

× × × ×

いま1人の少年隊長はいう。「カブからシニアになるまでに、2回ほど休隊を許さねばなりません」と。すなわち、小学校の6年と、中学3年、これが受験勉強という大義名分(?)によって少なくとも半ヶ年、休隊することをさすのである。

休隊に、二つのケースがある、という。

一は本人は休隊を望まないのに、親が、強引に休隊させるもの。その二は、逆に、親は、休隊をすすめないのに、本人が、休隊を迫まる。それは、スカウトでない学友の受験準備ぶりをながめた結果、じつとしていられないからなのである、と。

休隊しなかった者の方が、浪人にならないで進学し、休隊した者の方が、浪人する率が多いことは、ペテランの隊長たちが、口をそろえて証明するのであるが、受験期にある本人ならびにその親たちには、そういう事実は信じられない。いかにも、隊長が甘言を弄して引とめているかのようにひびくらしい。

さて、この2度の休隊から、どういう影響をわれわれは被ることになるか？

これが、第2の「壁」である。

これも、やはり、少年隊の班別制度に大きく響くのである。

経験上、班長らしい班長は中3であることは、すでに定説になっているといってよい。その肝心カナメの中3が休隊するために、班長はやむなく、中2の者に代行させねばならなくなる。中2だって、中3に負けないような、りっぱな班長もいることはいるが、それは、どちらかといえば、兄さんがスカウトだったり、本人が傑出している場合に限るので、例外に属するとしてよい。中2の班長といふものは、いろいろの点からいって班員をリードしてゆく力がたらない。中3の班長でも、ジョン・サーマンや、ローランド・フィリップスの、いうような班長ぶりは、なかなか、できないのだから、中2においては、無理なことはよくわかる。けれども、そうしなければ、ならない。

あれ、これ、考へると「受験準備」という悪鬼、班別

制度を攪（かく）乱す」ということになる。

この悪鬼は、いまひとつの害をする——それは、進歩制度への攪乱である。すなわち——1級らしい1級は、中3である、と、いう従前の水準が、中3の休隊によって駄目となり、休隊前に1級をとつておかなければ、とれなくなる——というアセリを、本人にも隊長にもおこさせる。時として親にまでそう思われる。そのため、中2の終りまでに1級にしてしまおう、と、ということになる。

現行の、1級課目の細目が作られた時点では、その対象は、だいたい、中3の第1学期から夏休み、が目標とされた。すなわち、中3の夏休みに、最終仕上げである1級旅行（規約843の6の(8)）をパスさせてやろうという親心がひそんでいた。

ところが、これを、中2で実施させる、と、なるといろいろ問題が出てくる。それだけの野営やハイクの基礎ができていないこと、体力、気力がないこと、方位判定、読図力が弱いことなど。だから、名目は1級でも、程度をさげた1級しかできない。1級旅行を、まともにやろうとすれば、実は中3でやらせても相当な冒険（力だめし）なのである。全国から海外派遣のため選抜されてきたスカウトの1級旅行が、今まで何回となく那須で行われたが、その成績を見て察知されることは、水準に達していない者が非常に多いということである。なかには、1級旅行のテストを受けないで1級になったらしい者がザラにあるのではなかろうかと、うわさされているそうだ。中3からシニアにかけてできえそうなのだから、いわんや中2においては、不可能に近いのではなかろうか？

× × × ×

以上は、主として、東京の隊長の、ことばをとりあげての観察なのだが、そのある点は、おそらく全国的な共通の問題をふくんでいるだろう。

こういう一連の社会情勢が、われわれの手で力で、どうにもならないのであるならば、そういう条件下での、まともな（原理にかなった）班別制度の在り方や運営は、どうあるべきか？ また、進歩制度の細目の程度とそのとらせ方に、改訂、工夫の必要はないだろうか？ 私は、この二つの壁に面して、いま、対坐している。

(中 村)

英國ローバーの研究

その9

IV 方法(3) セレモニー (続き)

3. Vigil の研究

(a) ローバーの Vigil

Vigil (ヴィジル) に関しては問題点がたくさんある。なんといってもわれわれには未知の概念であるから、その本来の意義および由来、そしてB-Pが、なぜ、これを取入れたか、等々の研究課題がある。おおざっぱにみても、これがカトリックのセレモニーであり、それから転じて騎士叙任のセレモニーとなったという故実は動かすことのできない事実である。そういうことの詮索(せんさく)は、あとまわしにして、B-Pが、どのようにこれをローバーのセレモニーに適用したかについて、次の書物から抜書してみた。

Ceremonies of the Scout Movement.

Rover Scouts—what they are and what they do.

The Presentation of a Rover Scout.

Policy, Organization & Rules (P.O.R.)

Crew Scouter's Handbook (カナダ)

④ P.O.R. 269 によると

Some process of self-examination (in the form of a vigil or otherwise) and an investiture, during which he will reaffirm or make the Scout Promise, are essential to emphasise the fact that as a Rover he is undertaking certain definite responsibilities. A form of ceremony, with suggestions for the self-examination or vigil, is published under the title, "The Presentation of

a Rover Scout", and may be had on payment from I.H.Q. (Equipment Dept.)

(訳) 彼がスカウトのプロミスを再確認したり、あるいは、プロミスするところの叙任(式)および、そのプロセスとしての自己試験(Vigil またはその他のやり方)を何かの形で行うということはローバーとなってから確実にその責任を実行する覚悟があるという事実を力説するという点で重要なことである。この自己試験または Vigil の型は "The Presentation of a Rover Scout" という書名の本に示唆してある。この書物は、英國連盟本部(用具部)から有料で入手できる。(意訳)

とある。すなわち、この条文は――

- ・ 叙任式に先だって自己試験または Vigil を行うことを規約をもって義務づけていること
- ・ 換言すればB-Pがたてたポリシイ(方針)であること
- ・ そして未知の人々にそのやり方を英國連盟の刊行書で示唆していること

を示している。

ゆえに、英國ローバーはだれもみな、こういう過程を経ている、と見なければならない。

(注意) 日本の青年スカウトには、こういう、きびしい自己省察を、規約上、課していない。そういう点で大いに注目に値する。換言すれば、英國の Rover Squire は「見習ローバー」ではなく、試行期であるということ。このことは前に何度も解説しておいたから再読されたい。単なる「見習」ではない――ということがたいせつ。

④ "The Presentation of a Rover Scout" の3~4ページによると――

- 叙任式や、自己試験または Vigil は創始者ベーデン・パウエルが、ローバースカウティング創設当

時にみずから書き記したものであること。

- Vigil (自己試験) と叙任 (Investiture) の二つをもってローバーとなる者のプレゼンテーションを構成すること。
(訳者注：プレゼンテーションという語の訳語は後の稿で検討する)
- これはスカウト歴を有する者にも有しない者にも共に課するものであること。
- Vigil および叙任のセレモニーの、やり方の程度は、そのクルーおよびその本人によって一様ではないが、できるだけ同じやり方が望ましいこと。
- スカウティングのどの部門のメンバーも、みな、ボランタリーなものであるから、ほんとうにローバースカウトになろうと決意することは容易なことではない。自分の過去を振りかえり、前途おぼろな将来のことよく考えて、神 (God) と仲間に対する奉仕ができるかどうかを、自分で試験するため黙想 (黙禱) しなさい——と。(原文は次に)

Scouting in all its branches is voluntary, and this cannot be made too clear to would-be Rover Scout. In his self-examination the young man reviews the past, thinks of future possibilities dimly seen, and dedicates himself in silence to the service of God and his fellow-men.

- この Vigil を欠くならば、ローバー叙任の意味がなくなる。

Without this the Rover Scout Investiture cannot be what it is meant to be.

以上がその要点である。これは日本の青年スカウトの上進式 (規約 527 条) の思想と、よほど、ちがう。日本の青年スカウトでは、神 (仏) への奉仕ということがその思想および組立の根本に、これほど、はっきりされていないのであるまいか?

読者は、次によつてその点を了察ありたい――

④ “Rover Scouts—what they are, what they do” の 29~30 ページによると――

次の自問自責の文が出ている。原文をのせたいが、長くなるので拙訳だけをのせる。

のみな成長するごとく、時は、刻一刻と迅速にすぎ去る。いうならば、一生は短かく、たちまちにして終る。

1. 私は、神から授かった自分の生命を、最善に生かしつつあるか、どうか?

2. 私は、なんら、ためになることをしないで、時を浪費してはいないだろうか?
3. 私は、人々に対して、まちがったことをしているのではなかろうか?
4. 私は、他の人々の力になろうとしないで、自分の悦楽や、金もうけや、出世のために、あまりにも多くを求めてはいないだろうか?
5. 私は、日々、だれかに害を加えたり、傷つけではないだろうか? それを、つぐなうこととなし得たか?
6. 私は、これまでに、だれかに助けられたことはないか? 私が助けてあげ得た人が 1 人でもあったろうか?

ボーイスカウトの、ローバー部門は「奉仕の仲間」だといわれている。それゆえ、これに加入するならば奉仕の仕方の訓練と奉仕をする訓練とを、多くの方法で身につける機会をもつことができる。その機会たるや次のことをしないならば、開かれないだろう。

1. 私は、単なる興味本位でローバー部門に加入しようとしてはいないか?
2. 私は、本気で自己を奉仕のための犠牲にするという覚悟をしているかどうか?
3. 私は、奉仕ということをどういう意味に考えているか?
4. 私は、自分の計画や実行において、自分のことよりも他人のことを、より多く思いやっているだろうか?
5. 私は、どういう種類の奉仕にいちばん適しているのだろうか?――家庭か、職場か、そして閑時においてか?

奉仕というものは、閑時にだけするものではない。奉仕は生き方の態度であつて、常に実際的の発現のためそれはげぐちを見い出さねばならないものである。

われわれは、奉仕に対する支払いや報酬を求めない。そのことは、われわれをそんなことにも拘束されない人間にさせるだけでよいのだ。使用者として奉仕するのではなくて、神とわが良心のために働くのである。このことは、われわれが人間であるということを意味する。われらの奉仕が成功するかしないかは、われわれの人格いかんに左右されることが、ひじょうに大きい。他の人々に良い影響を与えるよう、そのためには、自分自身を紀律せねばならない。

1. 私は過去において身についた悪い習慣をすてようと思うか、そして、する決意をしたかどうか?
2. 私の性格上、何が自分の弱点なのか?

3. 私は、絶対的に恥を知り、名誉を重んじ、誠実であって、信頼に値するだろうか？
 4. 私は、神と女王、国と家族、そして傭主、めした者の者たち、およびスカウト運動、友人、そして自分自身にも忠誠だろうか？
 5. 私は明朗だろうか、他の人々に対して快活で親切だろうか？
 6. 私は謹直（禁酒？）で清潔な生活をし、清潔な談話をしているかどうか？
 7. 物事が順調にゆかず意に反する場合、私は勇気をもってよくそれに耐えて意志を貫徹するかどうか？
 8. 私は他人の説得によって自分の意思を曲げるか、それとも自分の意思をもちつづけるか？
 9. 私は、賭ごと、飲酒、少女または婦女を害する——誘惑に打勝つだけの強い意志をもっているか、どうか？
 10. 私がもし、そのような誘惑に弱いならば、神の加護によってそれを改め、うちするよう、今ここで決心するかどうか？
- 私が真人間になり、眞の市民（公民）になって、私の國に信頼をかちうるよう前進する力を、神よ、恵みたまえ。

× × ×

以上が Vigil において自分が自分の心に問う内容である。日本のスカウトが奉仕といふものを道徳的に考えているのとよほどちがう。宗教上から考えている。

◎ Ceremonies of the Scout Movement の 28 ページによれば――

- 厳密にいうならば、Vigil はセレモニーではない。
- しかし、団によってはセレモニーとして行ってよい。
- ローバースクワイアは、ぜひとも、各自のやり方で自己試問または Vigil を行わねばならない。
- 上記に掲げた諸問について自省することが望ましい。
- 実施する場所は、静かな田舎とか、自分の個室とか、教会とか、スポンサーが同行する週末キャンプとかである。
- これは個人の自主的なものであるから、強要されたり、不自然な、わざとらしいやり方ではならない。
- Vigil をする場所について R.S.L. はよい助言をする必要がある。

と記している。

◎ カナダ連盟発行の The Crew Leader Handbook の 84 ページにも

The Vigil is not a ceremony, it is a requirement for Investiture.

（誤）Vigil はセレモニーではない。叙任のためのひとつの必要条件（課目）である。

と。

○ Jack Cox 著 “Ideas for Rover Scouts” の 48 ~49 ページに例話が出ている。

(b) 元来の Vigil

キリスト教徒でない私には元来の Vigil の本質がわからない。そこでカトリックの信者の人々にたずねただが要領がつかめなかった。復活祭の前の木曜日に行っているという話をきいた。私は、洗礼をうける前夜に Vigil をするのかと考えたがそうではないとのことだった。幸い、国際基督教大学に勤めている松行康夫氏（富士スカウト第1号で現在新宿地区コミ）の好意によって “The New Schaff-Herzog Encyclopedia of Religious Knowledge” の Vigil のところのコピイをいただいた。それを読むと、Vigil とは元来 hymns (聖歌) と prayers (祈り) と lesson (聖書朗讀) と procession (行列詠歌祈禱) によって構成された礼拝式 (Service) だという。その勤行の日は、時代により、また、宗派によって一様ではないが、いわゆる大祭のとき行うという点で一致している。復活祭の前と後にする例が多い。もともとは旧教のものだが新教のある宗派でも行う例があげてある。宗派によっては日本でいう除夜（年末の夜）に行うのもある。

私は正ローバーになる叙任式の前夜に、スクワイアが通夜連禱するよう B-P が奨めたということ、そして、それは中世の騎士のスクワイア（準騎士）が正騎士（ナイト）に叙任される日の前夜に、通夜連禱を行ったという故事をとり入れて B-P が復原したということから、カトリックにおいても洗礼をうける前か何かに、Vigil (通夜連禱) をするのだろうと推察したのであったが、その考え方はちがっていたようである。B-P のいう Vigil は単独で行う自発的なものだが、教会の Vigil は大ぜいで行うという点でも異質である。むしろキリスト教会でいう「告解」をふくむではなかろうか？ 私はこの意味で「告解」の研究も少々試みたが、これも B-P のいう Vigil とは同じも

のではないことを知った。（新教新書38巻「説教、告解、聖餐」による）

以上の点からB-PのいうVigilの研究には、むしろ中世騎士のVigilを研究する方が命中率が多いという判断に到達した。

(c) 中世騎士のVigil—の研究

この研究上、ひじょうに参考になった本は、白水社発行の「騎士道」（クゼジュ文庫353巻）である。これは“La Chevalerie”的翻訳。原著者はフィリップ・デュ・ピュイ・ド・クランシャン。訳者は川村克己、新倉俊一。価格180円という手頃な書物である。

私は、こういう良書のあることを知らなかったのだが、これも富士スカウト出身の於保信義君（慶應R.S.）の協働によって入手できた。

この書物から重要な点を抜書すると――

- ゲルマンの戦士は成人式を行ったこと。
- それがキリスト教精神の影響によって戦士から騎士に叙任するというセレモニーに変った。
- 騎士叙任式は、カトリックのセレモニーに準拠し司祭が司会した。
- そのため司祭用の「叙任式典礼定式書」というものが作られた。（現存する最古のものは西紀950年頃に編さんしたものである）
- こういう宗教との結びつきによって、騎士道が育っていった。そして従騎士と正騎士の別を設け、武技はもちろん、信仰についても試行中の者をスクワイヤ（従騎士）とし、その者が一定のテストに及第し、明確な信仰をもったときに始めて正騎士（ナイト）に叙任される。
- これが「騎士身分入り」である。

前記、ローバーのプレゼンテーション(Presentation)という語は、この「身分入り」のことだろうと私は解してみた。

- この本の44ページをみると――

騎士叙任式の作法は、たいてい、つぎの四つの部分を含んでいたという。

- (1) 告解と武器の通夜連禱
 - (2) 聖体拝領
 - (3) 武具授与と頸(くび)打ち
 - (4) 祝宴
- (以上原文)

である。

私はこのなかの(1)がVigilであり(2)と(3)が叙任式そのものに相当すると解釈する。

○ そう考えるならば、Vigilというものは1種の告解である。けれども常に教会でなされる「告白」「ざんげ」とは少々ちがうだろう。

また、ローバーのVigilと、騎士の通夜連禱とちがう点は、騎士には「武器に対する通夜連禱がある」が、ローバーの方には武器はないから、良心に対する祈りだけになる。

○ この形からみても Vigil は叙任式 (Investiture ceremony) の前夜祭だというニュアンスが濃厚である。

なお、騎士道というものとスカウティングの関係について、この本は120~125ページにわたり、たいへん興味ある記事をのせている。ボーイスカウトのみが騎士道の後継者だという論旨である。原著者クランシャンはスカウト出身者ではなかろうか？

この本から引用したいことはたくさんあるが、紙数の関係上残念ながら割愛する。

4. ローバー叙任セレモニーの研究

(a) 叙任とは？

叙任 (Investiture) という語は、われわれにはじみが薄い。ところが英国では、正カブになるのも、正スカウト、正シニアスカウト、正ローバーになるときも、すべて「叙任する」という形で扱われる。これはおそらく準騎士が正騎士に叙任されたという故実にのっとって、B-Pが、そう規定したのだろうと思う。（ただし、私の独断です）

日本でいうところの入隊式、または「ちかい」の式（戦前は宣誓式といった）といいいかたは英國にはない。これらを叙任式 (Investiture ceremony) と称している。

前記の参考書のどれにも、次のような解説がしてある――

- 叙任式における、当事者の間のことばのやりとりの原文はB-Pの作であるから大切であること。
- 式は祈禱をもって閉じること（スカウト祈禱書による）。
- 式の会場は、Vigilと同じように教会または礼拝堂、または、野外とか、ローバースカウトのデンで

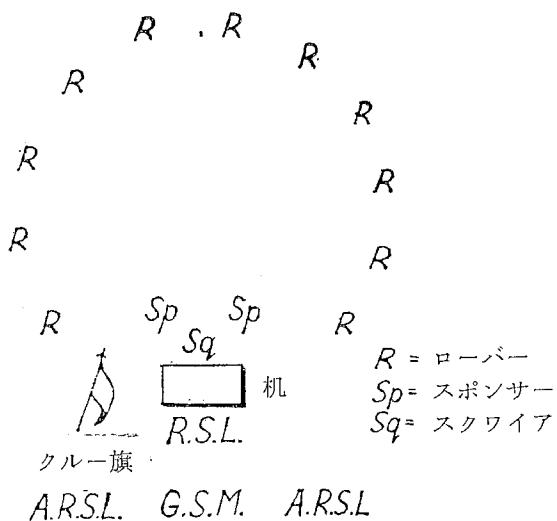
行う。

- デンで行う場合は、クルーの夕方のプログラムのあとで行うのがローバーにとって好都合だろう。
(式のためわざわざ出てこなくてよいから)
- 叙任式は、公衆の面前で行ってはならぬ。これは厳肅なもので、クルー生活の実現なのだ。
と示している。

以上から学んだ私の学習は――

- ・ 叙任は、B-P不在の現在でもB-Pによって叙任されるのだ――という考え方方がうかがわれる。
- ・ 祈禱書を用いるということは、やはり騎士の叙任の再現をあらわし、かつ、「神のチームの1員となる」というB-Pの主張をふくんでいること。
- ・ 米国のやり方とちがい、式は公開せず、クルーそれ自身の生活として厳修するという思想である。

(b) ローバー叙任式の式次第 (The Investiture Ceremony)



- Vigil (自己試験) をすませた青年はクルーの前につてこられる。
- クルーの全員は制服着用。
- スポンサーになっている2人のローバーも参列する。
- 机は、聖ジョージの十字のしるしのある旗(布)でカバーされ、机の上には、水を入れた水さしと、鉢、およびナプキンが置いてある。
- R.S.L.は、その机のところに立つ。そして一同に面して候補者の氏名を呼びあげる。

リーダー「あなたは、全世界に仲間をもつこのローバースカウトになりたくて来たのですか？」

候補者 「はい。そういうねがいできました」

リーダー「あなたは、これまでどんな困難にもめげずやって来ましたね。そして今、名誉を重んじて、誠実に日々のおこないを正しく保ち、思考にも、談話にも清潔であるよう、最善を尽くす決意でここに来たのであるが、それを全部行いますか？」

候補者 「行います」

リーダー「あなたはそれを、いのちにかけてするといふことを慎重に考えたのですか？」

候補者 「はい。慎重に考えました」

リーダー「あなたは、奉仕というものは、どんなときでもいつも、だれに対してでも、やさしくなされ人々を助けるため、たとえそれが自分にとって都合がわるくても、愉快なものでなくとも、または、自分の安全にならなくても最善をつくしてするものだという意味をよく理解し、そのうえ、したことに対する報いを期待しないということがわかっていますか？」

候補者 「はい。よくわかっています」

リーダー「あなたは、ローバースカウトになることによって、われわれの仲間に加入することになるが、その仲間とは、われわれがあなたの理想の実現を助けてあげようとする仲間であること、また、あなたがわれわれのルールに服従して、他の人々に奉仕するというわれわれの標語を実行するよう、あなたにおねがいする仲間なのだということが、おわかりですか？」

候補者 「はい、わかっています」

リーダー「昔、騎士になる人々が騎士になる時、水できよめる習慣があり、それによって過去の悪を洗いおとす象徴とし、清浄になる決意のサインとしたことがあります。あなたは、今、みんなの見ているままで、喜んでそのようなサインをする意思がありますか？」

候補者 「はい。あります」

〔候補者――もし1人以上であるならば順々に、水鉢の上に両手を出す。スポンサーの内の1人は、水さしをかざしてその両手に水をそそぐ。いま1人のスポンサーは、ナプキンをもってその両手をふいてやる。〕

リーダー「よろしい。すべて了解しました。では次にあなたのスカウト・プロミスを更新(renew)

(または、make ちかう——註：スカウト歴のない者の場合)することをねがいます。それは、少年として立場でなく、大人としての立場からの解釈をもってするよう期待されていることを心にとめてほしい。

(候補者は、前に進み出る。それと同時に、ローバーメートは、団旗をさげて進み、ローバーリーダーと候補者との中間に旗を下げる。候補者は左手で旗をつかみ右手でスカウトサインをする。)

候補者 「私は、名誉にかけて

ゴッドとクィーンに対する

私のデューティを行なうため
いつも他の人々を助けるため

スカウト・ローに従うため

私のベストを尽くすことを約束します」

ローバーリーダーは、これによってこの新しいローバースカウトを左手でつかみ、右手で彼の肩にbuffet(打撃)を加える。そしていいわたす。

リーダー 「私は、あなたが、名誉にかけてあなたのプロミスを守るものと信じます。いまbuffetを進呈したわけは、昔の騎士が頸(くび)打ちを受けたことをあなたに思い出させるためで、そのことはあなたが、ひとつの感じやすい点をもっていること、すなわち、あなたの名誉ということ(訳注：恥を知るということ)で、それに反対な汚名よりも、ずっとすみやかに感じなければならないものは、このほかに何ひとつとしてあってはなりません。」

いい終ると、ローバーリーダーはこの新ローバーの肩につけるshoulder knot(肩ふき章)とバッジを与えて、次のことばをいう――

リーダー 「この、黄と緑と赤の肩ふき章は、われら兄弟仲間の、三つの部門をあらわす色であります。(スカウト歴のなかった者に対しては、――その兄弟仲間に、今、あなたを迎えたのですよ――と付言すること)そして、それはあなたが、あなたよりか年下の弟たちに対する、あなたのデューティをもっていること、ローバースカウトとしてそういう責任をもっていること、それゆえに、あなたはいつも最善を尽くして、弟たちに良い模範を示すよう、あなたの心に銘じてほしいためのしるしなのです。」

クルーは、この新しいローバースカウトのまわりにやって来て握手して歓迎する。

(文中………の部分は、イタリック活字の部分を示した)

以上がローバー叙任式の筋書である。私は数年前、鎌倉R.S.の発隊式に招かれたことがあるが、そのときR.S.L.の稻葉正凱氏(故人)が、だいたいこれと同じセレモニーを司会された。稻葉氏はロンドン大学R.S.のメンバーだったので、ご自分の叙任のときを思い出されていた。

ここで私は、どうしても、騎士の叙任式について研究せねばならなくなつた。

(c) 中世騎士の叙任式

これについての参考書は、前述したクランシャン著の「騎士道」がいちばん適当だと思う。同書の40~51ページにわたってかなりくわしく出ている。その中から要約して、ローバー叙任式との結びつきを見い出してみよう。

○ 騎士叙任式の儀式は一定のものではなく、たえず変化していた。たとえば、同じ騎士の手で同じ場所でなされても数ヵ月の差で、いちじるしく異なった例もあった。

○ それゆえ司祭用の典礼定式書とか、武勲詩からその一端をうかがうほかに手がない。

○ それは主として11~12世紀の素朴な叙任式がわかるにすぎない。14~15世紀になると、この古式がくずれて形式的にはでになつた。

○ 元来、ゲルマン的風習だった武器授与式がキリスト教の影響によって騎士叙任式という形に變ったのである。變った年代はわからない。

(注：私はここで、さきに保留しておいた、プレゼンテーションの語意は、この武器授与の授与(Presentation)からきていると思う)

すなわち、騎兵としての武器——剣、槍、くさりかたびら、かぶと、楯、それに騎兵の本分としての拍車——の授与である。拍車は騎士のシンボルとされた。

○ 頸打ちについて(同書43ページ)

騎士身分の武具を挙げる従騎士は、儀式執行者の前で合掌、ときには膝まずいている場合もあるが、たいていは立ったまま頭を垂れていた。儀式執行者は剣をさけた皮帶を従騎士の腰に巻き、拍車をつけてやつた後、拳骨か平手の一撃を、思いきり強

く首の付根に加えた。この仕草の由来は何であったか。儀式の中でいかに重要であったか！

これに六つの解釈がある。

- 1 「合点か？」、「合点だ」という意味で、新旧両騎士の合意をあらわす。
 - 2 「記憶に残す」ための痛撃である。
 - 3 「正騎士と従騎士の境界線」のしるし。これは測量師の風習にもある。境界で平手打ちをきます。
 - 4 「耐力または胆だめし」だ。それでたおれるような者は落第。
 - 5 「古代にあった血をすりあった盟約」の名残りで肉体的に資格を与えるものという解釈。
 - 6 「1種の首のすげかえ」すなわち新旧交代の意味にとる説。
- 注意すべきは、英國の騎士はこの「頸打ち」を知らなかつたことである。（それなのにB-Pはこれを採用した——注）
 - 騎士に武具使用の権利があるのはキリスト教としての業をなす場合に限ること。
 - 叙任の前夜
深更、若い従騎士は告解をすませ、教会または礼拝堂に一夜を祈りあかす。祭壇には自分がもう剣が安置される。これが武器の通夜連禱である。
(注：私見、これが中世騎士のVigilであろう)
 - 翌朝、従騎士は聖体を拝む。聖体拝領。（これはよくわからない——筆者）そして叙任式場にのぞむ。
 - 従騎士は執行者の前に進み出る。司祭が剣に祝別を与える。執行者、その剣をつけた皮帶を新任騎士の腰につけてやる。足に拍車をつけてやる。介添人か代父（スポンサーに相当する）が、かぶと、くさりかたびら、楯をつけてやる。この拝領中、本人は司祭または式執行書の命に応じて、騎士の誓文をのべ、祈禱文を唱える。

まだこまかい記事があるが省略する。

以上によって、B-Pがとり入れた部分が、だいたいつかめるであろう。あとは読者のご研究をまちたい。

5. 叙任後のセレモニー

“Ceremonies of the Scout Movement”によると、叙任後にも、いろいろのセレモニーがある。

たとえば、

Presentation of a B-P Aword (B-P 章授与式)

その他のR.S.アワードの授与式

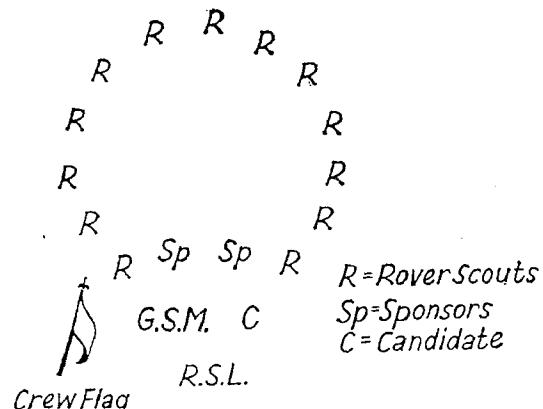
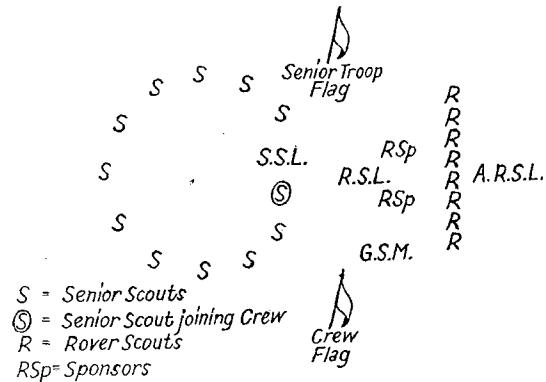
R.S.にして指導者免許状(Warrant)の授与される式などがそれである。これらには、B-Pのこした形というものはなく、それぞれのクルーで適宜に作りあげてよいので本稿では省略する。

6. 付 記

このほか、キリスト教からきたものが他にもある。たとえば、聖杯の探求(Quest)がある時代の英國ローバーで、本当に試行されたという話は、レイノルズの運動史にも出ている。聖杯の探求について「アーサー王物語」を私は興味深く読んだことがある。(講談社発行の少年少女世界名作全集43巻アーサー王物語マロリー作 中川正文訳 230円)

このQuestという語は、課目とか探求テーマという意味で、ローバー用語になっているが、そのモトは聖杯の探求から出ているのである。(中村)

第8稿に掲載しました図は不明確でしたので、ここに改めて、掲載いたします。



英國ローバーの研究

その 10 (終稿)

V. 結語

(1) 不明な点 (ローバーのパトロールについて)

私は、自分のしたこの作業について、まだまだ研究不足の実情を告白せねばならない。その一例はローバーのパトロールについてである。

ローバー部門でのパトロールは、ボーイスカウト隊でのパトロールとはそのあり方が、はなはだ異なることは一応わかっていた。そのことはシニア部門においてすでにいわれている。パトロールシステムは、スカウティングの展開上、原則的な母体ないしは活動の単位だとされているから、これを否定するわけにはいかない。けれども、シニア部門にあっては、パトロールのほかに、特別作業チームという意味のアド・ホック・チーム [ad hoc team] の機能が採用されている。日本の規約では企画委員会という名称によって班長会議の委任を受けて構成するという形で発動させてよいことになっている〔規約第498条〕。いわばパトロールシステムを母体とした班長会議の下部組織という構成である。以上は年長部での話なのだが、これが、青年隊でどのように展開されているのか? 規約をさぐると、青年隊の運営は、すべて隊会議1本にゆだねられ〔規約第524条〕班長会議も企画委員会も規約から除外されているのは、一見して不思議である。年少隊でさえ組長会議がある〔規約第438条〕のに青年隊に班長会議がないのだから……。

そこで、英國のP.O.R. では、これがどうなっているのか? 調べてみると——やはり、隊会議でやっている。mate council なんてものはない。ふーむ、そうか、と、うなって、次を読む。すると、第259条に——

The Crew may be divided into teams or Pat-

rols as and when necessary for any particular purpose.

(訳) クルーは特別などんな目的に対しても必要あるとき、クルーをいくつかのチームまたはパトロールに分けてよい。

第260条には——

- (1) A Rover mate is a Rover elected annually by the Crew with the approval of the R.S.L., in order to help in its leadership.
- (2) There should be one mate to every four to six Rovers.
- (3) Rover mates wear uniform as in Rule 288, and badges as in Rule 319.

(訳) (1) ローバーメートはローバーであって、毎年クルーによって選出され R.S.L. から承認されること。それはクルーのリーダーシップを援助するために選出される。

- (2) 4~6人のローバーごとに1人のメートをおくべきである。
- (3) ローバーメートは規約第288所定の制服と規約第319所定のバッジ類を着用する。

と、いうことである。

これによると、ローバー部門では、パトロールを設けなくてもよいような印象をうける。may be とあるのは特別の目的上必要なときには設けてよい——と解釈されるから。特別の目的があり、必要なときに限ってパトロールを設けるのであれば、毎年、メートを選出したり、メートのため特に服制を規定する必要はなさそうだ。いったいなんのためにこの規定があるのか? 私にはわからない。

そこで、しいて解釈すれば、R.S.L. を助けるために、mate を常時おくにはおくが、そのメートたちは Crew の運営を助け R.S.L. の指導を助ける副長格であるらしい。必要ある場合 4~6人をもってパトロールを編成し、各パトロールに1人ずつ mate がつく——つまり班長役をすると、いうことになるが、この

解釈でよいのだろうか？そして、このパトロールはときとしてチームと称してもよい。この場合これはad hocという性格をもつただ——と。

この、私の解釈には、まだ確信がもてない。そこでギルウェルのローバーコースは、この点をどう説明しているか、私は、この一点に絞って追求してみた。次に引用する一文は、たいへん参考になった。

As to method, at this juncture there is a little to say, except that the Patrol is a good working unit within any Rover Scout Crew, but it should not normally be so large nor so definite as the Scout Troop. Many Crews manage well with no Patrol, using a system of pairs or buddies, others use the ad hoc Patrol System, bringing together into a Patrol those Rovers who have a common interest whilst that interest is being pursued, forming other Patrols on other occasions. Probably most success has been achieved with a combination of methods, a fixed Patrol, an ad hoc Patrol, pairs, and, to some extent, individuals.

(訳)その方法については、この危機（場合）にあたって、少々いうべきことがある。どのローバースカウトクルーにおいても、パトロールというものが、よいはたらき（うごき）をする単位だということはいうまでもないから、それはそれとしておく。けれども、そのことは、スカウツループー少年隊一におけると同じように大きく取り扱われたり、しゃくしじょうぎに、正常に考えられてはならない。パトロールなしに、うまく運営しているクルーも、たくさんあるのだ。なかには2人1組とか、3人組の制度でやっているクルーもあるし、アド・ホックのパトロールシステムを採用しているクルーもある。あるパトロールに、このアド・ホックを併用するものもある。それはローバーたちが、共通の興味をもつ場合のことだが、他方また、興味追求のため、別のパトロールを組むということもときとしてやっている。要するに成功の要訣（ようけつ）は、固定のパトロールと、アド・ホックのパトロールと、2人組、そしてある限界までは個別（1人組）という各種の方法を、まぜあわせた方法を用いることにある。

私はこれを読んで、次のような学習をした。

○パトロールとは「形」ではなくて「動き」である。すなわち「パトロールする」という動きが主

であって、形は従である。

われわれは、主客転倒しているのではあるまい？すなわち「形」にとらわれすぎて「動き」をあまり重視しない。「形」の概念が先行するため、訳語としてこれを「班」と名づけるが、この訳語は、ほんとうは、正中していないようである。パトロールそのものは班ではない——と、いえるようである。

○要するに「動き」がたいせつであるのだから、ローバースカウトのような、大学生もいれば職域人もいる、いろいろな職業人をふくんだ生活人の構成体においては、少年スカウトのような集会活動率はあがりっこない。つまり「動き」が制限される。したがって、動き得るようなシステムまたはメソッドが要求される。そういう意味で、少年隊と同質同格な班制度はとれないのが当然で、むしろ、このほうが原理なのであろう。

○Mateという語は班長をあらわす場合もあれば、班がない場合は副長格であるらしいこと。ゆえにこれを班長と和訳することは適切でないこと。

○以上の見方から、先にあげたP.O.R.第259条ができているのだと思う。（もう一度そこを読んでほしい）

○なお私は、少年隊でも、班というものはその「動き」に生命があること、「形」だけそろっていても、それが「動かない時計」であるならばアクセサリーでしかない、と警告したい！

○これについては、今後も研究したい。

(2) 私のうけたショック——宗教と道徳

私は、この研究作業を、今年（1960年）の新年早々から始めた。そして、“Rovering to Success”の翻訳と並行して進めた。翻訳の方は6月17日に一応訳了できたが、本稿のほうは、雑誌の紙数に制限があるため、本年いっぱいいかかるという計画によった。

さて、私は、“Rovering to Success”を訳了した日、次のような訳後の所感を書きしるした。――

「この本は、スカウティングの奥伝書である。私は今、その奥伝を味わう。これまで読んだ本は、初伝書や中伝書にすぎなかったことを顧みる。けれども奥伝のなお上に秘伝があるのだ。秘伝書は、もう、人間が作った言語や文字では書かれていない。それは、B-Pのいう「大自然」という書物に、大自然

がつけたサインで書かれている。このサインは、神の国に至る追跡サインだと、B-P は暗示した。このサインはすべての差別を越えるものだから、仏教徒の私にとっては、仏の国への道を示すことと信ずる。これぞまことのウッドクラフトなるかな！」と、少々ハッスルしたのであった。

これは私が、“Rovering to Success” の「無宗教」の章で、大きなショックをうけた所産である。

私は、また筆をとってメモを書いた——それは「もし、キリスト教の教えがなかったらB-Pは、単なる軍人、南亞での英雄、もしくは、一介のスケッチ画家、そして旅行家、追跡の名人——に終わっていただろう」と。すなわち、宗教というものが、人づくりの大成につくす偉大なはたらきに、目をみはったのである。それに対して、われわれはどうなんだろう？ 文部省は、宗教でなく、道徳をもって教育、人づくりの、テコにしようとしている。その影響なのか、日本のスカウターたちは、スカウティングをおしての教育を、やはり道徳をもって割り切ろうとしている。すなわち、日々の善行、他人への奉仕——というものをして道徳上の美德としてすすめている。“おきて”的12カ条も、道徳の徳目のように指導している。

このことは、カブや少年スカウトたちにとっては、学校教育が道徳に基づく方針であるから、それでもよいだろうが、シニアスカウトやローバースカウトの段階になると、通用困難になる。なぜか？ B-P は、「ローバーになることは、ゴッドのチームに加入することだ」という。宗教を無視してローバーリングは成立しないからである。日々の善行も奉仕も、ローバー段階では信仰から発動せねば意味がうすい。

私は、ここにおいて、ローバーリングだけでなく、カビングをふくめたスカウティング全体のねらいは世界に通用するりっぱな市民一公民一性を身につけさせる教育運動にちがいないが、B-P はそれを宗教を土台として、宗教の土壤に、その種子をまいた。そして彼の信仰の力によって、それを育てたのである。——と解釈する。

Scouting derives from Christianity, for it sprang from B-P's Christian faith.

(訳) スカウティングは、キリスト教義から起源を発し、それが芽を出したのは B-P のクリスチャンとしての信仰によってである。

この重大な一文は、ギルウェルで実施されている特別コース—Duty to God コースーのテキストの冒頭にあることばである。

そうなると、キリスト教国でない国では、スカウティングは通用しないのか？ という疑問が当然おきるだろう。このことは、わが日本でもある程度おきる問題である。私は、これについて次のように考える。

○信仰は元来、個人的のものである。日本では特に憲法第20条に「信教の自由は何人に対してもこれを保障する」とあるから、日本がキリスト教国でなくても日本のクリスチヤンにはスカウティングは通用する。

○たとえ、その国がキリスト教以外の宗教を国教としていても、1924年のコペンハーゲン宣言の次の条文によって、スカウティングは通用する。

○また、どんな宗教の者一個人一人にもスカウティングは通用する。スカウティングは、平等無差別〔ユニバーサル〕であるから……。

1924年のコペンハーゲンの宣言書の3段目に——

It is UNIVERSAL in that it insists upon universal fraternity between all Scouts of every nation, class or creed. The Scout Movement has no tendency to weaken but, on the contrary, to strengthen individual religious belief.

The Scout Law requires that a Scout shall truly and sincerely practise his religion, and the policy of the movement forbids any kind of sectarian propaganda at mixed gatherings.

(訳) スカウト運動[it]はユニバーサル—平等無差別—世界的一である。すなわち、あらゆる国・階級・信教の別を超えてスカウトのあいだに兄弟愛の普遍することを強調する。スカウト運動は個人の宗教的信仰を強めこそすれ弱めようとする意図はない。スカウトのおきては、スカウトが真に誠実に自分の宗教を実践することを要請する。本運動は信教を異にする人々の混じる集会においていかなる宣教の宣伝をも禁ずる方針である。

以上の根拠によって、神道でも仏教でも、金光教でも天理教でも、新興宗教でもスカウティングは通路をひらいている。回教徒にもユダヤ教徒にも行なわれている。

——それでは——

なぜ、われわれの大半は、道徳の段階でスカウティングの精神面を扱っているのか？ こういう問題を考えてみよう。それは——

○宗教的に導く自信がない。

○宗教のことは軽率に扱ってはならない。めんどう

なことがおきやすいから……。

○子どもが宗教のことを知ろうとしないし、話してもやってもわからないから。

同じことが英國のカブリーダーの口からも B—P に向かって発せられた。「カブみたいな幼い者に神のことがわかりますか？ 無理ですよ、それは……」 B—P の答。「それを教えるのが教育というものです」

○日本の宗教は、多神教で、雑宗教で分立しており漠然（ばくぜん）としているから、どれにも通ずるようなものがつかめない。一オーブンの隊の場合

○へたに、ある特定の教義に即して扱うと、その宗教の宣伝のように親から見られやすい。一クローズの場合一オーブンの隊で、その隊長が特定教派の宗教家の場合

というような声を私は耳にしている。はなはだしいのは宗教は教育にとってタブーだという。こういう考え方とはいって、なにに原因するのだろうか？

私は近刊の「日本の宗教」（久木幸男著、弘文堂発行、290 円）を興味深く読んだ。同書の序文から、参考になる文を引用してみよう。――

「わたしたちが、宗教についての知識をふじゅうぶんにしか持ちあわせていないのは、一つには明治以来のわが国の学校教育のせいである。」

「天皇崇拜を子どもたちに注入することを最高の目標とした戦前の日本の学校では、宗教についての客観的な理解を進めるような教育が行なわれる余地がなかった。そういう教育は天皇信仰注入のじやまになると考えられたからである。」

「戦前の教育のいっさいをご破算にしたはずの戦後教育の中でも、宗教についての客観的理験を与える教育は、なおざりにされたままであった。」

「戦後の民主教育が、特定宗教の宣伝にわたる『宗教教育』を排除したのは当然ではあるけれども、宗教の客観的理験を目指す『宗教についての教育』までもが学校教育の中で正当な地位を与えられなかつたことは、ある意味で不幸なことである」と。

私はこの久木氏の分析の当否について自分の所見を述べることを保留するけれども、こういうことを今まで書いた人がほとんどなかつたという点で考えさせられるフシがある。

どこの国でもその文化・芸術・政治・経済はみな宗教を母体としている。教育とて、その例外ではない。日本も近世まではそうであった。それが徳川幕府の政

策によって儒学一特に程朱学一を文教の主流におき、周代の階級制度維持をとりいれて、將軍中心の封建道德を作つて思想統一をしたため宗教は骨ぬきにされたことは定説となっている。幕末に起こった尊皇論や国学の影響、そして儒学でも宋学の陸王学の盛況によつて幕府はたおされ、天皇親政の代になると、こんどは天皇中心となり、陸海軍が天皇を大元帥として統帥権の大もととしたことも関係して、天皇信仰までに発達した。天皇は神格されるにいたって、宗教はその光をうすらげられたことは見のがされてはならない。教育勅語を中心とした「國民道德」が宗教にかわったといえよう。

ところが、道徳といふものは、その時代時代の生活上の条件にマッチした規範であるから、時代が変われば通用しない。封建社会に、それがどんなに、りっぱな道徳であっても、今日的にはヒューマニズムに反するものもある。ときによつては為政者が、自分たちの安泰や特権を維持する陰謀として、道徳らしいものを制定することもたぶんに実例がある。そういう相対的な人工的真理に便乗したりするような道徳さえあることを思うとき、それがはたして教育をささえる、時代を越え、空間を越えた柱になりうるだろうか？

期待される人間像とか、道徳教育とか、いうものがどれだけ宗教信仰を励ましてゐるか、私には疑問である。

―― 考えていただきたいこと――

けれども、日本国憲法も、教育基本法も、決して宗教を排除してはいない。

憲法第二十条

- ①信教の自由は何人に対してもこれを保障する。いかなる宗教団体も国から特権を受けまたは政治上の権力を行使してはならない。
- ②何人も宗教上の行為、祝典、儀式または行事に参加することを強制されない。
- ③国およびその機関は宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない。

とある。

さらに、教育基本法には

第九条 宗教に関する寛容の態度および宗教の社会生活における地位は、教育上、これを尊重しなければならない。

②国および地方公共団体が設置する学校は特定の宗教のための宗教教育その他宗教的活動をしてはならない。

とあって、両法とも、宗教の存在を肯定し、かつ尊重している。ただ、その悪用をいましめて条件をつけているにすぎない。すなわち、

○特定の宗教が国から特権を受けたり一国教化禁止一政治上の権力を行使したり一政教分離一

○国およびその機関、したがって国および地方公共団体が設置する学校一官公立学校一では特定の宗教のための宗教教育や宗教的活動をしてはならない。

ということである。これによると官公立の学校でも不特定の宗教のための宗教についての教育をすることは違法とはならない。すなわち「宗教とはどんなものか?」ということを教えてもかまわない。むしろ「教育上、これを尊重しなければならない」のである。

人々は、この条件を、思いがいして、教育上、宗教のことについての教えるのはタブーだと思っている。

さて、ボーイスカウトは、学校ではない。いわんや官公立のものでもないのだから、宗教のなんたるかを教えることは大手をふってやってよい。ただし、リーダーが教導職の人でない場合、リーダーが特定の宗教に関する宗教教育を直接的にすることには一考を要する。これは専門の人一僧侶・神職・牧師一を招いてやっていただくのが親切なやり方である。一般のリーダーは本職の宗教家に橋渡しするそのきっかけを作ってやればよいのである。—B—Pのことばによる

宗教章、スカウツオウンは、その道しるべである。

—スカウツオウンの意義—

規約第19条に

スカウツオウンは、スカウト各自の信仰心を高揚するため行なわれ、それは「ちかい」と「おきて」の実践をより高めるものである。

とあるから、スカウツオウン—Scout's Own、スカウトが主体となり、司会して行なう礼拝式一は、うんとやっていたかねばならない。ただし、やり方について日本ではまだ、きまった例ができていないのは残念

である。

私は、これは—

「ちかい」「おきて」を、道徳律からだけでなく、むしろ宗教思想から、あるいは自分の信仰のエネルギーで実践することを勵ますところのプログラムだと解釈している。だから「神(仏)と……」—英國は Duty to God—とうたっている。もし「ちかい」「おきて」を道徳の徳目程度にとり扱うリーダーがいるならば、それは学校教育から一步も前進していない一種の「修身科」に類しあしまいか?

—終りに—

日本には、宗教教団が設立した私立学校がたくさんある。そういう学校に通っているスカウトは、これまた多いだろう。また宗教団体が育成しているスカウト団もたくさんある。彼らは、特定もしくは不特定の宗教教育にふれる機会に恵まれている一と思うが實際どうなのだろうか?

またそういう教団は、大学を設けている。その大学にはすでにいくつかのローバークルーが、生まれている。この稿を読んでいる読者のなかにも相当いるはずだと思う。

そこで、スカウティングと宗教、特にローバーリングと宗教、ということについての私の今後の研究を助けていただきたい。

そして、日本の青年スカウトは、はたして、日本の特異な宗教事情のもとに、宗教という土壤に、ローバーリングの種子をまき、その発芽が可能かどうか、そのデーターを出していただきたい。もし発芽が絶対に不可能だときたら、日本のスカウティング全体は、「クォ・ヴディス?」(いったいどこへ行くのだろうか?)

—終り—

2月号から10回にわたったこの拙劣な作業に対してたえず後援し、励ましてくださった方々に深謝する。

(中村) 40. 9. 27.

みなさん、ことしのジャンボリー・オン・ジエアには参加されましたか。

来年は日本ジャンボリーが岡山県で開かれます。ハム局をお持ちのスカウト、指導者のかたは、次のことを日本連盟へお知らせください。

- ・局名
- ・氏名 年令
- ・BS 所属 役職
- ・住所(局所在地)
- ・免許の種別

ハムの
みなさんへ!